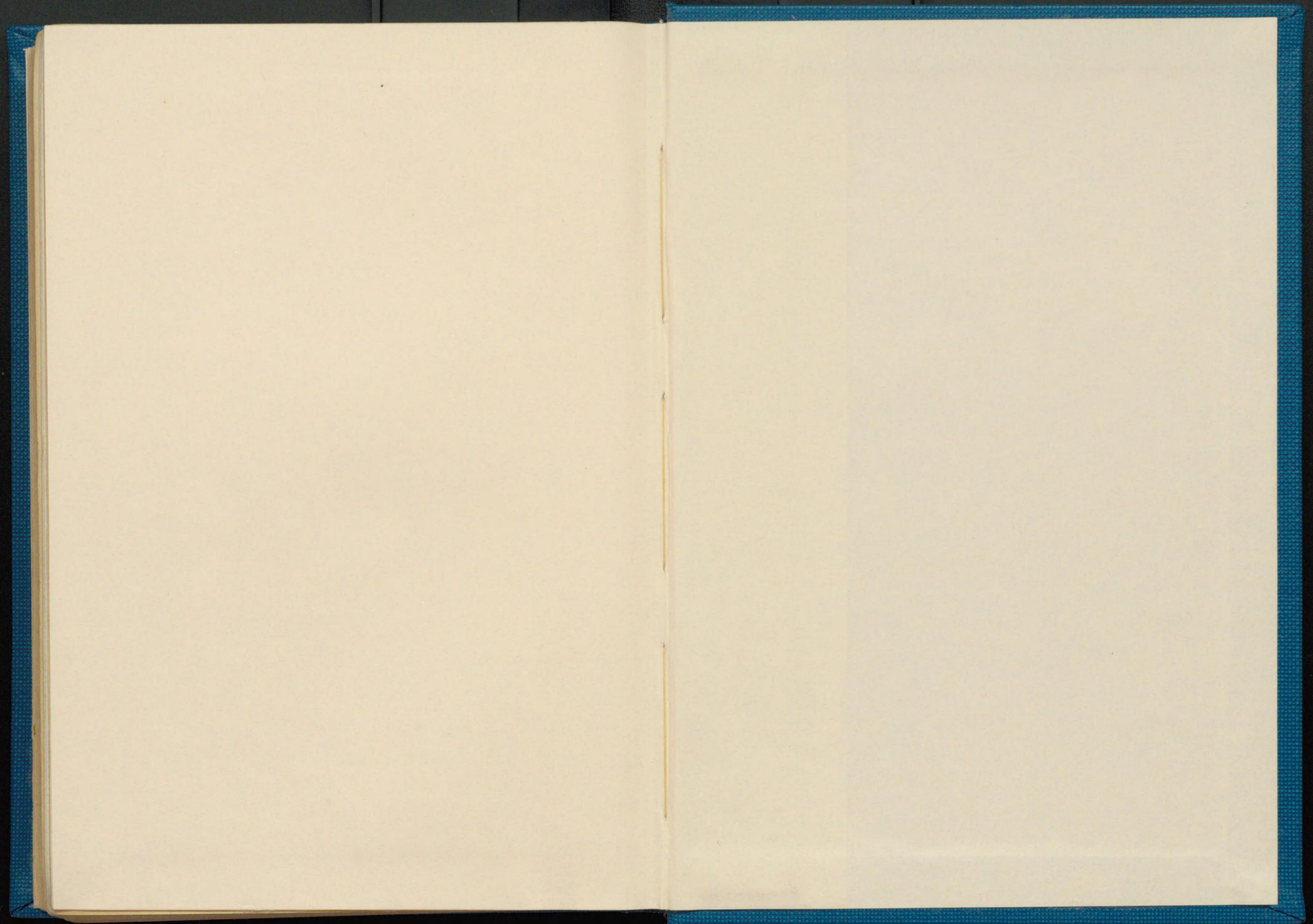
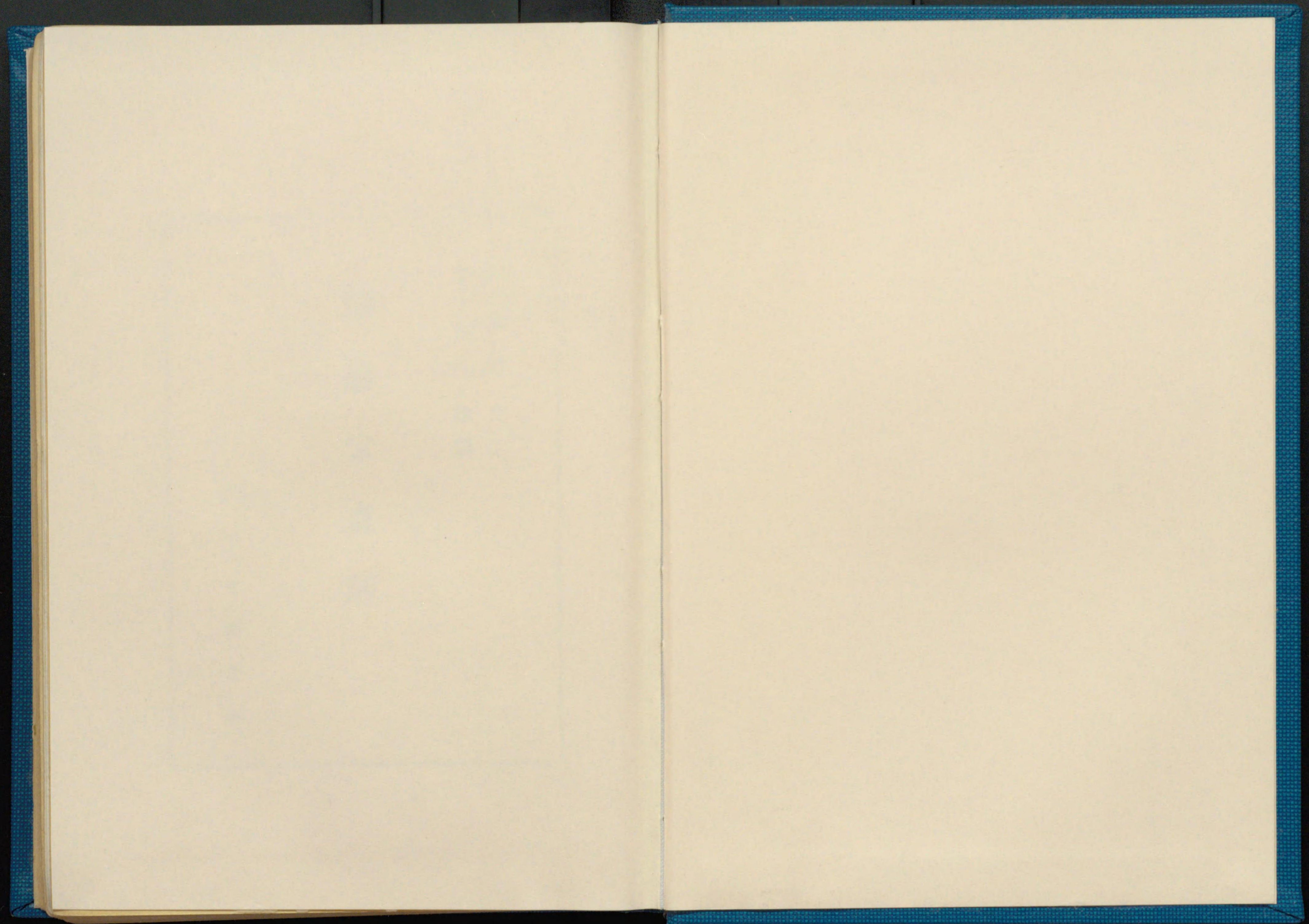


710
134

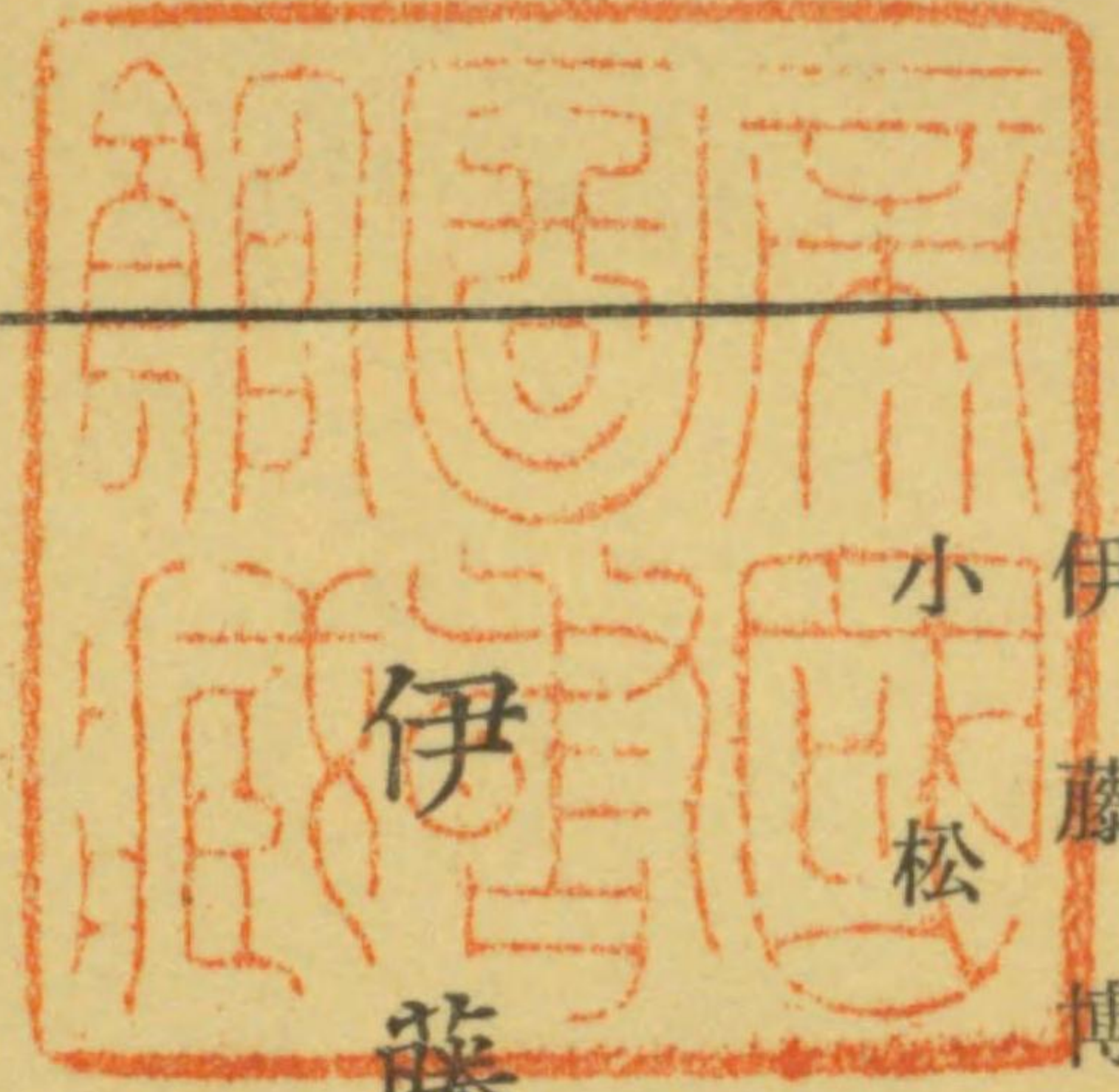
710-134

1200501584807





AZ 1A-29



伊藤博
小松

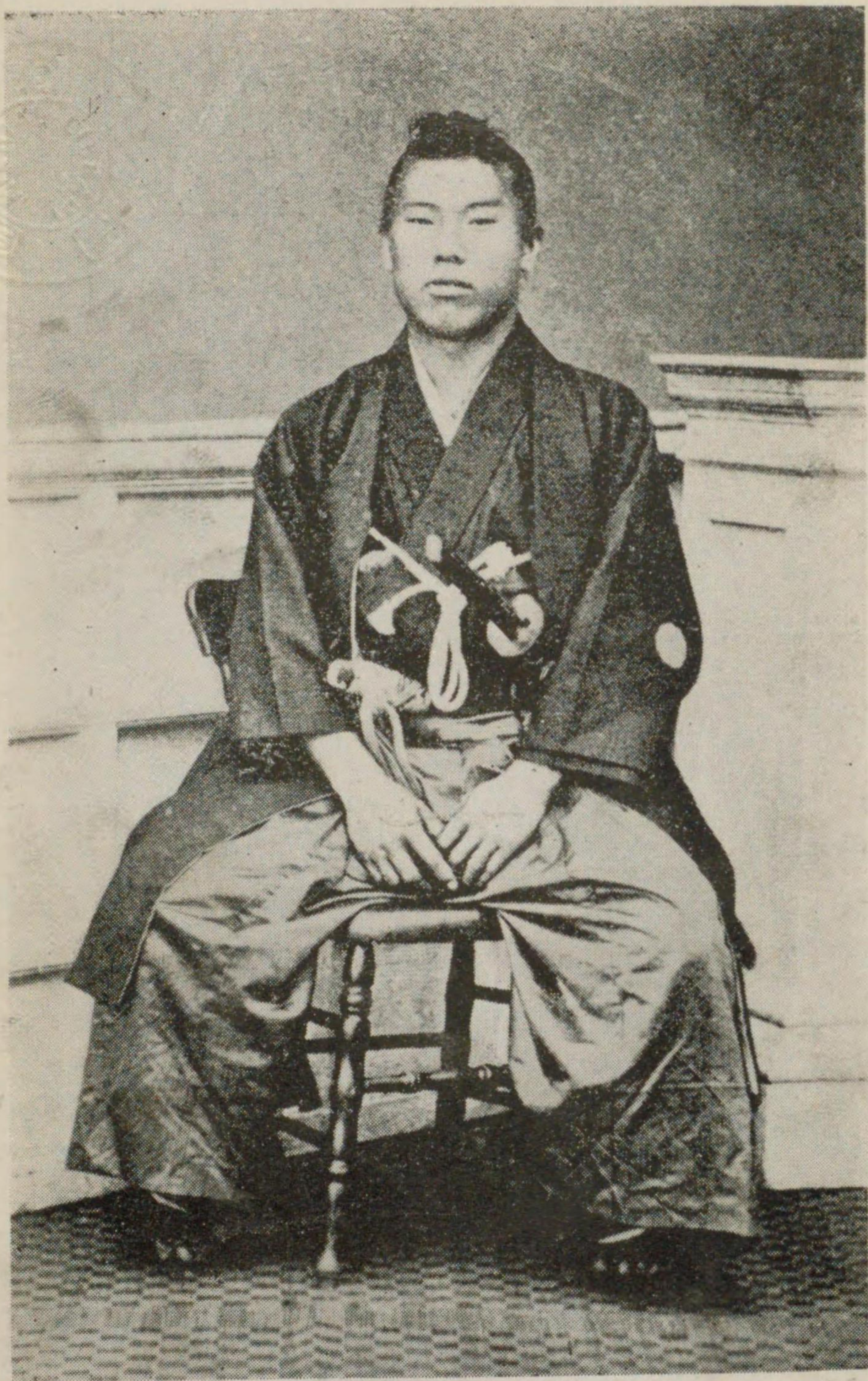
伊藤

文述
綠編

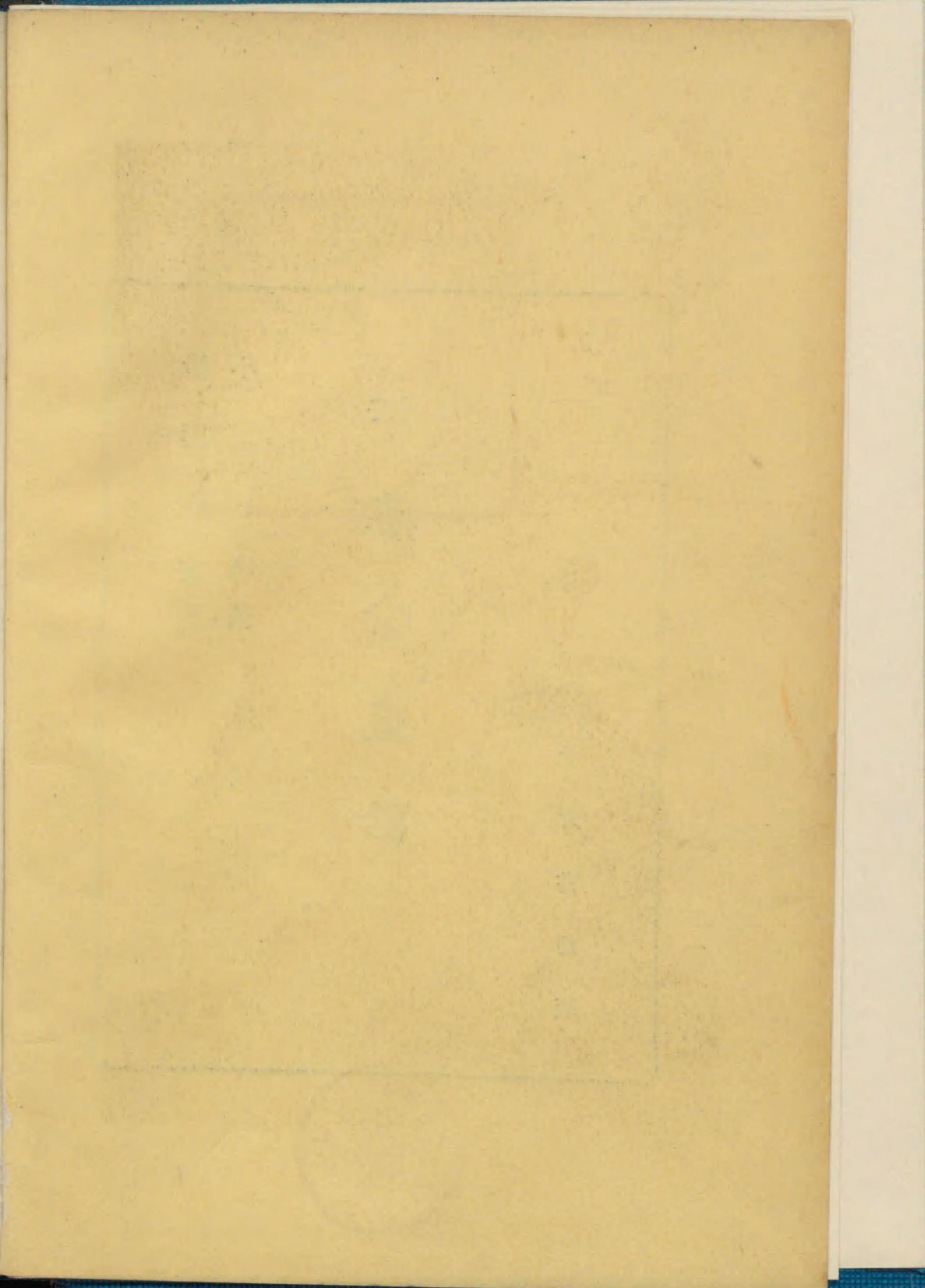
公直話

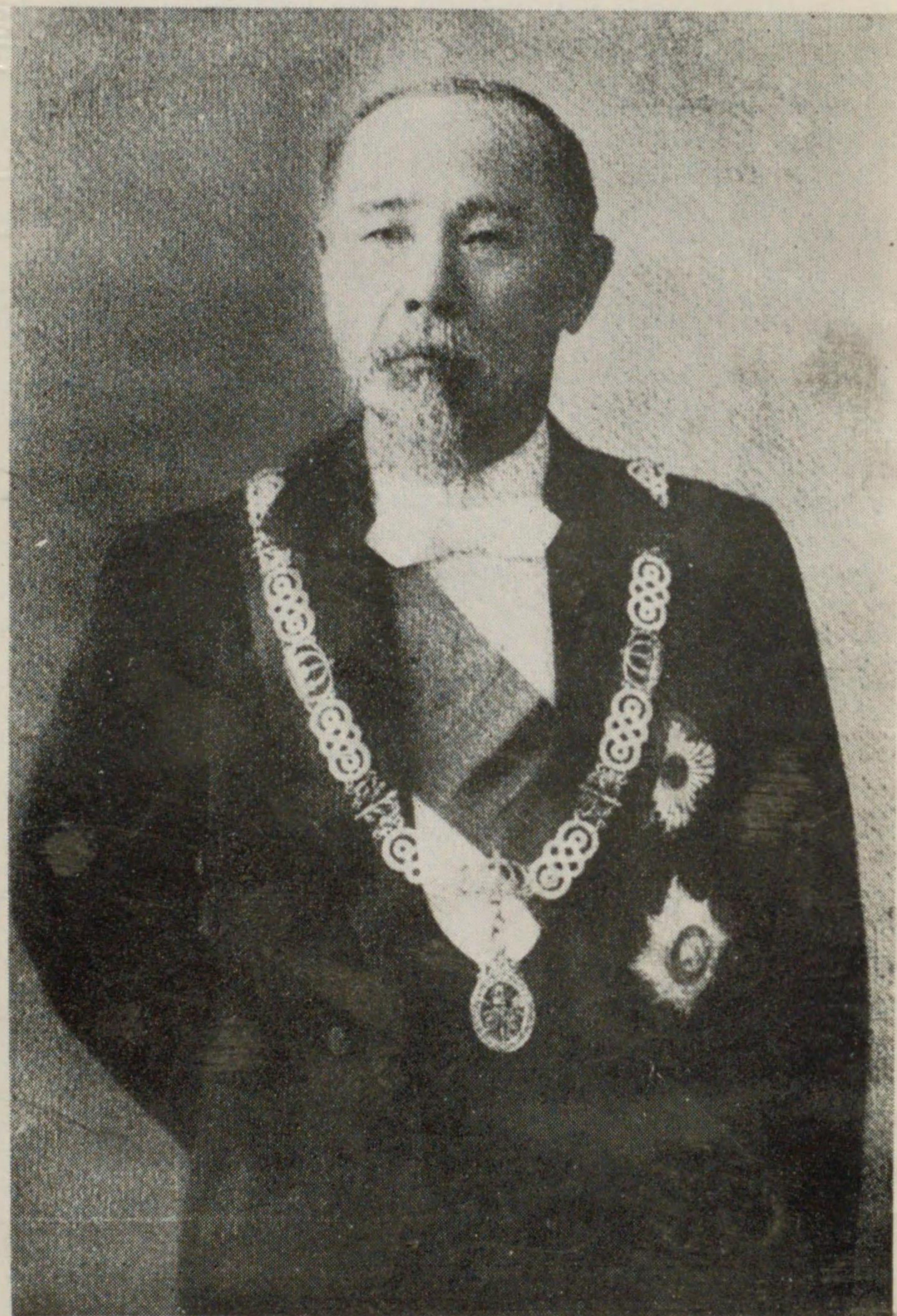
千倉書房版



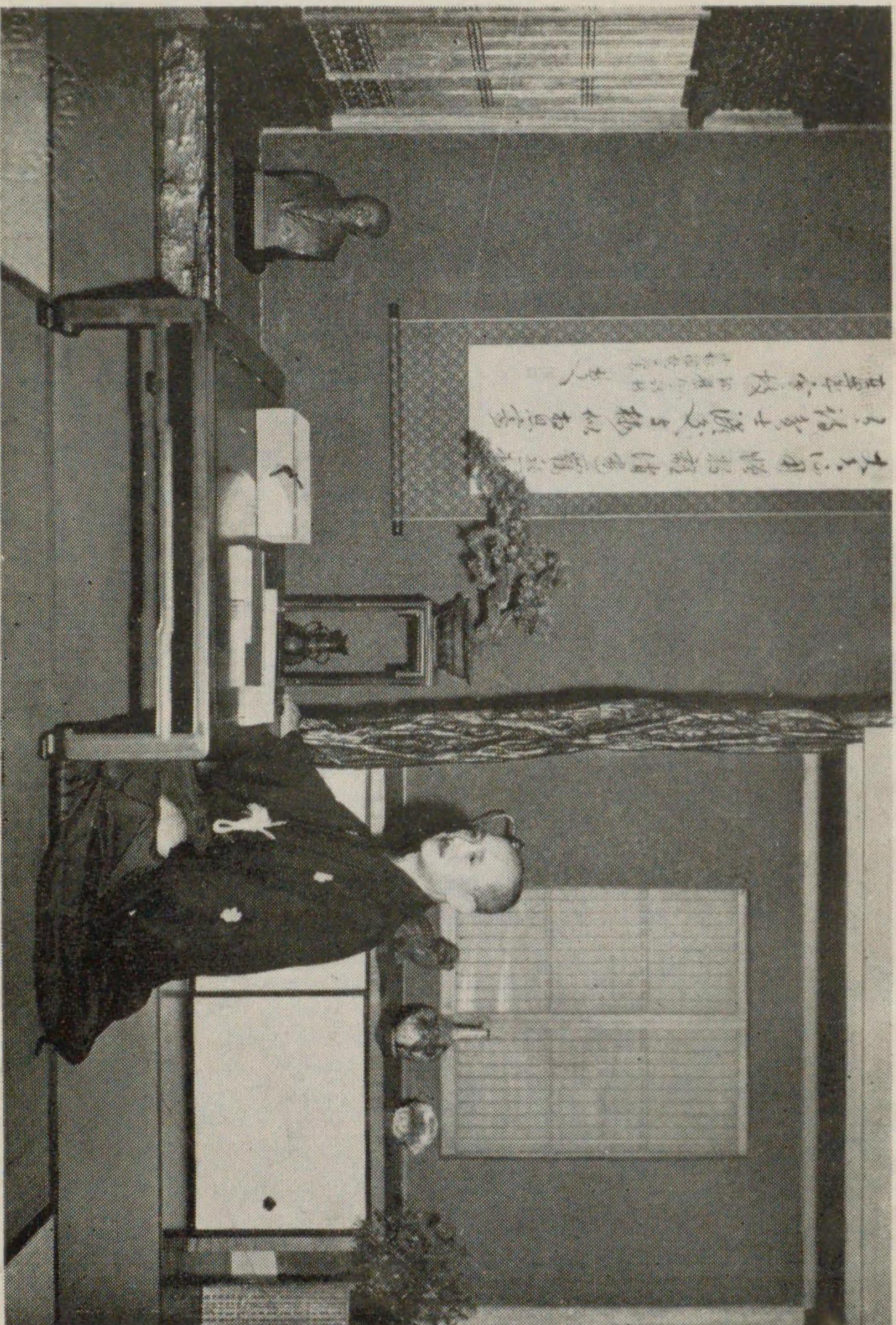


公藤伊の代時末幕
(歳三十二)年三久文





公藤伊の代時監統國韓



伊藤公筆並に像と書編者

はしがき

きはしき

伊藤博文公は幾多尊稱の持主である。明治中興の柱石といはれ、日本憲政の恩人といはれ、東洋の英傑といはれ、世界の偉人とさへいはれた。維新以來四十有餘年の間、終始一貫國事に盡瘁し、夙に海外に遊んで天下の大勢を達觀し、攘夷論沸騰の眞最中に開國進取の大義を喝破し、爾來率先して文物制度の改善に努め殊に帝國憲法を草創して國體の精華を發揮し、外は樽俎の間に折衝して、不平等條約を改訂し、日清・日露の兩役に際し、或は首相として或は元老として機宜の措置を講じ、臺灣・關東・朝鮮等の扶植の素地を造り、終に我が日本をして世界列強に伍するの盛運に達せしめたる大功偉勳は昭々として青史に明かであるからこゝにくだくしく敘説する必要もあるまい。唯だ私の最も敬服してゐる公の私

人としての風格に就いて、少しく述べて置きたいと思ふ。

古來英雄豪傑といはれる人も、赤裸々の個人として見ると、案外値打がなく、詰り潰しのきかないものが多い。獨り公に至つては學者としても、書家としても又詩人としても、優に一家を成すに足る人であつた。

公は戯れに俺は英語教師をしても飯が食へるといはれたことがある。私は大磯から新橋まで公と汽車に同乗した折、コサツク兵の由來を教へてやるとて、手提カバンの中からピーター大帝傳の原書(Peter the Great)を取り出し、着驛まで二時間餘りも音讀して聞かされたことがあつた。私はなるほど英語教師位の資格はたしかにあると感服した。その後間もなくエール大學は法學博士(J. I. D.)の學位を公に贈つた。

公が書を能くしたことは、公の筆蹟が昨今數百圓若くは數千圓の市價を維持し

他の書家の追従を許さない事實に照らしても明かである。それは固より人物の偉い爲めでもあらうが、書そのものにも眞價があるに相違ない。岡崎邦輔翁は、『伊藤公の書に於ける、宛かも美人がその姿を明鏡に寫し、自ら恍惚として見られてゐるやうな趣がある。』

と批評してゐるが、いかにも公の書はその人の如く典雅な風韻を具へてゐる。詩に至つても、矢土錦山、森槐南らさへ、玄人の壘を摩するものとして公の作を推稱した位で、かの有名な七絶

豪氣堂々横大空

日東誰使二帝威

高樓傾盡三杯酒

天下英雄在二眼中

の如き、語調の餘りに高邁なところから、公が漢土名手の作を揮毫したものだといふ風説が傳へられたことがあるが、今現に箱根環翠樓所藏の一幅には明治元年

所作と書添へてあるから、この詩は公の自作たるに相違ない。
又公の晩年の作に係る

寒煙十里 没二平原
漢水欲枯 秋亦老

暮色荒涼處 々々村
沙光雁影月黄昏

などは、唐詩中に混入するも殆ど鑑別しがたいといった詩家がある。

或人は公を評して象の鼻といった。その譯は大木を倒すことができると同時に
小さな針でも拾ひ上げ得る能力を持つてゐたといふのである。いかさま大宰相た
る大器を懐きながら、またよく細事にも通じてゐる人物は、古今東西に絶無とい
へぬにしても、餘り多くはあるまい。

本書は公私細大各方面に渉る公の直話を蒐集したものである。その中には達人
としての崇論もあり凡人としての卑語もあるが、いづれも今人の訓戒となり若く

は示唆となるものばかりである。

これらの直話は、末松謙澄・大岡硯海・大橋乙羽・古谷久綱・坪谷水哉諸氏及
び私どもが、親しく筆記して公の検閲を経たものである。實は本書は以上六名の
共編とすべき筈であるが、末松・大岡・大橋・古谷四氏は既に白玉樓中の人とな
りて、相謀る由もなく、今尙ほ健在の坪谷君は昨今頻りに牙籌に忙殺されつゝあ
り、筆硯の間に閑遊するものは私一人となつたので、止むを得ず編訂一切の責任
を自ら荷ふことゝなつたのである。これは私に取つて、聊か公の舊恩に酬ゆる一
端ともなり、また老後の餘榮ともなるもので、洵に欣快に堪へない次第である。

昭和十一年仲夏 霞南山莊に於て識す

辱知小松 縁

目次

第一編 人物談

大久保利通を語る……………一
 木戸孝允を語る……………二
 西郷南洲を語る……………三
 高杉晋作を語る……………四
 三條實美を語る……………五
 岩倉具視を語る……………六
 島津久光を語る……………七
 島津齊彬を語る……………八
 吉田松陰を語る……………九
 長井雅樂を語る……………十

藤田東湖を語る……………三
 大村益次郎を語る……………三
 佐久間象山を語る……………三
 サー・ハーリー・パークスを語る……………六
 弘法大師を語る……………七
 狩野芳崖と橋本雅邦を語る……………七
 豊臣秀吉を語る……………七
 菅原道真を語る……………七
 森槐南と矢土錦山を語る……………七

第二編 實 歴 談

堀田閣老要撃の餘話……………七
 大橋順藏逮捕の話……………八

彦根藩迎輦眞偽偵察の話……………八
 長井雅樂暗殺計畫の話……………八
 來原良藏割腹の話……………九
 御殿山焼打事件の話……………一〇
 水戸浪士との関係の話……………一一
 薩長聯合經緯の話……………一一
 海外密航と故國の風雲……………一三
 各國艦隊の馬關砲撃の話……………一三
 艦上の和議談判……………一五
 長州政府打倒の舉兵……………一六
 長藩政府の内訌の話……………一八
 將軍暗殺の陰謀の話……………一九

雲隠れの木戸を迎ふる話……………一五四

江戸城處分の反對論……………一六六

兵庫論として奸物視さる……………一六九

外人の兵庫占領の話……………二〇〇

最初の外臣謁見の日の事件……………二〇四

詰腹切つた近藤昶一郎の話……………二〇六

廢藩置縣の決定……………二〇七

第三編 憲政談……………二二五

憲法立案の要旨と憲法政治の事……………二二六

憲法制定とその運用の事……………二四五

實踐政治に對する學者の責任……………二六三

第四編 修養談……………二七三

浴衣がけの予……………二七四

大和民族の將來……………二七四

人權政權の區別……………二七六

忠義の二字……………二七七

貯蓄と清廉……………二七八

書簡の効用……………二八〇

自愛說……………二八一

記憶自慢……………二八二

友情に泣く……………二八三

文吉に諭す……………二八八

名所古蹟の保存……………二九三

學生の覺悟……………三〇三



人物談

目次

修學の態度……………	三六
第五編 實業談……………	三一
實業の發達と國力の伸張……………	三三
日本鐵道の起源……………	三五

大久保利通を語る

大久保公と予は、以前から心安くしてゐた。その心安くなつたのは明治四年、外國に使節として一緒に行つた時からである。それ以來、公が死ぬまで大概百事相談をし合つてゐた。

公はなかく思慮もあり、決斷もあり、輕忽に事をしなかつた。その自重の力は殊に勝れたもので、しかも難事が起れば、率先して自ら事に當る人であつた。

公が維新前に力を盡された事柄は、藩の方にも朝廷の方にも種々あるが、維新の際薩長の兵を以て、徳川慶喜の西上を沮んだのは、實に公等の英斷の結果であつた。それから明治四年まで、藩制にも大政にも關係し、傍らヨーロッパに行つて各國の形勢を視察、大いに識見を廣めた。そしてその文明を日本に輸入しなければならぬといふ考へを起された。

その結果が、征韓論の反對といふことになつて現はれたのである。

然るに佐賀の亂が起つた時、公は内務卿を以て自から征討に出て行かれた。公が決して文弱に陥つた事無かれ主義の人でないことがわかる。尋いで臺灣事件で支那と葛藤が起るや、公はまた自ら請ふて、その難局に當られた。

臺灣事件當時の我が國情といふものは、所謂内憂外患交も到つた有様であつた。外には清國との交渉が思はしくない、内には種々の不平家が充満して、ともすれば政府の鼎の輕重を問はんとするといふ時であつた。

大久保公のその頃の態度といふものは、實に立派だつた。毅然として群疑の間に卓立し、一定の方針を把つて着々歩を進め、眞に人意を強うせしむるものがあつた。

この事件で愈よ清國に出使の決心を固められたとき、豫じめ予に胸中の計畫を告げて、『さてこの事を公けに臺閣に持ち出すに當つて、氣懸りになるは國內の形勢である。若し君が自分に代つて、内務の衝に當り、治安を維持してくれるならば、自分は身を挺して北京に赴き直接に清國の當路者と論判をして見たい。』

とその決心を打明けられた。

予は公の心中を察して、即座に公の出使に同意し、

『貴君の御不在中は、不肖なれども私が内務を引受けて、如何なる手段に訴ふるとも必ず國內の治安を維持させよう。御心置きなく清國との談判に従事せられるやうに。』

ときつぱり答へた。

『それで安心した。満足に耐へぬ。』

公は愈よ北京行の提議をされた。

かういふ大事の時に當つて、公は、いつも危険を避けず、自から奮つてその渦中に投ぜられた。これは實に、公が人と異つた特性を持つてをられたからである。

公は内務卿時代に、國內の産業を勧めることに就いても、種々の事を計畫して、よほど盡力せられた。明治七年には佐賀の亂、臺灣の事件があり、八年には朝鮮の江華島の事があり、九年には肥後の騒ぎ、前原の變があり、當時の世の中といふものは殆んど寧日がなかつたから、事業を勧めてみた所が、輒く効は期せられなかつた。それに人民の知識も開けてゐないから、勞のみ多くして功が伴はなかつた。

要するに公は、最も多難な指導の事に當られたのである。

それから十年の戦争であるが、この戦争には、公は予と一所に大阪に出てをられて、おもに政府で扱ふ仕事をやつてをられた。それで戦争が鎮定してから地方官會議を開き、地方制度上に着々改良を加へて行かうとされたが、その時不幸にも公は暗殺されてしまつた。

公の事蹟を、一言にして掩へば、危難の際に局面を維持する力が非常に強い、といふ一句で盡されると思ふ。いかさま公の時代は、日本が開けるか開けぬかといふ大切の時であつた。

明治六年、使節一行がヨーロッパから歸朝した。征韓論が破裂すると、政府の有力者は二つに分れて、一半は朝に留り、他の一半は野に下つた。その時、朝に残つた人達は、陣容を立直して庶政の革新に努めた。明治七年一月になつて、曩に征韓論の故に辭職した副島・板垣などから、民選議院を起せといふ建白書が出た。

ところが、これよりも前に、これに類する新制度の計畫に就いて、意見を持つたものが政府部内にもあつたのである。木戸公は、明治六年七月歸朝すると間もなく、歐米を巡視して得た新知見に據つて、政規典則制定の議といふものを發唱せられた。政規といふのは、今でいへば

憲法のやうなものであつた。

大久保公も大體同じやうな意見で、明治六年九月、予が岩倉大使に附いて歸朝し、制度調査のことを仰付けられると、大久保大藏卿は、憲法制定に關する意見書を認めて送つて寄越された。その書面は殆んど一冊にもならうとするほどの浩瀚なもので、その大要は今こゝで文章に表はすことは出来ぬが、凡そかういふやうなものであつた。

『世の政體を議する者、即ち曰く、君主政治、民主政治と。民主政治尙未だ採るべからず。君主政治亦た棄つべからず。それこの政體たるや、實に建國の大本、爲政の本源にして、至大至公のものたり。その政體確立せざれば國何に依りて立たんや、政治何に依りて爲さんや維新以來宇内を總攬し四海萬邦に卓絶せんとす。然るにその制や依然舊套を因襲し、君主專制の體を存す。この制宜しく用ゆるべからず。然らば則ち民主制となすべきか。曰く不可。我國人民久しく封建の壓制に慣れ、習性となること殆んど千年、この風俗人情を以て俄かに民主政治を用ふべからず。君主政治も亦固守すべきにあらず。』

文章は長いけれども、精神はほゞ右のやうなもので、碎いていへば、

『憲法政治は、今俄かに實施する譯にはゆかぬけれども、つまりは、それにならなければならぬ。憲法政治を施して國を立て、行かうといふには、各國の政體を見ても、民主とか、君主とか、それ／＼の形體がある。けれども要するにその國、その時の人情風俗に據つて基を立てたものである。舊に由つてこれを墨守して行くことは、國を保つ所以でない。我國に於ても、時勢・風俗・人情に循つて政體を建てなければならぬ。維新以來、宇内を總攬し、洽ねく四海に通じ、萬邦と並立するの方針を執つて來たけれども、その政治は依然たる舊套を因襲し、專制の體を存してゐる。この體たる今日に在つては之を用ゐざることを得ぬ。纒かに藩制を廢して郡縣となし、政令一途に出づることとなつたが、人民は久しく封建の壓制に慣れ、千年の久しきこれが習性となつてゐるのであるから、急劇なる變動をこれに與ふことは、勿論國を保つ所以でない。しかし將來に期する所は、我が人情・風俗・時勢に循つて立憲の基を樹つることではなければならぬ。』

といふのである。詰まり、漸進主義の立憲政治論であつた。

世間には大久保公を目して壓制家のやうに思ふ者もあるやうだが、それは甚だしい間違ひで

ある。大久保公は早くより立憲政體を主唱された有力な一人である。その頃、封建の制度を廢して、王政復古となつてまだ間のない所へ、今度は憲法政治を持つて來ようといふのであるから、具合がなか／＼むづかしい。勤王論と立憲政治との關係を明瞭ならしめるには、憲法の力に俟たなければならぬ。大久保公の意見も、つまり君權を定めて、民權を限るといふにあつた。

予もこの事は輕々しくやつてはいかぬといふことを木戸公と論じた。その後になつて明治七年、前に話した民選議院の建白も出るし、十四年には大隈伯の建白も出た。けれども、いづれにしても、まだ、どうも研究が足らぬ。政體を定めるといふことは、國體に關係を持つのであるから、十分に過去を明かにし、將來も慮つて、これならば慥かに日本に適し、國家を利するといふ安心の出来るまでは、予も容易に左袒し得られなかつた。

大久保公が紀尾井坂で刺客の難に逢はれたのは、詰り西郷の爲めの復讐であつた。十年の戦争の時、西郷に黨した徒が『彼の忠臣を殺した』といふ恨みから來たもので、固より大久保公は、あんなことにならうとは思つてをられなかつた。

遭難の日は明治十一年の五月十四日であつた。

予は十年の戦争が終つてから後始めて開かれる地方官會議の議長となつて、これから地方制度も改良して行かうとした時で、たしか縣會なども、彼の時であつたと思ふ。地方官を召集して會議を開いた。

その時、大久保公は地方官を淘汰しなければならぬといふ考へを持たれた。この時分は松田道之などが、おもに働いてゐて、どうしても地方官を淘汰しなければならぬ。老朽はいかぬ、無能はいかぬといひ、また小縣を廢して大きな縣に合體させようといふ議も起つた。

大久保公の言はれるには、

『自分の方でも、地方官の人物を調べてみようが、君の方でもやつて欲しい。君は實際、會議の職掌に當つてゐるし、人間の賢愚適否もよく分かるだらうから、その意見を持ち出してくれ。』

といふ譯で、地方官會議が濟んでから、地方官の更迭に付いて評議が起つた。

その時大久保公は自ら重く執つてゐて、盲目判を捺す様なことは容易にされなかつた。そこ

で十三日に公は予の榎坂の邸にやつて來られて、

『地方官の仕事も、まだ悉く決定してをらぬから、君も忙しからうけれども、明日の評議にはぜひ出てくれ。どうしても君が出てくれなければ困る。』

と、わざ／＼その事をいひに來られた。予は、

『よろしい。出ませう。』

といつて別れたが、翌朝、佐々木高行と高崎正風の二人がやつて來た。

當時君側に在る侍補の事について、

『侍補ばかりでは君徳の培養に不足であるから、どうか大久保公にも宮内省の方を兼ねて、君側の方に盡力する様に説いてくれんか。』

といふ話をしてゐる中に、大久保公から手紙が來た。

(今から自分はすぐ参朝するから、君もすぐ來てくれ)といふ文意である。何んでも殺される僅か數分前に書かれたものだ。

それから予は二人に斷つて出勤した。赤坂の方から参内する。公は紀尾井坂から行かれた。

内閣に出ると、

『兇變を知つてゐるか。いま大久保公が殺された!』

といふことであつた。實に意外で残念千萬の事であつた。この時、公が予に送られた手紙は思ひも寄らぬ公の絶筆となつた。

これがその手紙である。

昨日御約束申上置候通大隈にも八時より参内之約束致し置候付御多忙と存候得共暫時御参朝

被下候様奉願候此段至急草々拜具

五月十四日

利通

伊藤 殿

大阪會議以後、島津公と大久保公と不和になつた。島津公は大久保公を退けようとして、その事が用ゐられなければ職を辭するといひ出された。

そこで予は島津公の所を訪ねて、

『どうも大久保を退けるといふ御議論ださうですが、大久保を退けてどうなさるお積りです』

といふと、公は、

『君は薩摩の事情を知らぬから、そんな事をいふが、折角の調停ながら、それは聽かれぬ。』
といはれた。

『それはどうも怪しからぬ事を仰しやる。今日私は薩摩の事情を承りに参つた次第ではありませぬ。國家の爲めに、大臣の進退に就いて御相談に参つたのである。』

『それはさうでもあらうが、おれも人の進退のことをいひ出しておいて、毎日登閣して顔を見るわけにはゆかぬ。』

『それなら参議だけ罷めさせたらよいでせう。』

『それならよい。』

といふ譯で、予はその事を大久保公に話した。

すると大久保公は、

『どうも外の事と違つて、賄賂をとつたといはれては、終始頭があがらぬ。君の親切はわかつてゐるが、自分の去就だけは自分に決しさせてくれ。』

といはれる。それも尤もの事である。

さあ、それから、島津公も出ぬ、岩倉公も退くといふ次第で、三條公も大久保公も困り切つ

た。そこで予は、

『よろしい。島津公の事は私に存じ寄りもあるから、お任せなさい。』

といつて、それから種々と執成してゐる中に、この事が上聞に達した。

勅命を以て、この國家多事の際、たとへ病氣でも勉強して出廳せよといふ御沙汰が下つた。

それで島津公も出れば、岩倉公も出る。大久保公も留任するといふことになつた。

公と西郷は以前はよく相倚り相輔けて、一方は軍事、一方は君側にあつて、兄弟もたゞならぬ間柄であつたが、政見の異同よりして征韓論の時から、提携が破れてしまつた。しかしながら、固よりこれは國に盡す政治上の見解を異にしたので、双方の心中では互に信じ合つてゐるに相違なかつた。

といふのは他でもない。西南戦争の起つた時に、西郷が這入つてゐるといふことを聞いて、大久保公は非常に驚いた。その時、打つてゐた碁をばたと止めてしまつた。この一事で見ても

その心持がわかるではないか。

木戸公は才識共に勝れた人で、どちらかといへば、寛仁大度、識量の廣い人といつてよからう。大久保公の方は沈毅で、忍耐力の強い人で、容易に進退するといふ事をしなかつた。木戸公は識の高いだけに、識によつて物事を判断して往かうといふ人だから、忍耐力の方では自ら大久保公に一步を遜つてゐた。その代り識力の方では、大久保公も木戸公に一目置いた。兩雄の取組みは、こんな具合のものだつた。

岩倉・木戸・大久保三公は、とにかく度量といひ、膽力といひ、時流に卓絶した點といひ、遙かに儕輩を抜いてゐた。

予が先輩として見る所ではこの三人に及ぶ者は一人もない。岩倉公などは實に偉いものだつた。三條公は立派な玉を見るやうな人で、これは勿論別格だ。岩倉公は、多少瑕瑾はあつたかも知れぬが、有功無比の器だつた。國を憂ふる上については三人とも鼎足の形で、その間に少しも甲乙はなかつた。

たとへ時によつて種々議論を上下することはあつても、その精神は國を憂ひ、國を治めて行

かうといふことに集中した。この點で外の者は到底三公と肩をならべることは出来ぬ。あゝいふ人々が出て、攘夷論だの鎖國論だのといふものを一變して、封建政治を打破つて郡縣政治とし、それから日本の前途を見透して斷然開國論を主張し、ヨーロッパ流の文明に日本を引張つて行くといふ決斷をつけたから、維新の大業ができたのだ。

新日本の建設はなんといつても、これらの人々の力といはなければならぬ。種々新しい知識を献替する者を探つて、その説を實行したから、今日あるを得たのだ。

大久保が參議兼内務卿として、大政輔翼の任に當つてをられた時、世間には種々の流言があつた。贅澤な生活をしたなどといふ説もあるが、それは嘘の皮だ。公が死んだ時には、金など一文もなく、却つて八千兩の借金が残つた位であつた。

公の一番好きなのは碁であつた。それもよほど好きのやうだつた。詩もちよい／＼あるが、詩人としては成功しなかつた方だ。しかし自分の志をいふだけのことは十分やられた。

木戸孝允を語る

予が初めて木戸公と知つたのは、丁度十八の時である。

木戸公の妹婿に來原良藏といふ人があつた。(來原良藏に就いては第二節の中に詳説してある。) 予はその人の薫陶を受けてゐた。その縁故で、木戸公が江戸に出るに就いて一緒に行かないかといはれるので、公に隨つて出て來た。それは予が十八歳の時であつたのだ。

それから予は、木戸公の屬僚になつてゐた。けれども普通に使はれるやうな待遇は受けなかつた。木戸公に愛されて、兄弟もたゞならぬといつたやうな間柄だつた。

その頃は、江戸に出て各藩の人と交際をするのが、第一の學問であつた。さうして、長州人の中では、交際の廣いことは木戸公の右に出づるものはなかつた。木戸公は、予に廣く各藩の有志と交つて、見聞知識を廣める機會を與へてくれたのである。各藩の有志の中には學者もあ

れば、勤王家もあり、洋學者もあつて、開國論を主張する。従つて予も幾多の交友を得、自分の見聞を廣めることになつた。

予は教へを受けて育つた位の仲だ。木戸公とは特別に親密であつた。ところが明治四年、ヨ

ロッパに使節に行つてから、少し妙な事が起つて、一時交際振りが變つたことがある。

それは——木戸公・大久保公などといふ人は、當時日本に於て必要缺くべからざる人であつた。政府を維持するといふ上に於ては、西郷以下人才がゐたけれども、それらの人は政治の方に向かなかつた。

そこで話が一寸飛ぶが、大久保公と予がアメリカまで行つて一時引返して來たことがある。

それは締盟各國と條約改正の相談をして廻はるに就いて、權限に不足があつたので、その追加委任を受けるために中途から歸つて來たのだ。大使一行の出た留守は、おもに大隈と井上がやつてゐた。山縣・西郷などもゐた。

で、大久保と予が歸つて來たところが、大隈や井上のいふには、
『どうも木戸や大久保に永く外にをられたのでは、内閣が持ちきれぬ。なるべく早く木戸・大

久保を歸朝させるやうにして貰ひたい。ヨーロッパを廻ることは、君が引受けて、木戸や大久保を早く還してくれ』

といふ話であつた。

ところが、それを誰であつたか、好い加減にいひ枉げた。(井上・大隈がいひ合せて、木戸・大久保を早く還すやうにしてゐる) といつた者があつたので、木戸公は頗る不快に感じたらしい。二三の者が謀つておれの進退を議するといつて悲られた。

それから予が出直して、アメリカからヨーロッパに行き、木戸公に會つた。ところが、公の予に對する態度が變つてゐた。どうした事か、予にはちつともわからなかつた。しかし予は氣に留めずに、その儘にしてをいたのである。

ある一日、イギリスのロンドンで、木戸・大久保二公が山口尚芳等と食事をしてをられた。予は書記官等を統轄して本國に報告書を送ることを受持つてゐたので、その中に、我々使節一行が日本に歸朝するのは、明治六年の夏を過ぎる時であらうといふことを書いて、印判を貰はうとした。

すると、木戸公は佛然色を作して、

『いつ日本に歸るか、わかるものか。そんなことを今からいつて遣る必要はない。とかく二三の若者がいひ合はせて、自分等の進退を議する様子がある。』

といつたので、始めて予は氣がついた。

『それは妙な話である。私が一遍アメリカから歸朝した際に、井上・大隈がかういつたことがある(どうも木戸・大久保兩人に永く外に滞在されては内が困る。なるべく早く歸つて貰ひたい)といふ話があつた。つまり内國の形勢からいつた事で、私もその時無理はないと考へた。何も悪意でいつたことではない。誰かその間に、讒言を構へたものがあつたことと思ふ。とにかく次第に依つては歸朝しろといふ勅命が下るかも知れぬ。』

とかういつたところが、木戸公は、それでもなほ不快らしかつた。

その後、フランスやベルギー・オランダ等を廻つて、ドイツに往つた。

ところが、青木周藏や品川彌二郎が來てゐた。その時、彼等のいふには、どうも君と木戸との交際がおもしろくないやうだから、我々が調和したいものであるとかういふのだ。予はこれ

に不承知を唱へた。予と木戸との間柄に就いては、お前達の調和を煩はすには及ばぬと断はつた。

するとベルリンに滞在してゐる中に、木戸・大久保二公に歸朝の勅命が下つた。大久保公はすぐに出發したが、木戸公は使節に離れて、ロシア・イタリアへ旅行に出た。それでは予と山口尙芳が、岩倉公に隨いて廻つて歸朝した。何んでも木戸公は明治六年の七月に歸朝した。

予が六年の九月に歸つてみると、征韓論がなか／＼熾んに起つてゐた。木戸公は、征韓論には勿論不同意である。しかし岩倉公の一行が歸るまでは、可否の論は定まらなかつた。予が歸朝してから、木戸公を訪ねたところが、公は、

『これから先き君の考へはどうだ。』

といはれるから、予は自分の意見を十分に述べた。すると、公は、

『さういふ君の考へなら、自分に於ては異存どころではない。全然同意だ。』

といはれて、頗る満足の體であつた。

日本をこれからどうしてゆくかといふ議論である。それが大變公の氣に適つて、ヨーロッパで起つた感情の行違ひが、渙然として氷釋してしまつたのである。

臺灣事件に就いては、木戸公は不承知で、たうとう辭職して國に歸られた。

その前年秋、西郷・板垣・副島等、薩摩・土佐・肥前の人々は、征韓論の爲に擧つて辭職してゐたので、人心恟々たるものであつた。予も木戸公と進退を共にしようといひ出したところが、岩倉公などは大の不承知で、予が辭職すれば、薩長分裂のありさまに陥るから、職に留つてくれといはれた。それで予は辭職しないで、専ら大久保公と一緒にやつてををつたのである。

そのうち臺灣に兵を出すことになつた。それで支那から、やかましくいつて來たので、大久保公が自分で使節となつて支那に往つて、始末をつけて來られた。それは明治七年の暮のことである。

それから、どうしても木戸公を起して政府に立たしめなければいかぬといふのが、大久保公の意見で、

『臺灣の一條に就いては所見を異にしたけれども、それは行懸上のことだ、自分の立場と木戸君の立場と違ふために、木戸君は辭職をして歸ることになつた。しかし自分は意見が合はぬからとて、やめてしまふといふ譯にはゆかなかつた。といふのは、西郷が征韓論で破裂してしまつても、自分がその後を引受けてゐる。だから自分が辭職すれば、政府は潰れることになる。かういふ経緯で自分は今日まで歩いてゐるのである。自分の本來の政治上の考へは、全く木戸君の識見及び知識に符合してゐる。従つて木戸君の驥尾に附いてやらなければならぬと常に考へてゐる。』

とかういふのが大久保公の説であつた。それで大久保公は山口まで木戸公を迎へに行くといふことを予に相談された。予もよからうといつたが、

『しかし貴君が山口まで往くことはよろしくない。大久保公が山口に木戸公を迎へに行くとあつては、政府の弱味を示すことになるから、貴君は大阪までおいでなさい。木戸公にも大阪まで來るように、私が取計らひます。』

といふやうな譯で、結局、大久保公と木戸公が大阪で出會つた。これが大阪會議までの筋道

その大阪會議の折、前以て大久保公は予に向つて、

『自分は自分の精神を以て説くが、萬一この精神が徹しなかつたときは、どうか君出て來てくれ。』

といふことであつた。

果して案の通り、木戸公は聴き入れなかつた。それで予は種々方策を考へてみたが、木戸公の意に適ふやうなことを行はなければ、事は成り立たぬと思つたので、先づ予は、

第一、政府の二三の者が集つて權力を専らにせぬやうに、元老院を設立して立法上の仕事を鄭重にし、且つ他日國會をも起すの準備をなさしむること。

第二、裁判の基礎を鞏固にするために大審院を起すこと。

第三、上下の民情を通ずるために地方官會議を起すこと。

第四、主上も政治に御力を御注ぎになる様な仕組にする爲め内閣を分離して、木戸・大久保兩公の如き人は内閣にあつて、一方には輔翼の事を爲し、別に第二流の人物を擧げて行政

諸般の責任に當らしむること。

この四ヶ條を案出して、大阪の五代才助の家で、大久保公とひそかに會見した。

『さて聞くところによれば、木戸公は動かぬといふ事であるが、無條件では動くまい。そこで一つの案を持つて来た。木戸公に面會する前に、先づ貴君に相談したい。貴君が同意なさるかどうか、それを慥めた上で、木戸に面會しませう。』

といつて今の四ヶ條を見せた。すると大久保公も、

『至極尤な意見だ。自分は同意する。獨りこの事のみ止まらず、自分はすべて木戸君の驥尾に附いて遣るつもりだから、此事も能く含んでゐて貰ひたい。』

といはれるので、

『それならよろしい。貴君とは、まだ面會せぬつもりにしておかう。』
と約して別れた。

それから予は、わざと木戸公を訪ねなかつた。そのうち公は予の來たのを知り、
『伊藤のヤツ來たか』

といふと、公は、ヂツと考へてをられたが、やがて、

『その通りに行はるれば出る。しかし大久保はどうだ、折合が出来るか。』

『出来るか出来ないか、一つ當つてみませう。大久保公が同意されたら、貴君は屹度出られるのですな。』

と念を押した。すると公は、

『とてもむつかしからうが、やつてみたまへ。』

といふので、話はすつかりおもしろくなつて来た。

それから大久保公がやつて来たが、もとより打合はしてあることだから、異論のあらう筈はない。そこで木戸公のいふには、

『俺は這入るとしても、初め板垣と會はなければよかつたが、板垣と種々話をしたから、彼を捨て置いて、俺ばかり這入る譯には行かぬ。』

といふ。

『それは何んとか話をしよう。』

と、それから大久保公にかういふ譯だと、話し込んだ。大久保公は、『自分はそのことは齒牙にかけぬが、木戸君がさういふお考へなら、萬事自分は木戸君の驥尾に附いてやる覺悟だから、同意する。』

といふ。

板垣の當時の議論は、どうしても議會を開かなければならぬといふので、民選議院の建白を出した後だから、少くも半分だけの官選でなくては承知ができないといふのだ。しかし半分官選の議會などは、とても行けるものではないから、井上が板垣の方を引受けてたうとう木戸公と折合がついた。

そこで木戸・大久保兩公と板垣・井上が集つて、會議を開いて酒を飲んで、大阪會議はおしまひになつた。

そこでその折合の付いた案件を、時の大臣たる條公・岩公・島津公に見せて、かういふ人たちに諮つて、實行するまでの運びにしたといつて、それを木戸公の意見として提出すると、御採用になつて、やがて制度取調の必要が起つた。

といつたさうだ。

この時、板垣は岡本健三郎や小室信夫と共に木戸公に會つて、例の立志社の民權論で、國會を開かなければならぬと云ふことを議論した。井上も来て、一番先に木戸公と會つて議論をした。それで予が佐賀屋に泊つてゐると、木戸公が遣つて来て、

『君が手紙を寄越して、大久保と面會してくれといふ話だが、會つたところで到底議論の合ふ氣遣はない。さうして俺が入閣したところが何んの効能もないから、出る譯にはいかぬ。それよりも君が大久保と申合せてやれば異存もなくてよからう。』

といはれるから、

『それは一つの御議論である。何の効能もないと仰つしやるが、効能がある様にしたらどうです。』

『効能がある様にするといつても、俺には別に考へもない。』

そこで予は、かの四ヶ條を出して、

『これだけのことを斷行すれば、一步を進める譯だから、貴君はお出になるか。』

四ヶ條案件の實施委員には、木戸・大久保二公と板垣と予との四人が命ぜられて、實際の事は予が専ら擔任してをつた。

そこで明治八年四月十四日の勅諭を起草することになつたが、その文章はよほどうまく書かなければならぬので、思案を凝らしてをると、井上毅が九州から歸つて來たので井上に書かせた。この時から井上を用ひたのである。それから、元老院を設け、大審院を拵らへ、地方官會議を起し、四ヶ條の内三つだけは行はれた。内閣分離論は別に異存はなかつたが、當時の情勢がそれを行ふまでに進まなかつた。

内閣分離論に就いて、板垣は最初不承知だつたが、東京に出てから、だん／＼内閣分離論を主張するやうになつた。島津公も分離論者であつた。予は計畫者であつたから、無論その支持者であるべき譯だが、意外の事件が起つて、分離論を敢行すれば始末のつかぬ情勢になつた。といふのは朝鮮の江華島事件といふものが起つて來て、對外問題の急を告ぐる際に内閣を分離するはよろしくないといふことになつた。

けれども島津公や板垣は、この際ぜひ分離論を實行しようといふし、大久保・木戸二公は、

予と同様、どうもかういふ事件が起つた時、分離は出來ぬといつたのが原因して、遂に破裂して、島津公や板垣は辭職した。

そこで木戸公は病中で引き籠つてゐるが、朝鮮に使節を遣らなければならぬ。就いては誰を遣つたらよからうといふ評議になつて、黒田を遣らう、さうして井上を副使として附けよう。かういふ事に決ると、予は井上に、

『今度朝鮮の使節に黒田を遣る事になつた。就いては君が副使となつて行つたらよからう。』といつた。

すると井上は始め朝鮮事件の如きは今日の場合問ふに足らず、打つちやつてをいたがよいとの意見を主張し、木戸公とも論じ合つた位だから、大不承知で、

『まあ考へてもみたまへ。そんな馬鹿々々しい事が出来るものではない。自分の從來の立場といひ、どうして副使として出かけることが出来るものか。』

といふ。そこで予は、

『尤もの事だが、それは長州人の短所だ。國家のためには、そんな私憤をなげうつて、大任に

「當らなければ困る。ぜひ行く決心を持つてくれ。」

「いつたが、どうしても不承知。だん／＼説いた結果、

『まあ考へさせてくれ。木戸君に對しても困る。』

と云ふから、木戸公に會つて、

『今度の事變に就いては黒田一人ではいかぬから、井上を副使として遣らうと思ふ。貴君、どうか御同意を願ひたい。』

といふと、公は、

『俺は病氣ではあるが、今すぐ死ぬといふ譯でもあるまいから、もう少し待つたらよからう。』
といはれる。

『さう仰しやるが、時機を失つてはいけません。』

『井上が人間の皮を被つてゐるならば、前にあれだけの意見を主張しながら、よもや行くとはしへまい。』

『それは井上も行くといはぬだらうが、井上がもしこの事を避るやうでは國家の重きを以て任

ずるものでないから、私はぜひ叩きつけます。今迄、貴君に何んといつてゐたか知らぬが、私はぜひ勧めてやります。』

やうやく公の同意を得て、それからだん／＼と井上を説いた。終に井上は副使となつて、朝鮮に行き、江華島事件も結末をつけて歸つたが、一時はなか／＼面倒であつた。

それから明治九年に奥羽御巡幸となつた。その時、木戸公は參議をやめて、内閣顧問となつた。岩倉公と木戸公とは、御供となつたが、大久保公は内務卿で御先供といふことであつた。

一體、木戸公は三條公の方に心服してをられた。この奥羽御巡幸の御供の途中でも、種々話合はれて、益々双方の諒解を深めるやうになつた。それから聖上には青森から御船に召されて

御巡幸になつて、北海道・秋田縣だけ残して、御還幸あらせられた。

それでこの御巡幸にならなかつた地方だけ、更に巡回しろといふ御沙汰で、三條公と山縣と予と寺島が行つた。これには陸奥だの尾崎三郎だのも随行してゐた。それで北海道を巡回して

歸途福島に泊つてをると、熊本(神風連)騒動の電報に接した。

然るに當時、主權論が盛んで、主權は天皇にありとか、主權は議院にありとかいつて、大分

やかましかつた。が、これは重にアメリカ・イギリスあたりから這入つたのだ。福地源一郎がしきりに漸進主義を説いてゐた時分だ。イギリスでは主權の議論はあまりいはなかつたが、ドイツなどではよほど明かになつてゐた。現にブルンチユリー・スタイン・グナイスト等の論も出てゐた。

ともかくも予の先輩として仰ぐ木戸公の如き、大久保公の如き、漸次憲法政治にしようといふ論をもつてゐたことは、いふまでもない。明治八年四月十四日に、

朕即位の初、首として群臣を會し、五事を以て神明に誓ひ、國是を定め、萬民保全の道を求む、幸に祖宗の靈と群臣の力とに頼り、以て今日の小康を得たり。願に中興日淺く、内治の事當に振作更張すべきもの少しとせず。朕今誓文の意を擴充し、茲に元老院を設け、以て立法の源を廣め、大審院を置き、以て審判の權を鞏くし、また地方官を召集し、以て民情を通じ、公益を圖り、漸次に國家立憲の政體を立て、汝衆庶と俱に其慶に頼らんと欲す。汝衆庶或は舊に泥み故に慣るゝこと莫く、又或は進むに輕く爲すに急なること莫く、其れ能く朕が旨を體して翼賛する所あれ。

との御勅諭があつた。木戸公が主に献替したもので、あまり急進に走つてはいかぬといふので漸進主義で立憲の基礎を立つるといふ勅諭を日本國民に下し賜つたのである。

漸進主義は木戸公の持論であつた。大久保公は萬事木戸公の驥尾に附いてやらうといはれたのであるから、政府をあげて漸進主義と認めてよろしい。

即ちそれが天皇陛下の御思召となつて出たのだ。

ところで今日になつて考へてみると、それから十六年を費して憲法は發布された。十六年間の漸進主義は果して非であつたかといふ事は能く判斷して貰はなければならぬ。予は先輩の取つた態度が頗る當つてゐたと思ふ。

今日から十六年前の有様を見ると、民間の有志と稱する者は、民權を求むることに急にして元老院が設置になると、忽ち民選議院の建白が山の如くに出て來た。然るにその際木戸・大久保二公の見識で、それを壓へてゐた。

その後十六年間を経て憲法を實施して見たのだが、この實施に關する人民の用意は果してどうであるか。現に人民は憲法に就いて如何なる思想をもつてゐるか。若しも憲法の實施が漸進

でなく急進であつたならば、この人民は今日よりも甚しい悪弊を生ずる人民であつたらう。或は國を危くせしめたかも知れぬ。

往時、主權論の盛んであつた時、議會の權力とか何んとかいふことすらまだ研究が積んでをらなかつたが、その時、急進論者の説く如くしたならば、如何なる誤りを後世に貽したか、測り知られぬものがあるではないか。

予から觀ると、今日でも、まだ憲法論に就いて、極端に走つてゐるものがあるやうに思はれる。現在生きてゐる政客ですら、とかく諒解し兼ねる考へを懷いてゐる者がある。

これらの事を思ひ合せて見ると、漸進主義でやつた事は慥かに當を得てゐたと信ぜられるのである。

木戸公は、よほど早くから憲法思想をもつてをられたが、どういふ風な方法でやるが宜いかといふことに就いては、その説を聞いたことがなかつた。

明治四年洋行した當時、公は予に、『どうも王政復古をして、廢藩置縣までにしたが、かうがたく〜ではいかぬ。何んとか憲法といふやうなものをこしらへて、根據ある制度を施かなければならぬ。』

といはれた。その時分に、予は、『どうも今卒然と憲法を拵へたところが、實際行はれるや否やは甚だ疑はしい、たとへ拵へるにしても十分研究しなければならぬ。』

『それもさうだ。』
とにかく木戸公の肚裏には、どんな方法で憲法を運用するかといふ詳細なる計畫はなかつたやうである。

それから、前に話した木戸公と予との交情が舊に復すると、その年の十月、征韓論が破裂になる少し前に、公は予にぜひ内閣に這入れといはれたが、予は斷つた。すると、公から呼びに寄越して、

『岩倉公、大久保公から、君に内閣に這入れと勧めがあるから、ぜひ這入つてくれ。自分は病氣でゐるから、とても十分にやることはむづかしい。君が代りに這入つてくれれば、自分も死んでも瞑目する。』



といはれた。そこで予も、

『それほどまでにお考へになるなら這入りませう、お受けいたしませう。しかし、私が這入つても、貴君のお考へになるやうなことが出来ぬかも知れませぬ。私はまた私の責任で、見る所を行はなければなりませんから。』

『それは無論の話ではないか。』

と、一寸も蟠まりなく承知された。

それで明治六年十月末に、予は参議兼工部卿を拜命することになった。

木戸公がヨーロッパから歸朝して後に出された建白書といふものがある。その主意は文章そのものを見ないと、細密の話は出来ないが、搔い摘んでいへば、ヨーロッパを廻つて文化の進歩したことや、ポーランド邊の滅亡したことなどを擧げて、日本の前途を憂慮し、國の根柢を養ひ、人智を啓發して行かなければ、とても今日萬國の間に立つて行くことはむづかしいといふ意味が書かれてあつた。それには國家が上下一致して行かなければならぬといふことがあつたから、憲法政治に赴かしめる考へであつたことは自から明かである。このことはその頃の横

濱の外字新聞に翻譯されて出てゐたと思ふ。

名は忘れたが、何んでもその頃、公は、人智を啓くことが肝要であるといふので、西洋から歸朝後、明治六年から七年の春にかけて、新聞を刊行した。その新聞は大分名を變へたり、何かして續いてゐた。その時分新聞といふほどのものは、まだ日本に少なかつた。それで別に政府から補助されるといふこともなかつた。

公が、王政復古に至るまでの間に、四方に奔走して、國事に盡瘁せられたことは、世人の皆知る所であるが、維新創始の基礎を大成するについても、公の苦心盡力といふものはなかく一通りでなかつた。文部卿などとしてをられた。在職の期間が短いので、事業の上にかういふ事をしたといふことはないが、内閣に立つて文明的の方針を執つて國の開明を誘導されたことは大したものである。

公はどちらかといへば、物にあまり執着しない人であつた。それ故に移る事には易い、識力があつて、分別の出来る人であるから、教育の事人智を進めるといふ事に骨を折られた。公は若い時にはさうでもなかつたが、西洋から歸つてから終始胃病で苦んでをられた。それに一度

馬車で頭を打つてから、一層病氣が重くなつて、非常に物事に心配されるやうになつた。あまり憂慮に過ぎて夜も眠られぬといふやうになつたが、これがよほど病氣を助けたらうと思ふ。公は和漢の學問に通じ、詩も作り、文章も作り、書などはなか／＼うまかつた。文學趣味には十分富んでをられた。圍碁はあまり好きな方ではなかつた。

西郷南洲を語る

西郷南洲は天稟の大度で、泰山の群峰を抜く趣きがあつた。さうして國を憂ふる眞情が深かつた。

徳望は隆んなものであつたが、政治上の識見はといふと、ちと人物より劣つてゐたかも知れぬ。自分でも政府に立つことを嫌つてゐた。盲目判を捺すことが嫌で堪らないから、部下を引連れて、北海道に行くといふことを企てたことがあつたが、それが模様がへになつて私學校と

なり、西南の變となつた。

とにかく大人物であつたが、むしろ創業の豪傑で、守成の人ではないやうだつた。

高杉晋作を語る

高杉東行なども、西郷南洲と同じやうな型だつたと思ふ。彼は勇悍の人で、創業的材幹にはよほど富んでゐた人だ。

三條實美を語る

予が初めて條公の警教に接したのは攘夷論鼎沸の際、即ち予が歐洲から歸つた時であつた。

その頃長州で攘夷論が灼熱して、條公その他の諸卿も來てをられたので、予は歸朝匆々諸卿に謁して、攘夷はとうていものにならぬこと、また日本の前途のためにもよろしくないことを進言した。

間もなく予は京都へ雪冤の嘆願に出た者などを説得するために出かけると、もう事を起して了つた後で、途中から引返へした。それから長州征伐となつたので、諸卿は幕府の忌諱を避けて九州の太宰府に移られ、そこで予はしばらく公に面謁した。

維新の大業が成ると、公も冤罪がはれて京都へ還られたが、初め長州が京都の變動でも負け馬關の攘夷戦でも負けて、公らは頼む木陰に露滋きを嘆つて、九州に渡られようとした時に、予は、公に各國の形勢を視察する必要を説いて外遊を勧めた。公は沈吟やうしばらくして答へられるには、

『自分もその考へがないではないが、今は身を以て萬民の儀表とならうと覺悟してゐる時であるから、にはかに海外に出るは如何なものであらう。自分には忍びない。』
といはれた。

この一事を以て見ても、條公が如何に自から任ずることの重かりしか、ほど窺ひ知ることが出来ると思ふ。

公の資性は寛仁大度で、誠に能く衆を容るゝの量があつた。さうして、外は如何にも温厚の長者であつたが、内には大義を守つて萬難に屈せぬ凛平たる勁節を懷いてをられた人である。その平生の行状は方正、謹直、毫も他と争ふやうなことはなかつた。さながら白璧の曇りなきやうな人であつた。

長州に流寓してをられたとき、毛利家で公の一行を非常に鄭重に取扱つたので、幕府からやかましくいはれたことがあつたが、七卿の中で、公は第一位を占めてをられた。

公の政治上の意見は、概して岩倉公と異るところはなかつた。岩倉公は時として、或は奸物と呼ばれたこともあるし、また奸物を以て目せられたこともあつたが、公に於ては斷じてさういふことはなかつた。その代りに、公は豫め方針とか原則とかいふものを定めて、それを固執するといふやうなことがなかつた。岩倉公は聰明英達の人で、斷行をよくしたが、條公は事を起さうといふ質の人でなかつた。皇室と幕府との間に立つて、調

和を韓旋したり、或は王政復古の事に就いて畫策したりしたのは岩公の方であつた。當時、佐幕とか勤王とかいふことは、見様によつては、或は奸佞とか忠誠とかの異名のやうにも思はれたのであるから、その事に當つた者が、種々の汚名を冠せられたのはやむを得ぬ次第である。

伏見の戦争の起つた頃には、條公は、まだ筑前にをられて歸京されてをらなかつた。それで皇室と幕府との間に立つて、いろ／＼盡力されたのは岩公であつた。これは大久保などが岩公を佐けて、巨腕を揮はせたのである。

明治二三年以來種々なる變革があつた。

その主なるものを擧げて見ると、版籍奉還だとか、廢藩置縣だとか、皆重要のものばかりであつた。條公は實にこれらの大變革の要石となつて、これを統轄した。最も多難の時に公はその天分を盡されたのである。

明治四年、歐洲に使節を出すことに定まつて、ここに政府の仕事が二つに分れた。一つは内にあつて内政を整頓するもの、他は外に出て諸國の制度を視察するものと、この二つである。

それで岩公は後者の任に當り、條公は前者の任に當つて太政大臣として庶政の統理に務められた。その間に征韓論が起つて内にあつた者と、外に出た者との間に意見が相背馳し、その結果

明治六年、征韓論の主張者らは相率ゐて職を辭するに至つた。

この時、條公は過慮の爲め病氣となられて、政務を視ることが出来なくなつた。條公の考へとしては、かならずしも征韓論に反對ではなかつたが、岩公等が歸つて来て、いよ／＼廟議を定むることゝなつたとき、岩公は反對側の首領となつて征韓の不可を極言し、内にあつた諸僚は飽くまで前議を執つて屈しなかつたので、維新以來基礎未だ鞏固ならぬ閣内に大溝渠が穿たれ、條公はこれを憂慮するの餘り終に病を發するに至つた。さうして岩公が太政大臣代理を勤むることゝなつて、征韓の議は終に御採用にならぬと定まつた。

そこでその議を執つた諸參議は皆辭職することゝなつたのである。この時の騒ぎといふものは、今から考へて見ても、震駭に堪へぬほどで、影響がどこまで波及するか、測り知ることの出来ぬ有様であつた。

維新前、王政復古論が盛んに起つたとき、京都には各藩から推舉した徴士等がをり、これに

諸藩の有志等が加はつて相謀り、王政論は頗る熱したが、國家將來の基礎を定むることに就いては、意見が區々に岐れて歸一する所がなかつた。この困難の際に處して條公の統御よろしきを得た事實は、枚擧に遑がないほどある。

御維新の大業が成つて明治政府となると、條公は入つて太政大臣の重職に就かれ、閣議を統一し、大政を翼賛して常に平和と安寧との瑞氣を醸成した。

條公の國鈞を乗るや、ただ獻替よろしきを得るのみで、公自身の赫々の名は顯れぬ。これが條公の倫を絶した所で、所謂功成不名有もののである。公は九鼎大呂の重きを以て從容として百官を統率せられた。

この徳望と威重は、世人の既に知る所であるが、國歩最も困難なる際に、顯要の地にをられて、江湖に一回だも公に對する惡聲の起るを聞かなかつたのは、古往今來絶えてなくして、ただ公に於てのみ見得る例であつた。それが公の人格を偲ぶ所以である。

條公と岩公とは最も親密の間柄で、少しも隔意がなかつた。岩公は常に條公を尊敬し、また條公は深く岩公を推重してをられた。その間に一度も意見の扞格とか交情の疎隔とかいふこと

がなかつた。岩公は條公に下り、條公は岩公を重んじてをつたから、政見の相異から争ふといふやうなことは絶えて見たことがない。

條公は學問に達した人で、歌などはなか／＼よく詠まれた。ことに筆蹟は見事なもので、雄渾豪宕の氣四邊を壓するといふ趣がある。これは種々の書風を學ばれて、結局一家を成されたものである。

岩倉具視を語る

予が始めて岩倉公を知り、また公に知られたのは維新草創の時であつた。それから心安くなつて、予は深く公に愛された。

明治元年の初め、予が外國官判事兼大阪府判事を仰せ付けられた時、王政復古の事に就いて予は公に封建を廢して郡縣を置くがよいとの書面を出した。それが公の持論とびつたり合つた

ので、それ以來公は常に予の言に重きを置かれたやうであつた。

公がどうしてさういふ持論を懐かれたか、それにはかういふ譯がある。

公の左右に玉松操といふ大分學問のある人があつて、一日、公に向つて、

『王政復古はどういふ御考へでなされるか。』

と尋ねると、公は、

『建武中興の例に據る。』

と答へられた。すると玉松は、

『それは御心得違ひで御座らう。さやうな小規模の企てでは、大業の成就是心許なく存ずる。

よろしく神武東征の例に則るべきである。』

といつた。

公にはその意味がまだよく解せなかつたので、

『神武東征の例とは。』

と押返へして聞ふと、玉松は威儀を正して、神武の四方戡定は我王朝の郡縣制の淵源である

ことを痛論した。公はすつかり感服して、それ以來郡縣制の復興が公の持論となつてゐたところへ、予の廢藩置縣論が出たのである。

予が公に知られた事には、かういふ奇遇やら、僥倖やらが伴つた。

天皇御東行のとき、公は東京に來られた。その時、予に書面を残して、王政復古の仕方を種

種告げられた。その書面はいつか失つてしまつたが、中にかういふことが書いてあつた。

『この行、たとへ虎兒を得ずとも、虎穴に入らずんば止まず、兄の如きは眞に吾が師なり。』

固より過分の言葉であるが、さういふことが書いてあつた。

それで封建制度を廢するといふことは、實に容易ならぬ重大事なので、一舉にこれを完成す

ることはできなかつた。先づ版籍奉還の結果、知藩事といふものを置いて、舊藩主を以てこれ

に任じて、實を存して名を奪つた。それから明治四年に至つて知藩事を廢し、各藩の家祿も文

武の職も悉く朝廷に收めて、封建の實を奪ひ、郡縣の制度を實施することゝなつた。

この郡縣制度の實施には井上・山縣・西郷などが大いに奔走したのである。それは丁度、予

がアメリカから歸つて、大阪造幣寮に入つてをつた時で、予の宿論がこの時に至り、完全に實

現されたことを見たわけで感慨無量であつた。

封建廢止の主張ばかりではない。予はなほ外にも、いろ／＼西洋の文明を日本に取入れなければならぬといふことを主張したので、他から餘程反對を受けた。予を排斥する論もかなりあつた。然るにそれらに耳を假さず、予——無論予一人といふわけではないが、ともかくも、予らの意見を用ひられたのは條公・岩公で、特に岩公はその立役であつた。

岩公は罕に觀る偉器であつた。豪邁果敢で、さうして明敏であつた、事の是非得失を見ること極めて明かで、一たび斷ずれば鬼神も避くるといふ人であつた。

予は或時、公にかういつたことがある。

『閣下が若しも元弘建武の世に出られたならば、新田・足利兩氏をして争はしめるやうなことはなく、王政復古は六百年前に出來てゐたに違ひありません。』

公は實にさういふ風な人物であつた。

維新の當時、岩公や條公が、薩長のいづれかに加擔されたら、あの大業は決して出來なかつた。薩長を融和させて、争はしめなかつたのは、兩公が一致してこれに當つたからである。殊

に岩公の力が與つて多きにあつた。

明治四年に、公を特派大使として歐米に差遣さるゝの議が朝廷に起つた時、公は先づ予を招いて、

『自分が歐米を巡遊するに就いては足下を副使として隨行させたい。自分一人ではどうにもならぬから、是非さうして欲しい。』

と懇諭された。

予は勿論喜んでお伴する考へであつたが、視察の結果を實行するといふ段に思ひ及んで見ると、更に政府部内の有力者を伴ふ必要が感じられたので、木戸・大久保の同行を進言した。公は立どころに同意されて、御自分が正使、木戸・大久保、それに外務少輔山口尙芳・予との四人が副使となつて、當時政府部内の有爲の材百餘人を率ゐて出發された。

それから歸朝後、益々公の信賴を蒙つて、公の薨去に至るまで、終始渝る所がなかつた。

當時政府部内の心持を赤裸々にいへば、長州人はどちらかといへば、條公に走り、薩州人は岩公に頼る傾きがあつた。従つて長州人は概して何んとかく岩公に氣受の好くない氣味があつ

た。その中で予だけ公の殊遇を蒙つたのである。これは予と大久保との間に別段の關係があつた爲めでもあらうけれど一つには、また予が長州人であらうが、誰であらうが、自分の信ずる所は忌憚なくいつたので、それを岩公が洞察された爲めであらう。

そんな次第で公と予との交情は、年と共に益々深きを加へたが、明治十五年に予が憲法調査の大命を奉じて、渡歐しようとしたとき、一日公は自から鄭重な料理を携へて予の邸に來られ相酌み相談じて別情を陳べられ、それから横濱出帆の時は態々同港まで見送られた。

あとから思へば、これが公と予との永久の別れであつた。

翌明治十六年、予が任務を終へて、歸途シンガポールまで來ると、公が痼を病んで危篤だとの報に接し、續いて香港で薨去の報に接した。公の息具定氏は予に附いて歐洲に往還したので予と一所に香港で父君の訃音に接した次第であつた。公は生前に、具定氏の前途に就いてくれぐれ予に依囑されたが、今になつて思へば、遺言の一つとなつた。

征韓論の爲めに、明治十年、西南の亂を見るに至つたが、初めこの論のやかましかつた時、岩公は、文明主義から出發して、

『先づ内を整へ、然る後に外に向ふが順序である。繼かに封建の舊制を打破し、政柄を朝廷に收めたのみではいかぬ。大いに文明の政治を奨め、國礎を鞏くするが刻下の急務である。』

と、公は深く信じられた。これには木戸・大久保も同論であつた。それで終に廟堂内の分裂とまでなつた。

西南の亂は、今から見れば、實にばか／＼しい間違ひで、内を整へなければならぬといふ議論と、朝鮮へ手を出さうといふ議論と、水火相刺した結果である。

その征韓論のときは、大變な混雜が起つたのであるが、表面の議論はそれほどでなかつた。尤も江藤新平などはむきになつて議論をした。大使一行が西洋から歸る前に、一時、西郷を朝鮮に遣らうとまで内定した様子が見受けられた。三條公は大使一行の歸るまでに餘程お困りになつたものらしい。それは西郷がひた押しに迫つたからだ。

使節一行が歸ると、一件の總勘定といふことになつて、事が一時に面倒になつた。岩公が、それまでに進んでゐた論を打破するには、随分骨が折れた。評議の結果、内がまだ整はないのに外に事を用ゐるはよろしくないといふことに決して、たうとう最後の破裂といふ事

に行き着いた。

大阪會議の結果に就いては、岩公は何ともいはれなかつたが、多少不満が有つたと見えて、吾々が會議から歸京すると、公は自分は病氣であるから、御役御免を蒙りたいといふことをいひ出された。

そこで大久保も岩公が得心しないのに困つて、

『伊藤さん、どうも岩倉公が職にをられないといふが、貴君何とか一つやつてくれまいか。』
といふので、

『よろしい。私にお任せ下さい。何とかしませう。』

といふやうな譯で、予は早速公を訪うた。

『閣下は御病氣で辭職なさるといふことですが、本當の事で御座りませうか。』
と訊くと、

『如何にもその通りぢや。』
といふ。

『それはどうも譯のわからぬ話で御座ります。閣下は、日頃、俺は病氣で寝てをつても寢床で評議をして苦しくないと仰せられた。それが今かういふ多事の際に、病氣でお引きになるとは譯の判らぬ話では御座りませぬか。』

『さういはれては一寸困るが、實は俺は病氣の故もあるが、臺灣事件なども、辭意を決する事由の一つぢや。臺灣事件は、つまり吾々が陛下に對し奉つて不行届であつたといふ譯合になるではないか、大臣たる者がその責を負うて退くは當然ぢや。その責任さへあるに、今また新たな政治上の方針に就いて喙を容れるは不徳を重ねるに外ならぬ。畏多いことぢや。』

かういはれるので、予は膝を前めて、

『いよく以て譯の判らぬお話で御座ります。以ての外の御議論と申上げなければなりません。私は閣下が左様な御議論を持つてをられやうとは、夢にも想ひませぬでした、左様な御議論を持つてをられることこそ、却つて陛下に對し奉つて不徳を重ねられることになるで御座りませう。』

『それはどういふ譯か。』

『どういふ譯もかういふ譯も御座りませぬ。臺灣征討の事は、國家が正規の道を履んでやられたことで、それが爲めに既に國家と國家との間に立派な約定さへ出来た次第で御座ります。然るに、大臣なる者が、この既成の國家の所爲を否認して、辭職をなさるといふは、御上に對して相濟まぬことでは御座りませぬまいか。』

『いやなるほど、俺が悪かつた。さういふ譯なら、俺もこれからともく／＼に遣らう。』

さすがに公は聰明で果斷の人だけにわかりが速い。さうして一旦辭職を思ひ止まつて廟堂に立たれることゝなると、千萬人と雖も吾れ往かんといふ勢で力を盡された。

當時内閣の統一といふことに就いては、おもに條公と岩公とがその任に當られた。島津公は左大臣であられたが、御上に對して御心安く萬事を申上げるといふほどでなかつたから、おもに條公と岩公が執奏申上げた。

陛下は一週間に一ぺん内閣に御出座になる。太政大臣と左右大臣が定め席に着いて、その脇に書記官がつて、政治の事を書付にしたものを讀み上げる。それを聞き召されて御入内

になるといふ次第であつた。事柄の重いものは、特に條公・岩公から奏上したのである。

西南の亂の爆發したのは、丁度西京に御臨幸の際であつた。この年一月三十日が先帝孝明天皇の十年祭で、それと京都大阪間の鐵道の開通式とを兼ねて、御發輦があつたのである。

その時、條公と木戸・山縣、それから予と川村純義が御件を承つた。二月の五日に鐵道の開通式に御臨幸になつて、その還御の汽車中へ、鹿兒島に暴動が起つて櫻島の彈藥庫を襲ふたといふ電報が届いた。

東京の方ではまだ誰も知らぬ、山縣と予が早速それ／＼部署を定めて、山縣は出兵の用意に掛つたが、その手配りは、速かなものであつた。岩公は東京に留守を預つてをられたのであるが、非常に心配された。暴動の中に西郷がをるかどうか、島津はどうであらう、玉石混交はしないか、といふやうな事で非常に心配されたのである。予はその時、島津はその中にをりはすまいと思つたが、西郷に就いては、もしやゝゐるのではないかと氣遣つた。

ともかくも岩公のその時の心配は非常なものであつた。岩公といふ人は、嚴しい几帳面な人であつたが、しかしまた、よく下情に通じてをられた。

さうして自から奉ずることは極めて薄い人であつた。

予は内閣から下がる折りに、よく公の邸に立寄つたものであるが、その時には、公はいつも給仕の者を遠ざけて、膳に一本づゝ爛徳利を立て、主客對酌で話し合つた。むづかしい談しも出る。碎けた話しも出る、月に幾度となくかういふ風な會合があつて面白かつたし、また爲めにもなつた。

公は、岩倉村に閑居の折(維新の際、幕府と薩長との間に不和のあつた頃、公は臨を棄りて洛北岩倉村に幽居の身となつた。)學問をされて、和漢の學には一通り通じてをられた。嗜好はこれといふものはなかつたが、圍碁は好きの方であられた。

島津久光を語る

世間では、島津公を頑固の人のやうにいふ者もあるけれど、公は決してさうではなかつた。曾て公は俺は攘夷などといふことはいはなかつた。それは西郷などがいつたことだ、といはれ

たことがある。

しかし西洋流の事物を採り入れるといふことは、餘り好きな方ではなかつた。

島津齊彬を語る

島津齊彬公は非常の豪傑で卓絶した人であつた。

今から考へてみると、實に感服する事が多い。徳川幕府の安藤だつたか、水野だつたかに、御兩敬といふ事を申込んだ。向ふが和泉守様といへば、こちらが修理大夫様といふ、それが御兩敬だ。

西郷が鹿兒島の御庭番か何かしてゐるときであつたらしい。齊彬公を諫めて、『彼はどうも奸物です、彼の奸物に御兩敬を御申込になるのはよろしくない。』といふと、齊彬公は、

『馬鹿をいふな。それは貴様の智恵ではなからう。水戸の藤田東湖からでも習ふて來たのぢやらう。』

といはれたとのことである。なか／＼非凡の人であつた。

或る時、長崎からオランダ人を聘したことがあつた。すると、鹿兒島の人石を投げて困つた。大山(巖公)なども、その投げた仲間だ。そこで齊彬公は馬に乗つて迎へに來られて、

『石を投げるなら俺にも與に投げろ。』

といはれた。凡庸の大名の出來る事ではない。家來のいふ言葉を聽いて、それに籠絡されるやうな人ではなかつた。

それから、寺島だつたか、誰の話だつたか忘れたが、公が一つの本を出して翻譯しろといはれたので、それをみると、綿の事が書いてあつた。

『築城とか兵學とかに關係するものと思ひましたら、これはどうも綿の事でもありますな。』と譯者がいふと、

『むろんの事だ。それを翻譯しろ。他日、日本を困らせるものはこれだ。』

といはれた。

日本に綿絲を輸入する事を、その時分から着眼してをられたと見える。惜しいことには病氣で早く世を去られた。

吉田松陰を語る

毛利の史料調所で、松陰のことを調べてゐるが、今度安政五年に松陰が書いた書類を發見した。その書類によると、松陰は全く攘夷論者でも討幕論者でもない證據が上つた。つまり義論が變つたのである。

しかしそれを見ると、やはり過激だ。政府を苦めてゐる。政府の方にはわかつてゐることも松陰は知らずにやつてゐることもあつたらしい。今の政黨の首領などもそんなものではなからうか。つまり他藩との關係から、封建的の觀念に驅られてゐた所もある。

一體愛國心といふことは、ヨーロッパの學者の説では、郷を思ふと註解してゐる。封建時代の愛國心はどこにあるかと云ふと、たいてい封土の範圍にある。象山なども、攘夷はとうていいかぬといふ考へを持つてゐた。

攘夷といふことに就いても、種々の説があつて、一應戦ふた上で和議をやる方が善いといふ説もあつた。しかし戦つて勝つか敗けるかその邊は一向に考へなかつた。よほど議論が疎雑であつた。戦つた上で和議をするといふた所で、戦つて敗けた時には、戦はないで和議をするやうな譯には行かないではないか。

當時の攘夷論は全く精神から出たので、政略から出たものではなかつた。その頃、政略的事をやること、精神がないとか何んとかいつて、それこそ斬られてしまふ。

長井雅樂を語る

長井雅樂なども、議論の一變から切腹させられたので無理だつた。

長州の議論が、すでにその時は變つてゐたのだ。長井雅樂の論は長州藩の論で、日本はどうしても一致しなければならぬ。開國をするにも、鎖國をするにも、公武合體した上で、どちらにか定めなければ眞の開國でも鎖國でもない。ともかくも日本の一致を計らうといふのが、その眼目であつた。

雅樂は人物であつたに相違ない。老中の如きは、殆んど小兒の如く見てゐた。死んだ時は、四十位だつたらう。漢學はあつたが、蘭學はやらない。あの頃の人では、よほど目は見へてゐた。君側の監察をしてゐたが、それから一時中老といふものになつた。これは地位をつけるために拵へた役だ。

彼は大江家の長井四郎といふ名高い人の裔だ。人品も立派だつたし、大きな人で、眼光炯々といふ方だ。それで人に丁寧で、ちやんと袴の膝を崩さない。それはもう大した利権者であつた。また元徳公を徳山より貰ふたときは、太保といつて、御附で世話をしてゐた。

當時浪士といふ方の側からは、奸物と見られてゐたが、實はどうも無理なことだ。彼は江戸

に使に往つた歸りに途中から横道に這入つて、逃げ歸つたのだ。それが一つの過ちとなつた。ところが實をいへば、それは君命なのだ。江戸から逃げて歸れといふのが……、その君命を傳へた人は、林主税（三介）であるが、近頃、長井雅樂の遺書が出たので分つた。そのことを恨みに思つてゐる所が見える。まあ、あゝいふことはよくあることだ。

藤田東湖を語る

水戸の學問といふものは、一種の學問で、普通の漢學流でなく、神道と漢學を打混ぜたやうなものだ。あれは、光圀公以來、大日本史を編纂するときから、勤王論を主張する一種の水戸學といふものが起つた。

そこで、攘夷論が熾んとなり、勤王論も高まつて來ると、幕府の譜代でない大名の家來に、水戸に行つて、學問をしたものがある。

薩人などは、東湖に就いて薰陶されて、その方の説を主張するものが多かつた。彼は、事務に通じた人であつた。學者といふよりも、むしろ事務に明るい人といふ方が當つてゐると思ふ。事務を知るは英傑の士といふから、やはり英傑だ。事務には餘程好く通じてゐた人だ。

大村益次郎を語る

大村といふ人は、初めの間は蘭學者で、木戸公に用ゐられてから技倆を現はした。兵事の一に就いては、よほど與つて力があつた。政治の方にはあまり功績はないやうに見受ける。大村を斬つた奴の中に神代直人といふものがある。彼は予と高杉を斬らうとした男だ。馬關の變で、和議をしなければならぬ時に、予と井上と高杉の三人が、イギリスの船に行つて、和議の相談をした。所がむづかしい條件をいふから、それを持つて歸つて、君侯の御前で相談す

ると、どさく／＼やつてゐる。

その前に、君侯は代官所に留つてをられたのだが、代官は久保斷三といふ吉田松陰先生の門人で、予の手習師匠の息子であつた。その久保が、ちよいと来てくれといふから、行つてみると、今そこでお前達を暗殺しようといふ者がある、和議をすれば斬るといつてゐるぞと、知らせてくれた。

そこで予は、あんな奴等にやられては耐まらぬから、高杉と二人で、夜、山の中にどん／＼逃げた。久保が、あそこに隠れれば大丈夫といつて、逃がしてくれたのだ。

井上はひとり馬關に残つてゐた。それは西洋人の方から、一人は残つてくれといふので、残つてゐたのだ。ところで我々が逃げたので、井上をすぐ呼びにやると、井上は承知しない。久保を責めて我々の隠家を突き止め、井上と六戸の二人で君侯の命令を以て、決して暗殺するやうなことはさせない、保証するといつて来たので、高杉と予は歸つて行つた。

その我々を暗殺しようといふ徒黨の中に、神代直人といふ奴が這入つてをつたが、後にそいつが大村を斬つたのだ。予も高杉も、あの時、久保が注意してくれなければ、冥土へ大村の先

供をさせられるところだつた。

久保は維新後、福島縣の縣令になつたがもう亡くなつた。その弟が東京に出てゐる。久保は予らより年上だつた。

佐久間象山を語る

佐久間の見識と、東湖の識見とは大いに違ふ。佐久間は卓見家といつてよい。學力も佐久間の方が深い。

サー・ハーリー・パークスを語る

東京の英國大使館は、形勝の位置を占めて、實に堂々たるものだ。あれでこそ、宇内最雄國の君主、政府を代表するものゝ官衙たるに耻ぢぬといふべきである。

誰があの敷地の選定者かといふと、それはサー・ハーリー・パークスである。予は長く要職にあつたので、諸外國から我が闕下に派遣されたいろくの使節と接觸もし、交際もしたが、パークスぐらゐ聰明勇斷で、職務に忠實な人にはまだ會つたことが無い。彼は數十年も前に、遙に前途を達觀してゐた。あの高燥・閑靜、さうしてお濠一つを隔てて宮城と呼應し、一朝事ある時には、直ぐ連絡の取れるといふ位置を選んで、そこへ堂々たる公使館を建てたのだ。

早くいへば、彼は、英國の日本に對する外交上の位地の礎石を据ゑたのである。

彼が英國の代表者として日本に來たのは、慶應元年のことであるが、東洋にはすつと以前か

ら縁故があつた。その縁故といふものが、やはり東洋流の英雄物語に似てゐるから、面白いではないか。

予は彼の詳しい傳記を持つてゐる。今記憶にあるところをあらましいつて見ると、彼は幼にして孤子であつた。それで何でも十二三歳の頃、姉を頼つて澳門へ來た。といふのは、その姉が或る宣教師のところへ嫁いで、澳門にゐたものだから、それを頼つて來たのである。これが抑も彼と東洋との縁故の始まりだ。

彼は澳門で支那語を學び始めた。不思議な縁に導かれて、不思議な榮達をすることに定められてゐる彼には、安逸などに流るゝ暇を與へず、忽ち機運がおとづれた。鴉片戦争が勃發したのである。そのために、支那語の通譯が急迫の必要となつた。早速彼は採用されて、通譯官見習とかなんとかいふものになつた。

それからこの戦争の結果として、天保十三年に南京條約の出來る時には、十四歳の幼童で、頻りに機務に參畫した。それが、内輪だけで意見を参考にされるといふのでなく、黃口の一小童が、戰勝國の官吏として公然支那の全權委員に紹介されたのだ。尊大に構へることの好きな

支那側は、苦るしかつたであらう。

その後、彼は、福州・上海・廣東などの英國領事館に通譯官として在勤し、次第に立身して廈門の英國領事に任ぜられ、更に廣東に轉じた。安政三年にあのアロウ號事件が起ると、彼は得意の高壓手段を執り、同三年英佛聯合軍が廣東を占領するに及び、その民政長官となつて一年以上も支那市民を支配した。それは安政萬延の際で、彼が三十二歳の時であつた。その得意想ふべしである。

彼に就ての英雄物語中、壓卷の箇所ともいふべきは――

右の英佛聯合軍が天津を陥れ、破竹の勢で北京に進まうとしたとき、彼は或る任務を帯びて前線に出てゐた。さうして圖らずも支那兵に捕へられて、北京に送られた。その時の事だ。彼の英雄振りは、全く花々しいものであつた。

支那官憲が彼を斬罪に處しようとした。しかし彼は聊かもひるんだ氣色もなく、頑として口に抗辯を絶たず、終には眼を瞞らして、支那官憲を睥睨し、

『汝等若し吾が頭を斬らば、踵を旋らさずして支那四百餘州は焦土と化するぞ。』

と叱咤した。

そのすさまじさに、清國官憲も手を下しかねて、とうとう彼は生き延びた。支那流の英雄的動作で、支那官憲を威服した譯だ。

そんな次第で、戦争が終ると、女皇からナイト・コムマンダー・オブ・バス勳章を授けられサー・ハーリー・パークスとして、新に上海領事に任ぜられた。數年に涉つて、長江沿岸一帯に大いに英國の商權を扶植したのである。英國の對支政策を建設したのだ。

かういふ功績が、段々本國政府に認められ、とうとう三十七歳の壯年を以て、特命全權公使に拔擢され、慶應元年、我が國に駐劄を命ぜられて來た。

彼が我が國に在勤したのは十八年の長い間で、終始明治政府の誠實なる同情者であつた。維新草創、我が當局がまだ施政の事に慣れなかつた際、非常なる熱心と好意とを以て、種々有益な助言を與へてくれた。時としては熱心の餘り、干渉に近いほどの助言さへあつた。日本が今日あるを得たのは、彼に負ふ所が少くないといつても過言ではない。

殊に予などは、彼の好意を受けたことの最も多い一人である。王政復古の時、兵庫で西宮警

衛に當つてゐた備前藩が、外國側と間違を起したとき、予は彼に會つて解決の緒を求めた。それから朝廷新政の通告を諸外國代表者に發することゝなつたが、その時以來彼と格別親密な關係を續けて來た。

維新後、予と大隈が、大いに急進論を唱へると、彼は陰に陽に、予らを援けて功をなさしめた。後に西郷從道侯から聞いたことだが、山縣や西郷などが歐洲視察から歸つて彼に面會すると、

『君らもこれより伊藤や大隈を助けて、あれらの説を政府に採用させるようにせぬと、日本國は立ち行かぬことになる。』

といつたさうである。

彼の予らに對する態度は、まるで教師が生徒に對する態度であつた。文明の政治といふものは、かういふものだぞといひたげな風で、すつかりその指南役に成りすましてゐた。

或る時、彼を新造幣寮の開廳式に招待した。彼は大喜びで出席して、祝辭を陳べたが、終りのところへ行くと、一段聲を張り上げて、

『造幣寮の設置は國家のため眞に祝すべきことであるが、當寮の措置よろしきを失し、貨幣の眞價を紊るやうな事があれば、國家の信用を破壊すること正にかくの如し。』

といふより早く、手にした三鞭の杯を、卓上へ投げ付けて、骨牌微塵に打ち碎いた。一座の者は皆あつけに取られてしまつた。丁寧に道具がかりで、助言を與へてくれた譯だ。ナポレオンの傳記に何かこれに似た事が書いてあると思つたが、支那にゐた時の東洋流の英雄が、この時遽かに西洋流の英雄に早變りしたのかも知れぬ。ともかくもその意氣たるや傍若無人であつた。

支那にあつたとき發揮した彼の前半生の特徴ともいふべき冒險的舉措は、日本に來てからも遲疑なく行はれた。維新前、攘夷熱の最も盛んな頃、その中を東西に馳驅して少しも危険を感じぬものゝやうだつた。明治十一年竹橋騒動のときなどは、彼は馬に跨つて公使館を出で、銃火を冒して現場を視察し、それから市中を徘徊して、禍亂のどこまで及ぶかを見届けた。

彼は、予をして歐洲外交に通ぜしむるために、予が帝國公使としてロンドンに駐在することを熱望し、屢ばその事を勧めてくれたが、政府の事情が許さぬので、彼の希望を満たすことが

できなかつた。そんな経緯があつたので、予が明治十八年、大使として清國に遣はされると、その時、彼は北京駐劄の英國公使であつたが、予の來たことを聞き、態と書面を天津に寄越して、遠からず再會のできることを喜ぶといつて來た。

ところが予が通州まで行くと、意外にも彼の訃音に接した。突然のことで如何にも驚いた。その後聞く所によると、死因は僕麻質斯の痛みを和げるために醫師にモルヒネを用ゐさせたところが、その分量を誤つたために、さういふことになつたといふことであつた。残念なことをしたものである。

弘法大師を語る

我國の名僧知識中で、特に傑出してゐるものは、弘法大師であらう。弘法大師の遺跡を見るがよい。一として雄大の氣象を現はしてをらぬものはない。嚴島の御山もさうだし、四國の八

十八箇所もさうである。高野山に至つてはその尤たるものだ。

小は揮毫彫刻の技から、大は景勝を相するの術に至るまで、みな神に入つてゐる。彼の死後千有餘年を経た今日でも、弘法の二字は能筆の代名詞のやうに思はれ、大師といへば彼の獨占の號でもあるやうな心持がするではないか。これが尋常の名僧に出来ることではない。

就中、彼が唐の文明を輸入して、我が文化の進歩に資した功績は萬世不朽だ。我が國民の永遠に感銘すべき事業である。

狩野芳崖と橋本雅邦を語る

近代の日本畫家中での名人は、何んといつても狩野芳崖であらう。あれは長州の男だから、予のところへも度々來たが、腕はなか／＼利いてゐた。

橋本雅邦も名人だけれど、予にはまだ雅邦の本領がわからぬ。第一、雅邦の畢生の傑作とい

ふものを予はまだ見ぬ。博覽會や、共進會などで時々見るが、あれは雅邦の大得意の作ではないだらう。

芳崖は、すべて心に感じたものは、箸でも、棒でも、何んでも繪にならぬものはないといつた。さうして芳崖は一種高邁な理想を持つてゐた。

予は考へる。繪といふものは、とにかく氣合が第一だ。昔から一派一流を立てた名人の繪はそれ／＼持ち前の氣合が出てゐる。元信にしても、雪舟・探幽にしても、みな銘々その氣合が現はれてゐて、他に見られぬ特點がある。雪村とか、蕭白とか、同じ狩野の流れを汲んだ中でも、何か別に強い風變りのやうに見られるのは、つまり氣合が違ふからである。

氣合でかくから、名人の描いたものは、草一本、石一つでも、おろそかには見られぬ。けれど他人と違つたものを描くから名人だといふ譯ではない。誰も描くものを描くから名人でないといふ譯でもない。つまり腕前は氣韻にあるのだ。名人は精神の籠つたものを描き出すのだ。雅邦は、今の畫家中で傑出したものかも知れぬ。願はくば彼として、枉げんとして枉げられぬ、傷けんとしても傷けられぬ、群議紛々の間にあつて微動だもせぬといふやうな傑作を出し

て欲しいものである。

豊臣秀吉を語る

予より秀吉を見れば、一個無學の好漢に過ぎない。若し彼にも學問があれば、或ひは予に企及するであらう。或ひは予を凌駕するであらう。

菅原道眞を語る

菅原道實は、どうも氣魄に乏しい。予が擧丸の一點垢にも當らざる小輩である。若し予が死せば雷となつて、時平よりも支那を驚かすであらう。



森槐南と矢土錦山を語る

槐南くわいなんと錦山きんざんとを較くらぶれば、槐南くわいなんは遅作ちさくにしてよく句くを煉ねり、錦山きんざんは速成そくせいにして所謂いはゆる當意たうい即妙そくみやうである。書體しよたいは錦山きんざん遙はるかに精妙せいみやう、書家しよかとして一家いっかを成なしてゐる。

【第二編】 實 歴 談

堀田閣老要擊の餘話

どうも維新前後の事を考へると、今日から見て不思議な事が多い。

内田萬之助(河邊左治右)は、水戸の浪人で、安藤閣老暗殺の陰謀仲間であつたが、時間が後れて事の濟んだ所へ駆け付けた。そこで最早自分は手を出すところがないから、死處を求むるために長州屋敷へ来た。當時桂小五郎といふ名は、水戸や諸藩の有志者間に知れ互つてゐたものだから、有備館に彼をたよつてやつて来たのだ。

内田が屋敷の門を這入つた頃、恰も予は海晏寺の方へ遊歩に出掛ける積りで門を出ようとする、門番が今浪人みたやうな者が桂さんを訪ねて参りましたといふ。その頃浪人者などは屢ば訪ねて来るから、さうかといつて、それなり出て外で遊んで夕方に歸つた。

その頃、予は木戸即ち桂に隨從してゐた。邸内にすつと部屋があつて、一の室に二三人程づ

つゐた。木戸はその頃有備館の館長をしてゐた。その部屋が講堂から續いてゐて、予が歸つて來ると、講堂から木戸が出て來て、朝からの話をした。

「内田萬之助といふ者が朝から來てゐて、今度の一件に漏れたについて武士道が立たぬから、せひこゝで割腹させてくれといふことを頻りにいつてゐるが、自分はそれを慰諭して、どうか死なさせたくないと思つて、酒肴などを出したりして今まで話をしてゐたが承知せぬ。自分は更に浪人してもよい、なほ爲すべき事は將來にあるだらうからといつて、段々説諭して見たが肯かぬ。今酒を飲ませてゐるが、少し認めるものがあるから席を避けてくれといふから、こちらへ來た。」

「それは困つたものだ。」

と話をしていると、講堂の方で、愉快々々と大きな聲をして怒鳴つたから、直ぐに予が馳付けて見ると、腹を切り咽喉を横に貫ぬいて、鏢元まで差し通して前の方に伏してゐた。けれども未だ絶命してゐなかつた。

それで襟首を掴へて引き起した。水戸の人は總て長い脇差を帶すが、その長い脇差で鏢元ま

で咽喉を横に刺したけれど、押し切る力が足りなかつたと見へ、それなり伏してゐたのだ。頻りに血を吹いてゐた。予がその脇差を引抜いて後ろの方へねかした所が、出血は固より劇しくその中、まもなく絶命してしまつた。遺書だの詩などが作つてあつたやうに記憶してゐる。それから驚いてみな出掛けて来る。ともかくも藩の政府の方へそれを届けなければならぬ。藩の政府に届けると、無論役人なども出て来て、その評議にそれを公けに届けるか届けぬかと大分揉めてゐたが、結局世上に知れるであらうから、届けぬと却つてよくあるまいといふので遂に届けることになつた。

當時、長井雅樂が公武合體を周旋してゐた時である。或ひは京都へ行つたり、老中などに説いて、宇内一致して國家に盡力しなければならぬ。それには朝廷と幕府が親睦でなくてはならぬといふことで、公武合體を周旋してゐる最中で、長州の藩政府の評議も餘り幕府に反抗する意思はなかつたために、今度の事も公けに届けるといふ評議に極つた。

その頃、幕府の勢力は、井伊掃部頭が暗殺されて以來、大分衰微してゐたが、さういふ方針で届けることに決めた。そこで幕府に届けた。すると幕府より一應、水戸に照會したので、水

戸からも重役が出て来て、その死骸などを點檢の上、水戸人であることも承諾して幕府の方へ届けた。さうして死骸は幕府の方へ引渡すことになつた。

ところでそこには自然嫌疑が起る譯である。

どういふ理由で桂を頼つて来たか。その關係はどうであつたかといふことから、桂が北町奉行所へ召喚されることになつた。予も懸り合になつてゐるから均しく引出されて、北町奉行所で、兩三回取調を受くることになつた。ところで幕府の方も、町奉行と御目付と立會で吟味をして見たが、普通の事をいつてゐるので、關係の有無に至つては憑據がない。その儘に罪を宥すことにしても、その罪が定まらぬものだから、放免する譯にも行かぬ。ために長州藩へ御預けといふことになつたのだ。

たしか七日位は御預けといふことになつたと思つてゐる。

その間に、段々近頃の形勢を見ると、曩には井伊大老が刺され、今また安藤が刺された。その根元はみな主に水戸の有志の聲から出て来るので、長井雅樂が一方に公武合體を周旋しつつ一方には水戸の人心を鎮撫する工夫をするが宜いと、老中らに説いたのだ。水戸の人心を鎮撫

するについては、幕府の手ではいかぬ、幸に桂小五郎が水戸人の有志などと平素交際してゐるものだから、彼を水戸に下して、人心を鎮撫させたら、容易に出来るだらうとのことを老中に説いた。

そのために吾々の御預けが免されたやうな譯だ。その他、安藤一件に關係した者は大概斬り死をしたと思つてゐる。

大橋順藏逮捕の話

大橋順藏は、訥庵と號し、關邪小言を著はした人であるが、當時攘夷論者として有名だつた。またその傍ら勤王論も唱へてゐた。

その頃、長州に清水清太郎と云ふ寄組(長門士族の第二階級にて家老職を勤むることあり)の有志があつて、大橋順藏の門に始終出入して講釋などを聞いてゐた。その人が予に講釋を聴きに行かぬかといふから、聴きに

行つたものだ。

この大橋が、安藤閣老を暗殺する主謀者たるべき細谷忠齋(平山平助の變名)を自分の家へかくまつて置いたか或ひは他へ遣つて置いたかは知らぬが、餘程以前から援助してゐたに相違ない。大橋の保護によつて助けられてゐることは、その前に聞いてゐたが、その細谷なる者が安藤を暗殺する企てをしてゐた。予はその以前には彼の名前を知らなかつたのだ。多分木戸も水戸の有志たることは知つてゐたらうが、その謀略はその前に知つてゐなかつたらう。

一日、予は細谷忠齋が窮してゐるから金を持つて行つて呉れと木戸の依頼を受けたので、向島の小梅の小倉庵といふ蕎麥屋で出會して、その金を渡したことがある。大橋が安藤暗殺事件に關係してゐたことは斷言出来ぬが、矢張り水戸の有志を保護してゐたのである。

それから予の外に、荻野隼太といふ者がゐた。益田彈正の家來で、これにも矢張り講釋を聴きに行つたことがある。彼とは予も櫻田の屋敷内で一緒にゐたり、又別にゐたりしてゐたが、終始交際してゐた。

彼は水戸の有志や、その他の有志と交際してゐるものだから、どこからか筑波山事件のこと

を聞いた。筑波山の一擧については、勿論大橋も、江戸にゐて、手段としていはゞ浪人者みたやうな者を悉く糾合しようといふ考へを起したものと見へる。

ところがその事柄は先づ攘夷の先鋒といふ事が根據であつた。それをやるには、到底幕府の因循姑息では不可んとて、義兵を起して以て討幕の旗を擧げようといふにある。さうして上野の宮を奪つてこれを擁して筑波山に籠らうといふのだ。さうしたなら、先づ關東の有志も水戸近傍の者も、これに悉く集まつて來る積りであつた。

それを聞き出して萩野が予にその人數に加はれといふから、それに賛成して、共に向島へ出掛けたが、途中で事の漏泄したことを聞いたので、引返した。後に予は別に届けも何もしなかつた。それで一向不問に置かれたが、萩野は大分前から關係してゐたものだから、國へ追ひ下された。

この大橋事件の漏泄に及んだのはなぜかといふと、矢張り同じく有志の面色を粧つてその謀議に與つた宇野東櫻といふ者があつた。これがその實、幕府の探偵であつて、事を發せんとする際に至つて奥右筆の何とか云ふ名は忘れたが、その方へ始終出入をしてゐて金を貰つてゐた

と見え、それを報知した爲め直ぐに幕府の方へ露見に及んだ。(宇野は其後長州屋敷で有志の爲めに殺された)
その結果、大橋は父子共に捕縛された。この事は安藤閣老一件より少し前になる。それで予が町奉行所へ安藤一件の事で召喚されたときには、大橋は矢張り入牢してゐて、吟味に引出されたところを町奉行所の中で遠方から見たことがあつた。

彦根藩迎輦の眞偽偵察の話

彦根へ行つたことは、年數も經つから悉く記憶はせぬが、京都で段々浮説流言のあつた頃彦根城を修覆して先帝を其所へ移して幽閉すると云ふ噂があつたかと覺えてゐる。

その爲めに彦根の事情を偵察して來いといふことを、予と堀眞五郎とが言付けられた。ところが、彦根は井伊掃部頭の斬られて以來、如何なる形勢であるかといふことも分らず、卒然に踏込むことは危険である。それで江州の八幡といふ所に、これも名を忘れたが田中とい

つたかと記憶してゐるが、(谷津臣の談に西)町人の勤王家があつて、これは以前、矢張り一緒に勤王家の有志の仲間であつた高橋太一郎といふ者をかくまつて置いたといふことを聞いたから、こゝへたよつて行かうと思つた。

そこへ行つて發端の手蔓をつけた。そこで彦根へこれから直ぐ這入るのは危険か知れぬといふので、彦根の近傍にある多賀神社の神職が車戸といふ者で幾らか勤王精神のあつた男だからそこへ行つて彦根へ這入る道筋をつけようとした。

當時彦根の勤王有志といふやうな者で松浦文衛、一昨年死んだ岡本黄石がをつた。岡本は彦根の家老で、暗殺された掃部頭にも諫言をしてゐた位だ。けれども掃部頭といふ人は、却々肯かぬ人であつたから、大老を辭するがよいなどといふことで諫めたといふことを聞いてゐるが用ひなかつた。岡本はさういふ境涯にゐたといふ譯だ。

京都でも岡本の事は聞いてゐたが、一體の形勢が測られぬから、今のやうな手續きをつけて車戸の方からその頃灘谷驢太郎と名乗つた谷鐵心へ紹介して呉れた。その人は醫者であつたがその家へ二人共行つて泊つた。さうして、掃部頭の殺されたことを憂憤し、且つ勤王論を主

張する仲間が五六人もゐたらう。その連中にそこで面會した。しかし岡本には遂に逢はなかつた。その者らは勤王論を以て彦根の汚辱を雪ぐといふ位の考へでゐたやうに記憶してゐる。

掃部頭暗殺以來は、彦根一體の有志などは、天下に面目を失つたといふやうな心持の所へ、予が行つたものだから、大いに優待されたのだ。それで京都で偵察して實況を見ようといつて來た彦根城を修覆してどうといふやうな事は影も形もなかつた。それだけの事を書いて京都の參政等の方へ報知したのだが、さうすると彦根の方では大いにそれを喜んで、早速京都へ使者を出して御禮をいつて來た。丸で反對の結果だ。その時分に堀真五郎は有田又太郎、予は越智斧太郎と變名して彦根へ行つた。一體越智は予の姓だからだ。(伊藤公が劍を抜て庭中の松を断り谷が酒酣歌と吟せしは此時の事である)

長井雅樂暗殺計畫の話

一

この長井なる者が公武御合體といふ事の周旋に掛つた以前からのことであるが、長州の有志家は、勤王一方の攘夷論であつた。公武御合體といふやうな手緩いことではいかんといふ議論だ。

ところが長井の公武合體なるものも、長井の威權が如何に盛んであつても、一人で出来る譯ではないから、矢張り君公の意志といふことにして周旋をしてゐたのだ。京都に於ても長井はみな高貴方の所へ出入してゐて、岩倉などにも面會し、正親町、中山あたりへも出入したやうに聞いてゐる。江戸では老中などへ出入した。安藤對馬守なり久世大和守などの連中と一般の

形勢を話し合ひ、さうして公武御合體でなくてはいかんといふのでやりかけた。その實は、十分にその合體が出来た晩に、各藩なり浮浪の徒なり、當時の有志家の議論をそのために壓伏しようといふのであつた。

しかし藩々によつては却つて反對の意見を持つてゐる位のものであつた。鹿兒島などは、畢竟合體といふよりは幕府を抑へつけやう位の意見を持つてゐる者が多かつた。

そこで、長井の手段はその功を奏せぬのみならず、一般の勢といふものは、有志は益々激昂して来て勤王攘夷論に傾いて仕舞つた。そこで長井なるものが長州の行爲として爲すべからざる事を爲したといふので、長井へ反對の鋒先を向けて來た。

かういふ有志の過激論が、政府を動かすやうになつて來た。それで有志等は長井をどうもその儘に差し措かれぬといふ考へを起したものと見える。

予は最初から、長井を暗殺するといふやうな話は知らなかつた。

一日、晝過ぎであつたかと思ふが、京都の木屋町の旅宿にゐた時の事だ。野村靖と二人で鴨川ばたの旅宿の座敷で酒を飲んでゐる所へ、久坂玄瑞が卒然とやつて來て一緒に酒を飲み出し

た。が、その時には、長井雅樂が今夜丁度草津へ泊るやうだといふ位の話だつた。暗殺しに行くとは確かにはいはなかつたやうに覺へてゐる。これは野村の方が委しく記憶してゐるかも知れぬ。

酒を酌んでゐる中に、久坂が涙をほろりとこぼして去つたのだ。

あとで野村と二人でどうも少し容子がをかしい、屹つと長井を途中で要撃する積りではないかといふことに考へ及んだ。それから何んでも今の四時頃であらうか、雨が段々降り出した。打捨て、置かれぬから、二人でこれから跡を追つて行かう、何でも大津へ出て行つたに違ひないからといふので、大津へ追つ駈けて行つた。

さうしてかういふ長州人は來はせぬかと問屋場を尋ねたが分らぬ。大津の問屋場の近傍に料理屋がある。そこで人が飯を食ふこともあり、多くは人がそこへ寄つて矢橋の船を傭ふところだ。そこに久坂がゐた。

久坂ばかりでない。その人数は判然覺へぬが、何でも六人であつたか。福原乙之進、堀眞五郎、それから品川彌二郎もゐたか、よく覺へぬが、多分ゐたかと思ふ。(附録に據ると寺)

それから野村と予とが、そこで皆と一緒になつて、さうして矢橋の渡でやらうといふ話であつた。草津に君公が泊つてをらるゝ、長井はその御供をして(長井は暗闘を命ぜられたが、御供にあらす丁度同じ頃になりしなり)中山道を歸つて來た。ところで君公は翌日京都へ這入ることになつてゐる。

その夜の十二時過であつたらう。草津の宿屋を捜して見ても長井の旅宿が見當らぬ。問屋場で聞いたら、長井様は森山の宿に御泊りになつてをらるゝやうですといふ。

それで森山へ行くことになつた。その時は夏の熱い時で蚊が非常に多かつた。森山へ行つて夜が明けた。朝飯を食うて行つて見ると、本陣に長井の札があつて、門に高張提灯が立てゝある。

しかしどうも白晝は面白くない、今晚にしたらよからうといふことになつた。それには此所にゐては不可んといふので、中山道へ向つて彦根方面にみな來た。途中で末家の徳山だつたか長府の使だつたか、江戸から西京の方へ出て行くのに逢つたから、行列を避けて、何でも森山の宿から三四里もある所へ來た。

料理屋へ寄つて、そこで晝飯を食ひ、各々遺書を認めて、自分々々の衣類の襟に入れたりし

た。所謂姦物を誅するといふ譯で、かういふ事をして迷惑を掛けて氣の毒だが、何分よろしく頼むといふ趣旨なので、勿論死んだあとの死骸の始末位のこと、各々自分の家へ贈る遺書などではない。

それから久坂が、何だか筆を把つて書をかくとか何とかいふやうなことをしてから、夜に入つて再び森山に歸つた。そこでまた飯を食つて評議をした。問屋場で聞くと、翌の朝御立ちになつて伏見まで御出になるといふから、其所でまた評議をした。彼は中老といふやうな名目をやつてゐたから、大分多くの人がついて居る。夜斬り込むとすると無益な人を殺す、それは甚だよくないといふやうなことで、いつそ翌日藤の森のところがよからうといふことになつた。

そこで、長州の末家だの何だの往來が多いのを避けて、夜通しに草津へ出た。草津から瀬田の唐橋を渡つて石山へ出て、淀川の上を越えて宇治に出た。宇治から河を下つて伏見へ出た。さうして藤の森に行く積りで、伏見の錢屋で尋ねて見た。ところが、長井さんの行列の御供は此方へ來ましたけれども、長井さんは御出でになりませぬと、かういふのだ。どうしたことかとなほ聞き質して見ると、何所やら丹波の方から御歸りになつたさうで、御駕籠ばかりはこち

らへ參りましたといふ話だ。

何んとも仕方がない。そこでみな空しく京都へ歸つて來た。

歸つて五人の者は届けたのだ。その頃は寛大なもので、予は馬鹿らしいから届けなかつたが木戸にはその話だけはした。それで五人といふことになつてゐるがその實六人であつた。届けたところが、藩の方でも國論が一變してゐる。寧ろ吾々の方の議論と同様な論であつて、酷い目に逢はせるでも何でもない。たゞ謹慎してをれといふやうな話で済んだ。

さういふ譯であつたから、遂に長井は、君命を以て割腹を命ぜられるといふやうなことになつた。これは野村靖などがよく記憶してゐるに相違ない。

二

薩摩人は長井を殺すといふことを、直接に激刺した譯ではない。

丁度その少し前頃は、長井が公武合體を周旋するとか、長州の參政にしても過激の議論は唱へないとか、幕府を潰すなどといふ議論は有力でなかつた。たゞ有志の連中がそんな議論をし

たのだが、その勢力は未だそれ程に發達しない時代であつた。その當時、幕府へ大名から建議をよくするのだが、長州から出した書付の中に、慥か中村九郎の筆になつたものと予は記憶してゐる、この書面はまだどこかにあるだらう（鎌倉幕府以來天下の大政を幕府に御委任といふ言葉があつた。それを鹿兒島の人がどうかして見たと見へてその事を餘程誹謗したといふやうなことがあつた。

鹿兒島人で、その頃は堀次郎といふたが後に伊知地宗之丞といふた者が、江戸へ出て、予らの藩の有志と交際したり、島津三郎に使はれて周旋したりしてゐた。その者一人であつたか、他にもをつたか、予はその席にゐなかつたから知らぬが、穴戸左馬之助や來島又兵衛などはゐたと思ふ。來島などは長州屋敷の重役であつて、堀などと交際してゐた。

これ等が集つて、兩國の青柳であつたか河長であつたか、そこへ會合したときその話が出たといふことを聞いてゐる。その時、堀のその席での舉動は随分亂暴なもので、疊をあげてその疊を持つて踊つたといふことであつた。その時に、穴戸といふ男は寛大な男だから、柱に凭つて口笛を吹いてゐたといふことだ。

その話が有志家に漏れた。それで非常に恥辱を受けたといふので憤慨してゐたやうに記憶してゐる。(會所は河長にて薩州の久保や長州の周布などもをつた、随分殺氣を帯びた會合で當時河門會の稱があつた)

その他には長井を殺すについて薩人の刺戟といふことは記憶しない。京都に於ても、薩摩人やその他の藩の人と交際してゐる者は、多く長井は怪しからぬ奴だとか、長井は長州の不面目なることをやるとか、長州人自身がゐるから、他の者は自からそれを煽ぐといふやうな形であつたらう。

總じて長藩の壯年輩が、江戸や京都で時事に奔走した狀況、及びその藩邸との關係は、錯雜してゐて、これは到底記憶を喚び起して順序を立て、話せない。その人々について聞いて貰はぬと、慥かなことは分らぬ。

たゞその頃の木戸の事を言つて見る。元來木戸は、國にをらぬ人で、十八九頃から齋藤新太郎に従つて劍術の修業に出たのだ。さうして歸つて來たのは、井伊掃部が殺された二年位前からうか、それから初めて役人になつたのだ。さうして江戸へ出るとき予がついて來たのが、畢竟木戸は江戸で名を揚げてそして國の方へ及んだのだ。

江戸へ来る書生或は有志家などから多くは長者として、始終年齢の割合よりは尊敬されてゐた人であつた。頗る寛大で、よく人を容れる誠實な人なものだから、有志者や何かは、みな兄分として仕へてゐたのである。高杉や久坂にしたところが、まあ長州の有志の頭株といふところであつた。周布とか宍戸・前田・毛利登人・竹内庄兵衛といふ如き者は、木戸の先輩であるが、これらは木戸を頗る愛し、且つ仲間の相談相手にするといふ工合であつたから、過激なる有志と政府との間の關鍵は、木戸が一人で握つてゐたのだ。

高杉などは出たり這入つたり、江戸へ行つたり何かしてゐた。他の者もまたその通りで、國にちつとゐるといふやうなことはない位だ。江戸で逢つた人々は、久坂とか高杉とかいふ者の外に、福原乙之進とか、堀真五郎・白井小助・徳山の遠藤貞一、それから品川彌二郎もゐた。野村靖もゐた。それから靖の兄の入江九一といふ人もゐた。吉田稔麿これも一旦亡命して後に歸參を許された。その他にも大分ゐたが、それらがおもなる奔走者で、井上などは最初の時分は君側に勤めてゐたから、交際はするが仲間には加はつてゐなかつた。何でも壯年組は二十人はゐたと思つてゐる。(井上は横濱關東事件の頃上)

來原良藏割腹の話

來原良藏といふ人は、早く眼識の開けた人である。彼は長井雅樂の議論に同意であつた。そこで長井雅樂の議論といふものは、どうしても日本一致の上でなければ、開國するにしても鎖國するにしても不可んといふのであつた。この論はどつちかといふと、攘夷は不可ん位の内心であつたのだ。來原もさういふ見識のある人であるから同意したのである。

ところで前にもいふ通り、攘夷論が蜂の巢を毀した如くに沸騰して來たものだから、長井雅樂の境遇が逆になつた。これに就いて來原も亦どつちかといふと、人に疎外されるやうな有様になつて來た。京都にゐた時でも、來原は後悔してゐたのではない。寧ろ國論がさう反覆するのを憂慮してゐたと予は思ふ。

予は決して來原が長井の論に同意したのを悔恨して、厭世的の思を起したとは信ぜぬ。國論

が一變して、君公の御趣意が攘夷であるといふことになれば、従つて來原は今までさうとは思はなかつたといふ議論になる。何故なれば、一體長井は君側にあつて君公の意思を受け、前申した如き論をやるので、専斷で仕事をしてゐるのではない。さうして來原はその賛成者であつたのだ。

ところがその君公の議論が一朝にして變つたといふのであれば、來原は最初國論のあるところを誤つてゐたと、かういふ譯になる。その變つたのが君公の意思で、眞の國論であるといふなら、心には服さぬかも知らぬが、しかし今までの誤解は改めなくてはならぬ。かういふ見識から起つたのだから、他から見えて後悔した如くに見えたかも知らぬが、内心はさうではない。それで、攘夷論となつて横濱で燒撃をするといつて出たのは、さういふ君公の御趣意であつて國論が其所にあるといふことならば、私は人に譲りませぬ、後れを取らぬ、魁をするといふ趣意だ。それで品川まで行つたのを、たま／＼江戸にある世子元徳公はこれを聞知して驚き井上與四郎（井上勝子の兄）を遣はし、命を傳へて召還した。來原命を奉じて歸邸し、世子に謁見した。世子は來原に向ひ、

「攘夷は早晚行ふべきだが、輕舉盲動は身を過るから。」
とてこれを戒めた。

來原は謹んで主命を拜承する旨を答へ、辭して自分の小屋に歸つた。さうして刀で幾度も腹を突き、最後に咽喉を切り、更に刀を疊に突き立て、力を極めて後方に引き、體は前方に倒れて絶息した。時に文久二年八月二十九日、行年三十四歳であつた。

予は翌朝、來原自殺のことを聞かや、直ちにその小屋に赴いたが、實に見事な最期で、疊に突き立てたる刀身は後方に曲つてゐた。遺書は數通あつた。

その藩に對するものゝ文意は、(尊王攘夷の志不行届より、從來忠儀と考へたること却て不忠不義となり、自ら誤り人を誤りたるの罪遁るゝに處なく、餘儀なく割腹す)といふにあつた。藩士來原の死を聞いて痛嘆せざる者はなかつた。藩主もまた祭叢を賜ふて厚く英魂を弔はしめた。予は鬢髪を携へて歸國したが、萩に於ても親戚故舊相集つて盛大なる祭祀を行つた。

來原の遺骸は、初め江戸芝青松寺に葬つたが、死後約一年半を経て、予等同人が相謀り、彼の墳墓を發掘して骨を洗ひ、更に現在の墓地、世田ヶ谷若林(松陰神社の側)に改葬した。

恩師來原と予との關係は大略右の如くである。來原の人格は前にも述べた如く、予の感服措く能はざる所で、漢學の素養といひ、經世の見識といひ、精神上的の鍛鍊といひ、當時斷然群を抜いてゐた。

或時、高杉晋作が予に向つて、來原・木戸の人物比較論を問ふたことがあつた。予は言下にこれに答へて、

『處世の術は木戸或は來原に勝るものがある。然れども學問・見識・人格に至つては來原は遙に木戸の上にある。』

と、この評は何時か木戸の耳に入り、予は木戸より大いに不興を蒙つたことがあつた。また出身より見ても、木戸は吉田松陰の直接門下生ではないが、松陰より始終弟子扱を受けてゐた。然るに來原に至つては松陰は常に儕輩同等の交際をなした。随つて來原が若し天壽を保てば、維新の風雲に際會し、眞に國家の重任を負ふべき政治家たることは論ずるまでもない。

御殿山燒打事件の話

長藩は尊王攘夷の急先鋒で、文久三年には英・米・佛・蘭の四國を相手に砲火を開き、長防二州を焦土とするも辭せざる覺悟であつた。

この時、予は英京倫敦にゐて、この開戦の事を「タイムズ」新聞で見たからして、直ぐに井上聞多(馨)と共に引き返へし、親しく藩主父子に謁して、内外國家の大小、國民文野の相違から兵力の強弱に至るまで、詳しく説いて開國の必要を論じ、この勢に乗じて王政復古を斷行せざるべからざる理由を切言した。

思へば昨非今是で、その時から僅か一年前には、自分で攘夷決行の端を啓かうとして、先づ御殿山の外國公使館を燒打したのである。

御殿山は品海を瞰下する形勝の地で、幕府は此處へ外國公使館の建設を許したのである。大

厦高樓といふ程でもないが、當時にあつては比類稀れなる立派な家が出来上つた。で、間もなく外國使臣を迎へ入れようといふ時である。今これを焼き拂つたら、嘸かし外人は憤激するであらう。幕府の不面目はいふまでもない。外交は必ず困難を極むる。攘夷派の志士は奮起するに相違ない。如何に頑冥なる幕府でも、終に攘夷の斷行せざるべからざる覺悟をきめるであらうといふので、高杉晋作・久坂玄瑞・有吉熊次郎・大和彌八郎・長嶺内藏太・白井小助・赤禰幹之丞・堀真五郎・福原乙之進・山尾庸三・それから井上聞多と予と總勢十二人で、御殿山の公使館を焼き拂つた。

今でこそいたづらなどと笑ふが、その時は生命がけの大仕事である。

先づ謀略は密なるを要すで、策源地は品川遊廓の土藏相模と定めた。そこに井上の馴染で偉い女がゐた。名をお里といつた。その時分は源氏名を用ゐずに實名で通つたものである。このお里の部屋を謀議室とした。

いよ／＼焼打を實行しようといふ當夜となつた。それは文久二年十二月十二日で寒い時分だから、みんな羽織を着てゐた。若し敵に遇つた時に同志打をやつてはならないから、暗夜でも

よく判る目標をつけねばならぬ、といつて始めから、誰にでも同志といふことが判つてはいかぬ。そこで羽織の裏に白木綿の長さ兩袖に達し幅二寸許りのきれを縫ひつけた。イザといふ時は、すぐに羽織を裏がへしに着直して、この白筋を目標にするといふ趣向を凝らした。なんと用意周到なものであらう。

焼打には焰硝が必要である。ところが人もあらうにそゝつかしい井上が之を引受ける事になつた。予は始めからうまくやればよいがと心配した。

いよ／＼當夜になつて、

『井上出来たか。』

といふと、

『抜目があるか。』

と答へて手拭の兩端に包んだ丸いものを、兩方の袖から出した。焰硝の炭團である。それは上出来だ。しかしまだ出發には大分早い。といつて身體につけてゐては危険だと注意すると、それも承知だといつて、此の二箇の危険物をそつとお里の部屋の額の裏へかくした。これで大

丈夫といふので、それから元氣を付けようと、一同で飲み始めた。無論お里の部屋に陣取つたのである。

高杉・久坂・井上らが時間をつぶすために暫時鯨飲放歌の真最中に予は獨り考へた。

公使館のことであるから、周囲の防禦が嚴重であらう。これを破る用意が肝腎であると思つた。そこでみんなの飲んでゐる間に、ちよつと品川の夜見世をひやかしながら何かないかと思つると、幸ひ手ごろな一張の鋸があつた。價は二朱だといふから、それを買つて歸つて來た。土藏相模の入口に天水桶があつたので、そつとこの鋸をその中にかくして、何くはぬ顔してみんなと一緒に飲んだ。

さて夜更け人定まるといふ九時半、今の一時頃、時分はよしといふので一同打揃つて土藏相模を出た。この時予は人知れず、最前かくした鋸を天水桶から取り出して、腰に差したのである。

途中は運よく探偵にも見付からなかつた。尤も夜半とはいひながら遊廓から歸るのだから、大抵の者は怪む筈がない。

いよいよ御殿山の公使館に近寄ると、その周圍に大きな丸太の柵が立て連ねてある。下からもぐり込むことも出来ぬ。上から飛びこすことはなほ六ヶ敷い。いづれも顔見合せて當惑の體である。誰一人、この關門を破ることに氣づかなかつたのは残念だと久坂がいふ。

そこで予は、

『拙者斯くあらんと考へたから、この利器を用意してきた。』

と、腰から鋭利な鋸を抜き出した。此時一同の歡びは譬へやうもなかつた。丸太の根元を挽き始めた。物の半時はかゝつたらう、二本ばかりはづすと一人づつ這入れる。

本館へ近づくと番人が居た。

『何者だ。』

と、とがめる。

『吾々は天下の志士だ。御國のため妖氣を拂はんがために來た。』

といふと、

『何をするぞ。』

と問ふ。

『焼打するのだ。』

と答へると、

『それはならぬ、許さぬ。』

といふ。中々責任を重んずる番人である。高杉は止むを得ず大刀を抜いて峰打を喰はした。これに辟易したと見え、さすが豪氣の番人も逃げてしまった。

家の中へ這入ると、なか／＼大きなものである。戸障子はずしてこれを二箇所かよに積上げ、井上いのうえに、

『焔硝の炭團たんどんを出せ。』

といふと、

『しまった、お里の部屋へやの額がくの裏へかくしたつきり、出して來るのを忘れた。』

といふ。

果して予の心配が實現した。が、今更仕方がないから、さらにこの二箇所かよの戸障子とじやうしを四方に

分けて火を點けた。木が新しいから燃え付き様やうがわるい。しかし家の中なかから火ひを付けたのだから、確かに大火たいくわになつた。サア逃げろといふのであるが、驅け出しては拙あつい、わざと悠々ゆうゆうとして引上げた。尤も井上いのうえは逃げる時に、濠の中へ轉げ込んで、泥だらけになつた。あはてたのであらう。

狸穴邊みみあなへんまで來ると火の手は益々熾さかになり、餓々えんくとして天てんに漲みなぎる。もう消防夫せうぼうふがどし／＼と繰り出す。一同之をながめて思はず快哉くわいさいを叫んだのである。同志は離ればなれに酒樓しゅろうで飲んだものもある。予は別れて歸つた。

さて、お里の部屋へやへ遺した焔硝の炭團たんどんがどうなつたか心配で堪らない。翌晩、井上いのうえを連れて土藏相模へ出かけた。あんなものが幕吏まくりの手てにでも這入つたら、必ず絶好の證據しやうことなるから、早くかくさねばならぬ。お里の留守を窺つて、そつと額がくの裏をさぐると、たしかにあるべき筈はずの炭團たんどんがない、さあ大變、一大事だ。もうズキがまはつたのか。平生大膽な井上いのうえの顔かほも青くなつた。そのうちにお里おのがやつて來た。

井上いのうえは態と落付き拂つて、

「お里、實は昨夜いたづらに炭團を額の裏にかくしたが、誰か目付けたらうか。」
と尋ねると、

「貴君方は實に亂暴ないたづらをなさること、今取り出して、この炭函の中へ入れたところで、一つ火鉢につきませう。」

と、火箸にはさんで火の中へ入れようとする。井上も予も驚いた。その一つを火に入れたが最後、一室の人命は悉く紛碎されねばならぬ。

井上は周章てお里の手を押へて思はず、

「何を——馬鹿する。」

と叫んだ。

お里は平氣なもので、

「炭團を火鉢に入れるに、何が馬鹿です。」

「それはたゞの炭團じやない。」

「それでは、昨夜の焼打は貴君がなさつたのでせう。」

「とんでもないこと。」

「いゝえ、それに違ひありますまい。」

こゝに於て性急な井上は思はず刀に手をかけた。

お里は仕済したりといはぬ許りに容を改めて、さていふには、

「貴方も天下の志士だなどと威張りながら、餘りといへばお氣が小さい。女でこそあれ、私共も同じ御國の人で御座います。一夜添ふても他人とは思ひませんのに、何で貴方方のためにならぬ事をいつたり、したりいたしませう。様子は太抵わかつてをります。とうから額の裏のは只の炭團ではあるまいと思へばこそ、お調べの證據にならぬやうにと、夜明を待たで裏の海へ沈めました。こゝにあるのは眞實正銘の只の炭團です。今頃眞物の火藥炭團を家の中に置くほど私は愚者ではありません。命懸けの大事をなさるのに、肝腎の道具をお忘れなさるやうでは、行末が案じられてなりません。これは餘計な悪まれ口、お氣になさらず、聞き流して下さりませ。」

井上はこの苦言を聞いて羞かしいやら辱けないやら、男勝りのお里の機智と豪膽に、ひどく

感服したやうであつた。

お里の外にも偉い女があつた。それは焼打の夜同志の中に、御殿山の下で、袖から女郎の艶書を落したものがあつた。なに、わしだらうつて、馬鹿をいへ、誰だつたか誰もいはぬからその人は判らなかつたが、この手紙から足がついて、土藏相模の女郎が幕吏に呼出された。ところが曩に話した通り遊女が實名を使つた時だから、手紙の裏にたゞ花とのみ書いてあつて、土藏相模の家號もない。お花といふ女は幾人もある。そこで本人は私にはそんな手紙を出した覚えがない、宛名の人も皆目心當りがありませぬと如何に糺問しても白状せなんだといふことである。昔は女郎でも男勝りの偉物があつた。

幕吏は大抵予ら同志の仕業であると目星をつけたに相違ないが、證據のないのと、幾らか長藩の勢力に遠慮したものと見え、深く追究せなんだから、同志中一人もこれがために處罰を受けたものはなかつた。

大擧放火の大罪を犯して刑をまぬかれるなどは、古今に稀れな話で、強弩の末魯縞をも穿つを得ざる幕末の形勢は、こんなものであつた。

水戸浪士との關係の話

彼等の中には、井伊を斬つた仲間の關係者が多かつた。その主なる者は林忠左衛門・吉成雄太郎らで、吉成に二人ゐて一人は又治郎といつた。金子孫次郎の息子もをり、黒澤忠三郎の息子もゐた。その内で今に生きてゐるもので金子の悴は、水戸の歴史の編纂か何かしてゐた。その親戚のやうな關係のある連中がおもで、その者らが水戸を亡命して、攘夷の先鋒を願ふとして薩摩の屋敷に投じた。それで薩摩の屋敷に置いた。

ところが年月はどの位の間であつたか覺へぬが(一年餘)、薩摩の屋敷で養つて、外出も容易にさせぬやうにして置いた。それが段々世の變遷によつて薩摩から歸され、一旦水戸へ歸つた。それらが残らず連れ立つて、長州屋敷を頼つて來た。さうして京都へ行きたいといふことであつた。その頃の長州屋敷は、役人などは大概引揚げて仕舞つて、留守番見たやうなものが少

しゐた。仕方がないから予が引受けて、箱根の番所があることだから、長州人にして連れて行つたやうなことであつた。

いづれも勤王論や攘夷論を唱へてゐたもので、京都へ着いてから、長州の出入の宿屋に配布して入れて置いた。

その頃の天下の勢ひといふものは、みな京都に集つて、京都で天下の大事を定むるといふ時期である。各雄藩の方針は總べて京都に向つて仕舞つた。幕府は大分蔑如されてゐるやうな時であるから、諸侯も有志も京都に集るといふので、水戸侯も慥かその頃京都にゐた。それで右の連中も京都へ行きたいといふことであつたと思ふ。いはゞ、矢張り攘夷論の仲間であるからだ。京都はその頃騒動の時であるから、束縛して置くといふ譯にも行かぬ。自由勝手に外出させて置いた。

ところで宿屋へ入れた三日目ばかりであつたが、その時分京都の恩光寺とか何んとかいふ寺に泊つてゐた水戸の参政位務めた者を、どうして引張り出したか、或ひは其奴が酒を飲みに行くのを跟け狙つてゐたのか知らぬが、木屋町近傍で、奸物だといつて、其奴を暗殺して仕舞つ

た。それで大いに困つたことがある。

それから暫くして江戸に歸した譯だが、歸つたのもあり、京都に留つたのもあつたやうだ。それからその人数は、その後、武田耕雲齋の仲間に入つて、越前の敦賀で最期を遂げた。

薩長聯合経緯の話

一

これは後の話だが、朝廷を動かしたのは、おもに長州の刺戟、長州の首唱によるところが多かつた。

といふのは、文久三年愈々期限を切つて攘夷といふことになつた。ところが各藩共に攘夷論を唱へたり、討幕論を唱へてゐたけれども、其所に至つたら、みな躊躇した。各藩共一藩を擧

げてといふ決心は付かなかつたものと見える。
 それで勅諭は出たけれども、それに應ずる者がなかつた。但し長州を除くの外だ。その末遂に、長州は幕府の命令を肯かぬといふので、會津などが佐幕論で餘程勢を振つた。堺町門の警衛も長州が持つてゐたのを止めさせるといふやうなことで、京都の方を鎖されて仕舞つたのである。

予が西洋へ行つてゐる留守中の事であるが、それから諸藩の浪人者といふやうな輩で有志のものは、悉く長州に集まつて来る。遂に七卿などもその頃所謂正論を唱へたために、三條さんを始めとして京都にゐる譯に行かなくなつて逃げて來るといふやうなことになつたのだ。予らが西洋から歸つた時は、京都へ歎願と號して既に三家老などは出てゐたし、來島なども出たあの事であつた。久坂を始めとして前に山口にゐたおもなる有志の連中はみなゐなかつた。高杉一人が萩に幽閉されてゐた。尤も奇兵隊などの連中は、馬關の方の攘夷論に當つてゐるものだから、京都の方へは餘り行かなかつた。

間もなく京都で冤罪を訴へるといふことになつた。それを名目にして、君公の息子世子公と

七卿と共に京都へ上らるゝといふので、急に破裂しようとは思はなかつたに相違ないが、出掛けて途中まで行くと、京都の方では既に事を起して仕舞つた。それが子の年(元治元年)の騒動だが、その時に鹿兒島の兵と長州の兵と戦つたので、それで仲が悪くなつた。

その中、長州の方の攘夷は、最後に馬關の戦争、それから俗論が起り、それから追討と稱して尾張がやつて來て、遂に一時恭順といふことになつたのだ。そこで木戸は京都の敗北以來、國へは歸らずに但馬の方へ行つてゐた。長州でも一時俗論が勢力を得たために、三大夫は割腹させられ、參政などの連中も大概首を斬られて仕舞つた。その揚句にまた内亂となつて、今度は俗論の方を壓倒したといふ譯だ。

攘夷論以來勢力を持つてやつてゐた人間が、みな無くなつて仕舞つた。周布は自分で割腹する、あとはみな斬首される。また俗論の方の者も、形勢が急變した時に領袖が死んで仕舞つたといふやうな譯になつたから、實に人物が地を拂つたのだ。兵隊などはゐるけれども、藩の參政でも何でも監督指揮する位置に立つて行く者がゐなくなつた。

それで今の杉とか山田宇右衛門などといふ人らがやつてゐたけれども、到底木戸がをらなけ

れば不可んといふので、木戸が歸つて來た。
幕府の方では姑息な降伏では役に立たぬといふので、再度追討として一橋が自ら出張するといふやうな騒動をしてゐる。その形勢を見定めて、木戸が歸つて來た。予は西洋から歸つて久振りに木戸に逢つた。その時高杉は外へ出てをり、井上も豊後の方へ遊びに出てゐたが、これらは木戸が呼び返すといふことであつた。

さうしてゐる中に、坂本龍馬が鹿兒島の方と豫て交際をしてゐて、長州へ來て鹿兒島の方の議論を傳へたのだ。薩州の方から、長州と聯合しようといふことを、龍馬が木戸に初めて逢つて話をした。

一體長州の議論といふものは、鹿兒島と聯合しようなどといふ考へを持つ所ではない。君父の仇敵としてゐた所だから、なか／＼餘人にはそんな話は出來ぬ。予はその時木戸から聞いたのだが、これを知つたものは予の外に井上と高杉位のものだつたらう。發端といふものはさういふことであつた。

ところでそれが段々ひろまつた。追々さういふ事が度かさなつて、鹿兒島の人もやつて來る

といふやうになつた。その時分うつかり京都などへ長州人が行けば、會津の盛んなときであつたから捕縛されるが、兎も角も京都にゐる薩摩人の方へ、長州から人を遣つて見たらよからうといふことになり、その後、次第に鹿兒島方の長州に對する意向も分つて來かけたところからして、木戸に京都へ來て呉れといふて來た。

しかし木戸は第一には行かなかつた。廣澤が慥か行つたと思つてゐる。それに奇兵隊や何かにゐて、鹿兒島を大いに疑がつてゐる連中を、みな廣澤に附けて京都へ出した。それは木戸の手段であるが、鹿兒島の方で大いに善く待遇されて、勤王論などで自ら意氣相投合するやうな工合になりかけて來た。それからそろ／＼氣脈が通じて、薩長が融和されて來た。遂に木戸が出て行かなければならぬことになり、木戸が京都へ行つて西郷や大久保や小松帶刀などに面會した。

ところで、聯合してどうしようといふやうな話は出ない。待遇は非常によいけれども結局の話は出ぬ。

その頃長州は死地に陥つてゐるが、薩州は右へ向くも左へ向くも自由である。どうもはつき

りした話が出ぬ。そこで木戸は不満足ながら京都を去らうとしたのである。さうすると、坂本龍馬が京都に来て、

『西郷・大久保らと如何様な話にまでついたか。』

と問ふので、

『どうも話が底まで行かぬ。甚だ遺憾なことであるが、格別かうといふ程の話は先方からも一向しないから、この儘で歸る。甚だ自分も失望した。』

と答へたので、坂本が、

『それは不可ん。何とか取極めることにしなければ不可ん。』

と頻りに木戸に慫慂したが、木戸は自分の方から言ふことを好まぬ、

『元來鹿兒島の方から緒が開けて來たのであるから、自分は先方もつと熱心にやると思つて來たところが、そこまで話が及ばなかつた。どうも今更遺憾であるが仕方がない。』

と云ふやうな挨拶であつた。

坂本は、

『それは不可んから、貴君のお考へをお書きなさい。』

といつて、木戸に考へを書かした。その書面は予も一遍見たが、木戸の家に保存してあるだらう。

それを持つて坂本が薩州方を歴訪し、さうして西郷・大久保にその書面を見せた。その返答諾否などを坂本が朱書で木戸の書面へ書き入れ、西郷・大久保などにも見せて、それを木戸に送つて來た。

それから討幕論の現れて來たところで、その中に黒田が來る、西郷や大久保なども三田尻まで出掛けて來るといふやうな事があり、その間には種々の事があつて、遂に聯合の事に至つたのである。この聯合は木戸微りせば長州の方で出来る事ではなかつたのである。全く木戸の謀議で、遂に彼所まで至つたのだ。高杉にせよ誰にせよ、あの時に生存してゐた連中に、一人もこんな工夫の廻る人間はゐなかつた。(高杉が筑前で西郷と逢つて聯合の端緒を開いたといふ説があるが、山縣伴藤井上は決して其事なしと屢々斷言した)

坂本龍馬は勝安芳の門人で、壯年有志の一個の傑物であつた。彼方へ説き此方へ説き、何所へ行つても容れられる方の人間であつた。坂本と一緒に来た男が一人あつたが、これは坂本とは議論も何も大いに違つてゐた。坂本が薩藩側の意を受けて来たのは、彼れから説いたか西郷・大久保から起つたか分からぬが、必定聯合して行かなければならぬと云ふ考へを彼が西郷らに説き、それが容れられてその意見を持つて来たのが初めてであらう。

木戸が國へ歸つてからのことであるが、坂本龍馬が西郷などの意を受けて、どうしても薩長合體しなければいかんといふ論を持つて来た。

そこで先づ木戸にこの話をした。こんな事は、井上や予らは相談にもなるけれども、なかなか他の人に聞かせることは出来ぬ。長州に取つては、薩摩は君父の仇としてある。どんなことをしても薩摩と共にすることは出来ない。京都で撃たれて居るから反抗の勢がなか／＼強かつた。迎も話が出来ぬのだ。それでこれを漸々に融和させる手段を探らなければならぬといふの

で、その話を高杉にはした譯だが、奇兵隊の連中、諸隊の連中には、一切聞かせることが出来ぬ。

然るに薩摩の方には合體論が強いのだ。

ところでその頃長州ではどうしても兵制を改革して、武器も西洋銃を用ひなければ不可んといふことになつて、長崎で何千挺といふ武器を買ふことに極つた。さてさうなつて見ると、輸送に差支へる。買ふのは買つてもそれを長州に送ることが出来ぬ。そこで薩摩へその事を依頼して見るといふ考へが起つた。

若しも薩摩がそれをやつて呉れれば、薩摩は長州を欺かぬといふことが證據立てられる譯で合體論の緒が開けるからだ。

その時丁度三條さんたちは、太宰府に渡つて、彼處にゐた。さうして薩摩が警衛して、薩人がゐるから其所へ行かうといふので、井上と予と二人で行つた。三條さんなどにも逢つて、薩摩人にその事を頼んだ。

ところが薩摩では、人を付けて我々を彼處から長崎へ送つて呉れた。長崎へ行つたところが

小松帶刀などがゐて、武器を買つて薩摩の蝴蝶丸といふ船で輸送して呉れた。つまり薩摩の方で信義を表明したのだ。

こんな次第で聯合の端が啓けたのだが、その時予は長崎に残つてゐたが、井上は鹿児島まで一寸行つて来た。

鐵砲を買つてから、次に軍艦も買つた。乙丑丸と云ふ軍艦を買つたが、あれを長崎で買つて長州へ送るまで、薩摩の者で勝安芳の弟子だの、其仲間の海援隊の者だのに貸して置いた。直ぐ長州へ持つて来度くも、外海をあるくに薩摩の旗章を樹てなければ不可んから、薩摩の旗章を樹て、海援隊に預けて置いたのだ。

海外密航と故國の風雲

文久三年五月十日が攘夷の期限といふのであつた。

その時分に井上(馨)と鐵道の井上(勝)や遠藤謹助などが西洋へ行くといふので、予にも一緒に駆けつけ井上が頻りに勧める。けれどもこの方は有志仲間に入つてゐるから、獨斷で西洋へ行くといふ譯に往かぬ。

久坂と相談して見た。

『それは不可ん。今になつて洋行などは止せ。そんな事を人にいひ出すのもよくない。これから國へ歸つて攘夷をやるより外仕方がない。』

といつて止められた。

仕方がないと思つてゐたところが、そのうち井上と遠藤と井上勝とだけが、命令で洋行するといふ事になつた。それで是非一緒に往かうと井上が頻りに勧めるがどうもそれは六ヶしい。政府では愈よ攘夷をやるとなると、武器を買はなければならぬ。その時分江戸の屋敷に、金があつても古金で六七萬兩も残つて居る。この金を以て横濱へ行つて、横濱に有るだけの武器を買へといつて来た。江戸の屋敷には遠藤といふ留守居と、波多野藤兵衛といふのが會計をやつて居る。この兩人へ政府から手紙を付けて、伊藤を其方へ遣るから、その金を渡せといふこと

を手に紙でいつて来た。

横濱を段々搜つたところが武器はない。西洋馬鞍と、小銃の見本が少々、それから短銃位のもので、迎も一萬兩の金を使ふ程はない。仕方がないから、その金を持って國へ歸らうといふことで江戸にゐる中に、井上らが洋行するといつて京都から出て来た。さうして是非貴様と一緒に往かうといふ。金は幾許持つてゐるかと思つたら、金は持つて来ぬ、たつた三百兩宛貰つて来た。金は君がどうかして呉れると思つて来たのだ。別に相談しなくては、これでは迎も行かれやしないといふやうな話だ。

そこで此方もどうしようかと思つて村田藏六に相談した所が、村田がそれはよからうといふので、村田と萬事相談の上で洋行をすることにした。

ところが遠藤も亡命の一人である。予は右述べたやうな命令を受けて来てゐるので、洋行すれば亡命になる。そこで亡命の數願書を書いた。さうして、武器を買ふについて横濱に大六・大黒屋六兵衛といふ貿易商人があつて、その手代に出倉清造といふ者がゐた。それが長州の武器を買つたり何かする周旋をしてゐたから、それに談じて五千圓借りた。大黒屋の方へは一本

の證文を遺して置いて、屋敷の波多野や何かに拂つて呉れと頼んだ。

さうして皆と一緒に出たのだ。後は村田が心得てゐて、江戸の藩邸の役人などに話をして、始末を付けて呉れた。さういふ譯であつた。(大六の番頭佐藤貞次郎の筆記に據れば、最初京都にて、周布が書生、其時に用ふる器械として必要ありとの趣意で語り、又五人が横濱より周布等へ寄せた書中に金の儀生き、其器械を買入ると見て顔容を訝ふとの事を附記してあるが、五人は他日果して文明輸入の大器械となつた)

支度は品川の相模屋で、支度といつたところが何にも持つて行かなかつた。寝衣位のものだ。堀辰之助が拵へた詰らぬ間違だらけの、英語の字引が一冊、それに山陽の政記を一部持つて行つた。山陽の政記は大好だ。日本の王政時代と封建時代、頼朝が覇府を開いて封建になつたに付ての政事論だが、予は子供の時から政記がすきで、それを唯一の書物として讀んでゐた。それを一部、これは薄葉刷の活字判で出来てゐたが、芳川顯正と御維新前に長崎で一緒に讀んでゐた。彼が英書を読むので、一緒に讀んで貰つた。その政記を呉れたから、今芳川が持つて居る。

この書から王政復古論が頭に浸み込んだのだ。

行く時にはどうして行つたかといへば、どうも外國船に乗るには、外國人に依頼しなければならぬ。丁度その時横濱運上所の傍らに、英吉利一番の商館があつて、前から兩三度も行つて

知つてゐるから、この英館へ頼むことにした。そこにガールといふ人が、日本語によく通じてゐたので、それに依頼した。彼は快諾してそれならよろしい。予が船に乗せて上げようといふことになつた。

そこで、五人で五千兩持つてゐたから、それを弗に交換して貰つた。五千兩の金が八千弗になつた譯だ。その金は途中入費のために少しばかりづつ、各自が懐中して大部分は勿論ガールへ頼んで爲替にして貰つた。さうして神奈川の臺（後に高島藩右衛門の下の所に下田屋といふ茶屋があつた。ここは長州人が出入りして、始終休む茶屋である。そこへ行つて、大小を脱いで町人の體になり、横濱に這入り、或る宿屋に泊つた。さうして窺かに西洋人の店へ買物に行つた。その時分の横濱は今のやうに賑かではなく、家がばらばらあつて、あつちに離れ、こつちに離れてゐた。そこで襦袢を買つた。洋服といつても水夫の着るやうな古着ばかりであつたが、仕方なしにそれを買つた。それから靴を買つた。ところが片一方に、兩方の足が這入るやうな大きな靴で、殊にその時分はまだみんな鬚を結つてゐるときであるから、服を着て靴を穿いた様子は實に妙であつた。

その頃、上海へ蒸氣船が通ふことになつてゐたので、今晚乗せるから眞夜中に、英吉利一番に來い、船長の食事が濟むと船へ連れて行つて、乗せてやるからといふことであつた。何んでも英吉利一番はその後しばらくあつた。あすこの堀の中に小さな山がある。その山のところに來て待つてをれといふから、その庭の隅に屈んでゐた。

その待つてゐる中に、各々斬髮になつた。當時は洋學醫者には撫髮はあつたが、元服頭が俄に斬髮になつたのだから、實に妙な様子であつた。

十二時近く、ガールといふ英人が出ていふのに、

『よく船長と談じたが、どうも幕府の禁制の人を連れる譯にはいかぬ、請合はれぬ。』

といふのだ。

『いやそれはどうも困る。最早頭は斬髮になり、かういふ姿になつてゐるから、こゝで連れたいかれずに外へ出ればきつと規はれるに違ひない。それなら腹を切る。どうせ縛られて殺されるなら、むしろここで腹を切る。』

と一同決心を示した。

ガールは驚いて、それなら少し待つて呉れといつて、奥へ行つて談判の結果、遂に連れて行くといふことになつた。

夜の二時頃だ。

人静まつて四隣寂寞たる時、船長は先きへ行つた。ガールは予らを案内して連れて行くのにびく／＼してゐた。運上所の前を通らなければならぬ。日本人に分らぬ様な事を私が英語で話をするから、お前たち運上所の前を通る時、大きな聲で話をしろ、といつたので、その教へた通り大きな聲で何んだか譯の分らぬことをいつて、運上所の前を通つて波止場に行つた。

するとバッテリーが着いてゐて、それに乗つて本船に行つた。またここに運上所の見張りがあるから、それに見付られては堪らぬからといふので、蒸汽船の蒸気釜の側へ入れられ、出帆する時までそこに屈んでゐた。

間もなく夜が明けて、観音崎あたりまで来ると出てよろしいといふ。甲板に出た。

横濱を出てから上海に行くまでの間は非常な暴風雨で、波が荒い。そして船中でろくに物も食ふことが出来ぬといふ有様であつた。

上海に着して、久振りで陸地を歩いて見たが、流石に外國の居留地などは、餘程よく行届いたものである。そこで我々一行の中に多少英語の分るのは鐵道の井上で、外は皆分らぬから井上を以て、これからどうして歐羅巴へやつて呉れるかと聞いた。歐羅巴に行く便船のあり次第乗せてやるといふことである。何んでも今考へて見ると、上海の河に繫泊してゐる航海の出来ない藏船に乘せられたと思ふ。阿片を積んで置く藏船に使つたものらしいが、その船に乘せられた。食物は、パンと洋食の食ひ残り、犬にでも食はせるやうなものを食はされた。

しかし時々上陸することがあつて、英吉利一番の代理人をしてゐたケセキといふ人がをり、時折り呼んで御馳走をして呉れた。上等の御馳走といふのではないが、まづいものばかり食つてゐたから、非常な御馳走のやうに思はれた。さうして書物など呉れたりして、間もなく歐羅巴に送つてくれることになつた。(渡航中の模様は別項に詳し)

ところで向ふでは小兒の如く思つてゐるが、こつちはどうかといふと、予は舊曆で二十三歳井上は予より六つ歳が上だから二十九であり、鐵道の井上は予より一つか二つ下だ。遠藤・山尾は予より三つか四つか上である。日本では子供どころではない。やかましい議論をやつて、

大騒ぎをやつて居た者が、向ふでは誠に小兒の如く取扱はれることになつた。
ところが家内の中で新聞を読む者があつて、お前は日本の何處だといふ。長州だといふと、長州といふのは下の關ではないか、下の關では外國船を砲撃した。それはお前の所だらうといふ。どんな事が書いてあるかと思つて、井上にもう一邊よく讀ませてみると、これはなか／＼容易ならぬ事態だ。パアリヤメントでもどうしても征伐しなければならぬといふ議論だ。
そこでつく／＼考へるに、歐羅巴の形勢を見ると非常な開け方である。日曜の休みの時などにキユウガデンの天文臺や、グリーンウキツチの大砲製造所や、軍艦製造所とかいふやうな大きなものを見せられて驚いた。

そこでこの文明の勢より考へて、長州などが攘夷を無謀にしようといふのは以ての外だ。思ひもよらぬ。この有様で打捨て置くと、取返しの出來ぬことが起る。國が亡びるに相違ない、たとへ我々がここで學問して業が成つても、自分の生國が亡びては何のためになるか。これは我々の力を以て止め得るや否やは分らぬが、身命を賭けても止める手段をしなければならぬ。
井上(馨)と予と二人が決心して、それから直ぐに山尾と鐵道の井上と遠藤の三人に向ひ、

「貴様ら三人は残つてゐて、我々が歐羅巴に學問をしに來た志を繼ぎ學業を遂げるがよい。」
といつて、固く約束して分れた。

然るにウキリヤムソンは、なか／＼心配してやかましいことをいふ。聞けば尤ものやうに聞へるが、お前達はまだ青年の身分であつて、國に歸つたところが何程の効果もない。つまりお前達は學問をするのが嫌になつて、さういふ口實を設けて歸るのだらうといふ。が、そんな勸告は退けてしまつた。

ところでその時、蒸汽船が一艘、初めて喜望峰の端を廻つて東洋へ航海するといふので、その船を見に行つた。舳先へ持つて行つて載せられるから難儀だといふので、又帆前船に乗ることにして、喜望峰を廻つて歸つて來た。

予らは船中で頻りに談じて、歸つたらどうしようか、こうしようかと語り合つた。先づ當時日本の識見家である佐久間象山、あれが信州にゐるから、あそこへ行つて面會して、我々の所見を談じようといふことに決した。

歸つて上海へ著た所が、もう日ならずして馬關攻撃のために、各國の艦隊が來るといふこと

を聞いた。そこで上海から蒸汽船に乗つて横濱へ歸つた。
ところが長州と幕府は大喧嘩をして、江戸の屋敷も何も焼拂はれて仕舞つた揚句だから、ただ長州人だと名乗るばかりで縛られるといふ有様だ。

各國艦隊の馬關砲撃の話

六月十日のことだ。

横濱へ上つた所が今のガラバがぬた。この人は前から關係のある男で、それに逢つて西洋人にして貰つて、横濱の西洋人が泊る宿屋に泊つた。井上の名は何といつたか覺へぬが、予の名はデボナで、二人とも葡萄牙人になつた。
(井上侯もこの時の名を忘れたといふ。この時二人はこの宿屋の日本人のボイを呼び、英語で煎帳をついて呉れといふと、ボイは不平な顔をして)

横濱に泊つてゐる間は、向うでも注意をして呉れた。幕府の役人などに知れぬやうに、外へ出たり何かすると、英吉利の兵隊で警衛して呉れた。さうして英吉利公使のオールコックのところに行つて、

『吾々は長州人で英吉利へ遊學書生として出されてゐたが、何分自分の故郷では攘夷をやるといふことで、遂に馬關を各國の艦隊が砲撃するといふことを聞いた。これを打捨て、置いては容易ならぬと考へて、君公にその旨を建言し、これを止めさせる積りで歸つて來た。ところで今日陸上ではどうしても長州へ行けぬから、どうか吾々を下の關まで送り届けて呉れ。』

といふことを話した。さうすると、

『それは出來ない。お前が見る通り、十八艘の軍艦が來てゐる。これが下の關の砲撃に行くといふことになつてゐるからそれは出來ぬ。』

とかういひ出した。

そこで餘程切込んで論じて、吾々が行きさへすれば屹つと御受合する。この戦争を止めて見

異人の辭に發端をいふ奴だなどと小言をいつて放帳をついて呉れたが、つひに吹出してしまつた。これは井上侯の談話である)

せるといふことを手強くいつた。

それから英吉利公使オールコック、佛蘭西公使レオン・ロッシュ、和蘭の公使ホルスブルーク、亞米利加の公使ブルイン、この四人と英吉利の水師提督、佛蘭西の水師提督と、これだけが會合して、我々を送るか送らぬかといふ會議を開いた。(井上侯の談話によれば初は陸行のつもりで、東海道が、公使等が其徒らに時日を途中に費すを憂ひて重艦を以て送ることに決したといふ。)

ところで好い機會であるから、これに手紙を持たせて長州侯へ一つ勸告して見ようといふことになつて、翌日の午後四時頃、英吉利の公使館へ來いといふから行つた。

『御前達を送つてやらう、やるについては各國の公使から手紙を贈るからそれを持つて行け。それを持つて行かぬといふなら送つてやれぬ。』

『よろしい、持つて行かう。』

その手紙といふのを貰つた。サトーとか、横濱のラウダとか、シイボルトとか、アストンとか、またレブヘンといふのは英吉利の領事になつたが、これらは日本語がよく分る者で、かういふ者が集まつて、英文を日本文に翻譯してそれを附けて呉れた。

それを持つて歸つた。しかしこの手紙は公けにしては困るから、手紙は君公に出さずに仕舞つた。英吉利のブルーブックには原文が載せてあるが、それを出さずに仕舞つた。それを出すと、外國人の使に歸つて來たといふ譯になつて、吾々の精神が貫かぬ。故に甚だ不信義であるが仕方がないとした。

それから何所へ上陸するかといふことで、海圖を出して見ると長府の海岸は危ない、何所にどういふ砲臺を築いて居るか分らぬ。姫島がよからうといふことで、姫島へ船を着けることに評議をして定めた。そこで返答を聞かなければならぬのであるが、何日位の中に出來るかといふことになつた。どうもそれは餘り急には出來ない、十四五日は掛るといつたところが、縮めて十二日といふことで折合がついた。姫島で待つから返答を聞かして呉れといふ、よろしいと受合つて姫島に行つた。

それから井上と兩人で漁船を備つて富海へ上つた。ところで何でもかういふ扮装では危険いといふので、以前から知つてゐる三田尻の湯川平馬といふ代官のところへ、井上と二人で行つた。富海からは二里ばかりだ。湯川平馬の家へ行つて、かういふ譯で歸つて來たから山口まで

何卒無事平穩に送り付けて呉れ、それについては大小もなし、袴もなし、洋服で散髪では不可
 んといふので、大小や羽織を借りた。鑑札を貰つて、午後三田尻を立ち、山口へ日の暮に著
 いて萬代利右衛門といふ町人の家へ二人共泊つた。
 それから政府の役人や君側の人達を考へて、毛利登人といふ人が一番よからう、これへ君公
 に逢はせて貰ふことを頼まうといふので、井上と二人でその晩に行つて、
 『私共はかういふ譯で歸つて来た、長く生きてゐる積りはないが、一度自分達の話を君公まで
 言上に及んで仕舞ふまでは生きてゐたいと思ふから、さういふ都合に取計つて貰ひたい。』
 と依頼したところが、毛利が非常に感心して、
 『明日は君公に面謁の出来るやうに、乃公が盡力してやらう。』
 といふ。

翌日午前早くから政事堂へ出た。その時列席した人達は一々覺えてをらぬが、君公も出られ
 て、それに家老參政の人もみな出た。それから世界の地圖などを以て、國の大小論から、兵力
 の強弱論、横濱へ來てゐる軍艦十八艘の大砲の圖から、總ての話をして、これではどうしても

攘夷を止めて、さうして王政復古といふ事にその方略を用ひるがよいといふ建言をした。西洋
 人の方でも關西十一箇國の諸侯が同意して、その盟主となつた長州故、なか／＼その勢力は容
 易ならぬと思つてゐる。此方では、和議をして王政復古の方に力を向けなければ、迎も日本は
 今日形勢では國の獨立を保つことは出来ないといふ方の議論をした。

三時間ばかりも話をしたらうが、異論をいふ人もなかつた。それでこの事については、今姫
 島に軍艦を待たしてあつて、十二日の間に返答するといふことを約束してあるから、それまで
 に評議をして極めて貰ひたいといふことにして、その日は歸つた。

三日ばかり経つて井上が言ふには、
 『迎も吾々を長く活かして置く氣遣はないから、今の中に萩へ歸つて君は親に面會して來ては
 どうか。』(井上の家は山)

『それではさうしよう。』
 萩に歸つて一夜泊つて翌日山口へ出て見ると、その時分先鋒隊といつて、多くは萩の士族で
 何でも二百人もゐたが、これ等が(井上と伊藤が西洋から歸つて、和議論を主張するために廟

議が動き出した、彼を活しておいては大變だ」といふことで、吾々のところへ斬込んで來るといふ話が始まつた。

其所へ予が歸つて來たのだ。こゝの話は一つ井上に聞いて呉れぬといかぬが、予の記憶では井上が言ふに、

『乃公は殺されるより腹を切つて死ぬる方がよい。』

といふ。予は、

『それは不可ん。殺されるにしても、一人なり二人なり敵を斬つて斬り死の方がよい。』

といふ論で、井上も討死の論になつた。ところがその中に政府の方で聞込んで、それは容易ならぬといふので、その者らを壓へた。到頭腹を切るにも討死にも及ばぬことになつた。

その中に日時が迫つて、どうしても姫島へ返答しなければならぬことになつたが、政府の議論は（外國人の忠告はよく分つたが、抑も長州で攘夷をするといふことは、長州一國の一了簡で始めた事ではない。勅命を奉じてやつたことであるから、是非共長門守を上京させて、天意を伺つた上に返答しよう。それまで待つことが出來ぬといふなら、何時でも戦ふ用意は出來て

ゐるから、撃つて來てもよろしい」とかういふ返答をせよといふのだ。

其所で井上と予と議論が岐れた。井上は、

『外國人だからといつて、さういふ無理窟な取扱は出來ぬ。向うは今後砲撃さへ止めればそれで承知しようといふのに、さういふやうな返答を持つて行くといふことは、人間の皮を被つてゐる者には出來ぬ。』

といふ。予の考へでは、

『如何なる返答でも、お互に死を以てこれまでにやつて來たのだから、持つて行つて、それだけの趣意を立てた方がよい。』

といふのであつた。

それでは行かうといふことになつた。

そこで二人は、三田尻から漁船に乗つて姫島へ行つた。丁度十三日目の晩であつた。約束より一日遅れた。軍艦はもう翌日の朝出帆しようといふところで、何でも夜の一時過ぎか二時頃に軍艦に着いた。

「まあ上れ、迎もお前達は生きてをらぬと思つた。明日の朝出帆する積りだ。肝腎な話はあとで聞かう、まあ此方へ来い。」

といふやうなことで、船長の部屋へ連れて行かれた。バロサといふ軍艦でコルベットだ。その船長はカピテン、ダウルといふ人で、後にアドミラル、ダウルとなつて東洋艦隊の司令長官で英吉利が巨文島を取つたことがあるが、あれを取つた男だ。

その部屋でシャンパンを出して、どういふ返答だといふから、ありの儘に話した。私共は十分によつたが、かういふ工合で甚だ遺憾ではあるが仕方がないといふと、

「手紙の返答は。」

といふ。

「手紙の返答は別段に出ない。」

「受取はないか。」

「受取は吾々の命で間に合せて呉れ。」

「それでは仕方がない、この上は弾丸の中でお目に掛らう。」

といふやうな話で歸つた。その時、井上は霍亂を起したかどうしたか、吐瀉の様子で病氣になつて仕舞つた。仕方がないから予が連れて、船で山口へ歸つたと記憶してゐる。井上にもよく聞いて見なければ不可んが、予の記憶ではさう思つて居る。

二

その時の政府の評議では、各國公使への回答は三ヶ月の猶豫を求めるといふのであつた。

話は少し後へ戻るが、吾々が山口に歸つた時、始めは萬代に宿つてゐたが、やがて湯田の瓦屋といふ家へ移つた。その時益田・福原・國司などが京都へ歎願と號して出てゐる。そのあとから七卿(六卿)と長門守が出て行くことになつてゐる。もうその事は極つてゐるので、先發で行く者もあり、一緒に行く者もあるといふ手順だ。諸卿や長門守世子元徳は船で行くし、又陸路を行くものもあるといふ工合だ。

あの頃は兵庫邊までは陸路も行けた。藝州も備前もみな都合がよいから行ける。野村靖なども先發に行くといふやうな話で、頑固な事ばかりいつて話にならぬ。これも矢張り先發に行く

といふ仲間で、多くは薩州人に附けてゐた筑前の齋藤といふ者があつて、これががら／＼やつて来た。丁度野村だの土佐の戸所司馬太郎だのがゐたと思ふ。その他誰か浪人者がもう一人来てゐた。

それ等と話をしてゐたところが、下へ石川精之助(中岡慎)が酒に酔ふて来て、

『この家に異人が二疋泊つてゐるといふが、まだ泊つてゐるか。』

『いえ、手前共には異人は泊つてお在でになりませぬ。井上さんと伊藤さんがをります。』

『よしそれだ。』

と、予のゐる座敷へ上つて来た。そして突然短刀を抜いて予の胸へ突付け、

『君らは大和魂を知つてゐるか。』

といふ。

疳癢に障つたから、床の間にあつた刀を取りに掛くと、脇から抱き止められた。戸所といふ奴は随分剛氣の奴だが、もと吾々の同志で、さういふ亂暴な事をするのは不可んといふし、石川ももと吾々と共に勤王論をやつてゐたので、段々井上がやかましく論じ付けたところ、到頭

弱り込んで仕舞つた。

抜いた短刀も納まりが付かなくなつた。着物を取替へて呉れというやうなことで、井上の着てゐた単衣か何かを着て歸つた。着物を取替へて呉れといふのは、御世辭をいひ出したのだ。

さういふ景況で、婦人女子まで白鉢巻に長刀を振舞はして、今に攘夷になるのだといふ勢だから、實に盛んなものだ。その際に開國論を唱へてゐるのだから、此方は實に安樂なものだ。何故といへば、井上と予と二人の外に同論者といふものはない。これが五十人なり百人なり味方があつて、先方にも五百人なり千人なりあるといふことであれば、少しは恐るゝが、たつた二人だ。それを殺すといふ奴は餘程の馬鹿者か、それでなければ餘程弱い奴でなければならぬ道理ではないか。だから此方の鼻息もなかく荒い。

それで愈々若殿が出立といふことになつて、一日清水清太郎が予の所へ来た。數次政事堂などでも逢つたのだが、吾々は何時も同論を固執して一通り話した。(今京都で戦争を起しては不可ん。それよりもこの勢を以て自重して王政復古論をやれば、その勢力といふものも非常なものであるから、やれるに相違ない。若し今日、京都で戦争をやつて負けると始末が付かぬ)と

いふことも併せていつた。

その時は來島などからは酷い手紙が來るのだ。清水がいふには、

『貴様らの論には感服した。自分は今日より攘夷論を腹の中に沈めて仕舞ふ。しかし己れも日本人だから、全然攘夷論を廢めるといふのではないが、五十年腹の底へ納める。付ては何卒御苦勞ながら、今から京都へ行つて呉れぬか。どうかして戦争を起させぬやうな工夫をやらなければならぬが、到底他の者に話をしたところがだめである。貴様が行つて宍戸左馬介と桂と兩人に貴様の論を十分にいへば分る。御苦勞ながら行つて呉れぬか。』

といふ。そこで予は、

『よろしい、行かう。』

といふので、駕籠に乗つて備前の岡山まで來た。

ところがもう戦争が始まつて仕舞つて、負けてどんく歸つて來るところだ。品川彌二郎などにも途中で逢つた。長門守は岡山まで來て、其處から播州の室津へ行き、あれから上陸することになつた。前田孫右衛門は、御直目付か何かだらう、その時は君側であつたと思ふが、陸

を室津まで行つて長門守と一緒に上京する積りであつたところが、どんどん戦争が始まつた。その戦争が濟んで二三日経つて、予は岡山で彼と一緒になつた。

ところで前田が泣くのだ、どうも困つた、毛利家の存亡に關するといつて老人泣いてゐる。泣いたところが仕方がないから、まア御一緒に歸りませうと、前田と共に岡山から引返した。その中にみな引返して來るに相違ないといふので、室津へ行かずに直ぐ三田尻へ歸つて來た。

ところが丁度松島剛藏が水師提督といふので、艦に乗つてどうやら播州邊まで行つて敗報を聞いて後へ引返したところだ。その中に長門守も三田尻へ歸つて來られて、三田尻は大騒ぎだ。

山口へ一遍歸つて、井上と話をしなければ納まりが付かぬといふので、三田尻から山口へ歸らうとしたところが、何でも柘邊であつたと思ふ、老公が三田尻に會議があるといふので山口から出て來られた。京都へ出掛けて半途で歸つたのと、京都で破れて歸つたのとを三田尻へ集めて、この先きどうするといふ會議があるので老公が出て來られたのだ。それに逢つて予は途中で御辭儀をして、山口の方へ過ぎた。

ところがその後から中村道太だの（何でも佐久間佐兵衛もゐた）長嶺内藏太だの、政府の參

政連が四五人連れで、君公に遅れて歩いて来た。それに遇つたところが、一寸此所で話をしなければならぬといふので、茶屋へ寄つた。どの茶屋であつたかよく覚えぬ。話といふのは、この容易ならぬ折柄に西洋人が馬關を砲撃に来ては耐らぬ、あれを止める工夫をしなければならぬが、どうじやろといふやうな事だ。前に和議を肯かなかつた連中が、さういふ事をいひ出した。ところで井上はどうかと聞いて見ると、井上は攘夷論になつて了つて相手にならぬといふ。それはどういふ譯かと聞くと、どういふ譯か分らぬといふのだ。そこで色々話をして、ともかくも井上に面會して、その上で三田尻へ出て行かうといふ約束をした。

それから山口へ歸つて、井上に逢つた。

『愈よ収まりが付かぬ事になつたが、政府の役人らから聞くと、貴様攘夷論だといふが、どういふ譯か。』

と聞くと、

『それはその通りに違ひない。あれ程に吾々がいふのを聞かずに、防長は焦土となつてもよいといふ様な事をいひをつた者が、京都の敗報を聞いて、俺に出て呉れといふ。政事堂へ出たら

どういふ手段を以てこれから嚮きやつてよいかといふ事で、實に面色土の如しだ。そこで貴君方の豫ての御注文通りがよからう。防長を焦土となしてもよいといふことであつたから、焦土となるまで遣るが可い、事茲に至つては最早和議論はやられぬ。百年の後、長州人は實に頑固で譯の分らぬものであつたが、兎も角も勤王で滅亡した、といふだけなりとも歴史に遺るだらう。その方に御手傳を致さうといつたのだ。吾々があれ程いふたに肯かずにやつた奴らが、今になつて乃公に、善後策を諮るなどは以ての外のことだからさういつてやつた。』

『それは不可ん。兎に角お互に生命を賭けて歸つて来た以上、どうしてもお互が所論を以て救はれるだけ救はう。』

とうとう同道して、二人で三田尻へ出て来た。ところがその晩も政府の參政や何かの會議があつて、どうしてもこれは横濱から軍艦の襲來するのを止めて呉れなければならぬ、どのやうな手段方法を以てもやつて呉れといふ相談だ、その席に松島剛藏もゐた。ところで京都であゝいふ騒動をせぬ前でも、陸路を長州人が通行することは難かしかつたのに、今日迎も無事に横濱へ行けやうがない。そこで、長崎へ行つて外國船へでも乗つて行くといふやうなことにでも

しなければならぬ。しかし行くにしたところが、今日となつては、どういふ事で折合ふと向ふでいふか考へ付かぬ、その邊も考へて見なければならぬ。

『先づ吾々の行く前に、いづれ此方から行つて話をするといふことだけでも、先へ通じて置くやうにしなければならぬ。東海道を取つてなりとも、吾々が手紙を先へやつて置いて、此方が行くまで砲撃に来て呉れるなど云ふ差止手段を探るがよからう。』

といふ相談をした。ところが松島が口を出して、

『どうも君らの議論は實に弱い議論だ。この危急の際に、そんな因循なことでは不可ん。是非戦闘をやつて呉れなければ不可ん。』

といひ出した。

『貴様、水師提督などといつて何事だ。京都まで行きかけて、中途から引返したさまは何事である。』

といふやうなことで大喧嘩になつた。

其所へ脇から口を出す者があつて納つたが、その事は井上がよく承知してゐるに相違ない。

それから、山口へ歸つて、どうかしようと思つてゐる中に、どうも長崎へも一寸行けない模様になつた。京都で騒動をしたから、何所へ行つても幕府の者に囚へられる。外國船でも通行すれば乗つて行くが、外國船は馬關を通らぬことになつてゐるから困つてゐた。

ところでそれから餘り月日が経つてをらぬことだが、周布政之助、あれが丁度押込を食つて吉富藤兵衛(簡一)の隠居所にゐた。その周布の許へ予は行つて逢つた。

『今日どうしても攘夷といふことは不可ん。これをやれば國を滅すやうなものだ。』

といふと、

『それは貴様知れたことだ。國と國とは軒を並べた家のやうなもので、交際はぬといふことは出来ぬ。當然の話じやないか。』

といふ。

『それでは今日、かういふ事をしてゐては收まりが付くまい。』

『如何にも仕様がなない。』

といふやうな話をして歸つた。

その時は瓦屋にゐたが何でも夜中だつたと思ふ、政事堂から急御用であるから出て来いといつて来た。出て行つて見ると、周布がたゞ一人政事堂に出て居た。

『何事ですか。』

と聞くと、

『姫島へ軍艦が来た。』

『それは来るでせう、来る筈であるから来る。』

『何とかして戦争の起らぬやうな、豫防策を講じなければならぬ。』

『どうも今日に至つては難かしい。』

『さういはずに何とか盡力して呉れ。』

『それではして見よう。』

今度は條件を書いて、君公の書簡にして、第一に下の關で砲撃を止めること、西洋人の上陸を自由に許すこと、薪水食料を與へること、いふやうな箇條で、勝手に物を買はせたり何かする事にし、

『斯様な事ではどうだらう。』

『それでよからう。』

『ついでに君公の印判を得なければならぬ。』

『それが六かしい。ともかく貴様その書面を其所で拵へて見ろ。』

といふ様な譯で、その箇條書を拵へて君公の印判を捺して貰つた。ところが既に夜半過ぎだから翌朝でなければ行けぬ。

『誰か一緒に遣つて貰ひたい。』

といふと、

『誰でも好きな者を連れて行け。』

『それでは松島剛藏をやつて呉れ。』

『それはよろしい。』

といふ譯だ。

それから飛脚を三田尻へ出した。バッテリーで行く用意をさせて置かなければならぬといふ

ので、翌朝三田尻へ予は出て行つた。松島は御馳走を拵へて待つてゐた。

『今度君がやるのだ。』

『俺はたゞ附いて行くのだから君やり給へ。』

『いやさういつて呉れてはどうもならぬ。ときに先日の議論はどうだい。』

『イヤ、あれは取消して呉れ。』

といふやうな話だ。

松島のところで酒を飲んで晝食を攝つて、それから端艇に乗つて二三里も出たらうか、さうするともう午後四時頃だ。軍艦はみな煙を立て、馬關の方へ落ちて行つた。迎も追つ駆けたところが、バッテリーで追つ付く話ではないから引返せといふことで、それから三田尻へと歸つた。急いで歸る必要もないので、その晩は三田尻へ泊つて、翌日山口へ歸つた。

ところが、軍艦が馬關を撃つたものだから、大騒ぎになつてゐる。政事堂へ出て見ると、みな寄つて困つてゐるといふ場合だ。ところで井上はどうしてゐるかといふと、馬關へ軍艦が押寄せたといふ注進があつたので、馬關へ行つたといふ。

その中に予の泊つてゐる山口の宿屋へ、高杉が出て來た。これは萩で一旦牢へ入れられてゐたのが、少し寛るんで、自分の宅の座敷牢へ入れられてゐたのだ。西洋から歸つて以來、井上と二人で、高杉を此方の仲間に引込まぬと、何かに付けて困るから、彼だけは引込まうといふ相談をしてゐた。そこで座敷牢へ這入つてゐる中に、井上が萩へ行つて、馬關砲撃の起る前に會つて見た、ところが高杉も吾々の論に賛成だが、牢へ入れられてゐる時であるから、どうもならなかつたのだが、この時山口へ出て予の宿屋へ一寸來たのである。

予は西洋から歸つて逢はずだつたから、

『やあ久し振りだ。』

といふと、高杉のいふには、

『乃公は罪があるといふので牢へ入れられたのだが、その罪を許すといふこともなく、御用があるから來いといつて呼びに來た。來て見たところが、何が何だか理由が分らぬ。誰に會つて聞いても分からぬから、これから一つ馬關へ出て行つて見ようじゃないか。』

『それでは一緒に行きませう。』

といふことで、その日の夕方から駕籠を備つて、二人で馬關へ出掛けた。さうして何でも小郡邊へ行つたところが、大砲の響がどん／＼聞えた。これは予が、軍艦が馬關の方へ落ちて行つたのを見た翌日の夕方だ。それからは駕籠に乗つて行つたところが、山中といふところへ行くと、よいしょ／＼といふ駕籠の掛聲。これは長府の者で五六人具足を著て白鉢巻で白木綿を駕籠の中へ下げてそれに吊下つて乗つてゐる。

『どうした。』

といふと、
『今日夕方より戦争が始まりましたに付いて、御本家様へ御注進でございます。』
と答へた。

それから船木の近傍まで行くと、また駕籠が一挺やつて来た。誰かと思ふと井上だ。それから高杉と三人で、路傍へ駕籠を据へて相談した。

これは井上の議論だが、今朝軍艦へ行つたところが、到底話が着くどころの段ではない。サトーなどのいふには見る通り戦闘準備は整つて居る、弾丸も何も甲板の上に出してあるから、

今この弾丸を御進物だといふやうな話で、相手にならぬから歸つて来た。ところが果してやり出した。今壇の浦を駕籠で通つて来たら、弾丸は思ひの外利かぬものだ、始終頭の上ばかり通り越して居る。今此所で戦争を止めさせられでもしたら大變であるから、歸つて君公の御出馬を勧め、一つ腰骨の折れるまでやらさにはあ不可ん」といふ話だ。それはよからう、同意しやうといふことで、それから駕籠に乗つて山口へ歸つて来た。

艦上の和議談判

その翌日だつたかに、御前會議を願つた。かういふ時には直ぐ行はれるものだ。御前會議で、さて戦争の起らぬ以前なら兎も角も、最早戦端を開いた以上は、防長の士氣を作興して十分におやりにならなければいけません。それには君公自から御出馬にならなければといふことを三人で申した。それは至極尤だといふことになつて、井上は直ぐに小郡の奉行と

いふやうなことをいひ付けられた。それで君公は出馬して、その翌日かに小郡まで出らるゝことになつた。

所が高杉がいふに、

『井上は小郡の奉行になつて行つてゐるが、お互に此所で彷徨いてゐると、又縄がられて和議論をしようなどいふから、戦地へ二人で行かうじやないか。』

『それはよからう。』

といふので、その頃ミネー銃といふ鐵砲を、四百挺ばかり買つて政事堂にある。それを一挺づゝ借りて、君公の厩へ行つて馬を一疋づゝ出して之に乗つて行かうといふ。

戦争の始まつた二日目に馬に乗り出して、その日は小郡に泊つた。三日目位かに清末の近傍へ来た。途中で八幡隊などに逢つた。隊長は堀眞五郎だが、垂衣を着て烏帽子を冠つて、お祭りみたやうに幟などを樹て、馬關の戦争へ出て行くのだ。それ等乗り越して清末の近傍まで行くと、君側の御小姓で誰であつたか忘れたが、二人が早馬でやつて来た。急に御用があるから是非共直ぐ歸れといふ。仕様がなから歸らうといふので、小郡まで歸ると、小郡に世子が

出てゐて、和議をするといふ話になつたのだ。

これは困つたものだ、これではまた収まりが付かぬ。とはいふものゝ、政府が是非さうしなれば不可んといふ勢で、高杉と井上と予と三人にいひ付けるといふのだ。君公は、小郡の勘場といふところに出てをられて、權謀を以て一時和議をするとか何とかいふ御書が出た。その事は井上も記憶してをらうが、さういふ意味の御書が出た。それで和議の事を貴様等にいひ付けるから、やれといふことだ。

すると高杉は、

『どうも今日に至つて、權謀を以て一時和議をするといふのはよろしくありませんまい。』

といふ。それでは君命に背かぬかといふやうなことで、割腹仰付けらるゝより外はないからさういふ譯ではない、それならばやらうといふことになつた。(この時井上が餘程激論し)

和議をすることになれば、どうしても休戦しなければならぬが、兵隊等はそれに背くかも知れぬといふと、それはみなそれ〴〵手配してあるといふ。何でも其の時に山田とか毛利登人とかいふやうな君側にゐる重役の先生が出て行つて、かういふ御趣意であるから、砲撃すること

はならぬ、命令を守れといつて壓へ付けて置いて、予らの方に報知するといふことになつた。其の翌日であつたらう。奇兵隊などがやつてゐた前田の臺場などは打毀されて、陣屋も何も自分の方で火を掛けて焼いた。山縣は鐵砲で怪我か何かしてもう此方は負けて仕舞つたのだ。それから吾々は長府の城へ這入つて、その報知を待つてゐた。長府の城で晝飯か何か食べてゐると、西小文吾といふ、長府の家老が出て来て、

『御本家様に於ても、今日と相成つて和議をなさるといふことは甚だ聞へぬ。』

といふやうなことをいひ出した。さうすると高杉は、

『その御議論は甚だ分らぬ。それならば今日までに、何故貴殿は討死なさらぬ。』

といふやうなことで、大喧嘩だつた。

丁度城山の後の出張つた所へ登つて見ると、臺場といふやうな工合になつて、其處に桶のやうに竹で縛つたものがある。それを大砲のやうに見せ掛けたといふやうなことで、實に抱腹の至りだ。向うを眺めると、軍艦がずつと馬關の方へ行つてゐる。さうして一艘の軍艦から馬關の町へボンバルドメントだ。

これは大變だと思つて、高杉と井上に向ひ、

『先方で承知するかどうか分らぬが、俺が先きへ行かう。さうして馬關を焼かせぬだけの防禦をしなければならぬ。』

大小も何も脱ぎ捨て、仕舞つて、漁船一艘を傭つてそれへ飛乗つて一人で行つた。話がつけば軍艦から大砲を一發打たせるから、それを合圖に出て來いといふ約束で、出て行つた。

それからコンクエストといふ七十二門ばかり大砲の備はつてゐる一番大きい船へ行つたら、それは旗艦ではなかつた。番兵が嚴重に付いてゐて却々上げないから、フラグシップはどれだと聞いたら教へて呉れた。ユーリヤルスといふ軍艦で、それへ往くと、戦争中だから却々嚴重だ。サトーに逢ひたいといつたら、サトーが出て來て、

『伊藤さんどうです。もう戦争はあぐみましたか。戦争にあぐんだから、和議の相談に來たのだらう。まあ上れ。』

といふ。船長はキャピテン・アレキサンドルといふ人で、丁度足を撃たれて、療治をしてゐる。貴方の國の人がこんな悪い事をしたといふやうなことであつた。水師提督に會ひたいとい

つたら、

『水師提督は陸の臺場の砲を取る差圖をしてをります。』

『それを早く呼び返して呉れ。』

よろしいといふので、合圖をすると歸つて來た。そこで第一に、

『馬關の砲撃を止めて呉れ。』

『それはよい。しかし和議をするといふのはどういふ譯だ。君公が出て來たか。』

『君公は病氣で出て來られぬ。』

『君公が病氣なれば、その代理が出て來なければならぬ。』

話をしてゐる中に、高杉が垂衣を着て、ひら／＼漁船へ乗つてやつて來る。丁度印度人か何かやるやうな有様だ。さうして高杉と井上とが來たから、三人で談判を始めたが六ヶしい。何でも和蘭の水夫が海へ陥ちてその死骸が知れぬ、それを何日の中に捜し出して呉れとか、大砲を残らず分捕しなければならぬとか、和議の調ふまでは戦争の引續いたものと思ふとか、姫島を占領するとか、色々難題をいふ。

それらはみな斷はつて仕舞つたが、大砲を取るといふだけはどうしても肯かない。仕方がないから、今慥かには覚えぬが何でも十二三箇所あつたが、それも歸つていなければ相談が出来ないといふと、和議をするに委任状を持つてゐるかといふ。それは持つてをらぬといふやうなことで、結局誰か足下ら三人の中で一人残つて、大砲を取上げる世話をして呉れといふのだ。井上が俺が残らうといつて残つた。

予と高杉と二人でその事をいひに、君公が出てをらるゝ船木の勘場に行つた。其所で政府の者とも相談して、是非今度はこちらの事でやらなければならぬといふ所見を君公に話した。ところが久保斷三が船木の御代官で、それが高杉と予に一寸來て呉れといふので行くと、

『いや大變な事が起つた。いま足下らを暗殺するといふ者がある。』

といふ話だ。

それは後に、大村を暗殺した上代といふ御楯隊の者やその仲間、京都で負けて歸つて來た連中だ。十何人かゐて、それらが暗殺しようといふのだ。予と高杉は大いに驚いて、久保に、『政府の者は何といつてゐるか。』

と尋ねると、

『政府ではたゞ困つたものだといつてゐる。』

との返答だ。それで高杉は、

『これは不可ん、政府の奴らからしてそんなこといふ法があるか。今から逃げよう。』
といふのだ。久保もその方がよからう、就いては代官の手の内から百兩づゝ遣らうといふので、それを持つて直ぐに脱走した。

どの位の道程であつたか、闇の夜で二人はどん／＼逃げた。さうして久保の周旋で、田舎の百姓の可なりな金持の家へ潜むことになつた。何所であつたか覚えぬが、今でもその家ではこの事をいつてゐるさうだ。

そこへ泊つて高杉が歎息していふ。

『どうしても毛利家は亡びる。だから朝鮮へでも行つて、他日毛利家の子孫を迎へて家を嗣ぐだけの事をやらうぢやないか。鄭成功の流儀だ。それより外に仕やうがなからう。政府の奴らは犬か畜生のやうなものだ。吾々がこの大事に任じてゐるのを、眼の前にみす／＼殺さうとす

る者があつても、それを捨て置くなどとは實に怪しからん。』

翌日も歎息話をした。しかし外國へ出るといつたところが金は持たず、金を引出す工夫も六ヶしいといふやうなことで潜んでゐたが、予らの逃げたあとは大騒ぎになつた。どこへ行つたか分らぬといふので、急に飛脚を立て、井上を呼びにやつて井上が歸つて来た。

その中に予らを暗殺しようといふ者らを取鎖めた。ところが井上が歸つて来て、

『怪しからぬ次第だ。今度の始末は、自分一人では逆も出来ぬ。是非高杉と伊藤を尋ね出して來なければ不可ん。』

と怒鳴り出した。なんでも久保が在所を知つてゐるに相違ないといふので、久保を責めた。

久保が白狀に及んだので、君公の御使として井上と今の宍戸の二人が、予らの潜んでゐる百姓家へ来た。君らの生命は、君公が受合ふといふ話だから、是非歸つて呉れといふのだ。歸つて三人でやつたところで仕方がない、政府の奴らを引つ張り出してやらうといふことになつた。

歸つてから、家老とか、參政をしてゐる榊彌八郎とか、長嶺内藏太などをみな連れて、何でも十何人かで行つた。さうして軍艦で談判を始めた。大體はさう六ヶしいこともなかつたが

三百萬弗の罰金と云ふのに當惑した。うんともすうとも返答が出来ない。

そこで予はサトーに相談してから、一同に向つていつた。

『これはどうでも、折合つたが宜からう、到底出来ない事だが、折合はぬといへば、和議の談判は結局破裂しなければならぬ。それ故これは一つ諾といつたらどうだ。私に別に考へもあ
る。』

『それなら諾といはう。』

といふので、談判が結了した。

それから間も無く、防長兩國で三百萬などといふ大金を出すことは出来ぬが、あの時は平和を求むるに急なるの餘り承知した。實は到底出来ないと思つたといふことになつて、予一人では不可んから、井原主計といふ寄組の者と、それから宍戸と杉と予とが横濱へ行つた。英吉利の軍艦と和蘭の軍艦へ行つて頼んだ。予らは横濱の街を歩くことも出来ぬから、英吉利の方で警衛して呉れて、さうしてその談判を始めた。

『それはよろしい、足下達が心配するに及ばぬ。幕府の方と談判をして、先日いひ出した償金

は、幕府の方から拂はせるやうにしたから心配には及ばぬ。』

『それはどうも有難い。』

といふやうなことで、此方から土産物などを持つて行つたりしたものであるから、彼方からも何か貰つて、軍艦に乗つて馬關へ歸つて來た。

ところが昨夜か一昨夜、周布は割腹するし、昨夜井上は暗殺されたといふ譯だ(井上の遭難の夜の曉方に周布は自殺せしりな)。直ぐに早駕籠で飛んで山口へ行つて見ると、俗論蜂の如く湧いてゐるといふ有様で、井上はやつと施術したばかり、肩息でゐた。

『これでは己れは死ぬかも知れぬが、君と己れと二人死ぬると闇の夜になるから、此所に長くゐては不可ん。早く馬關へ歸つて呉れ。さうして一人は生きてゐなければならぬ。』

といふ。井上が暗殺に遭つた理由といふのは、彼が劇しい激論をやつた。井上はその時分御政務座といふものになつてゐたが、俗論がかう起つては始末が付かぬから處分しようといふ論を、何でも宍戸備前であつたかその前でやつた。その他の者にも言つたか知らぬが、それが俗論派の方へ漏れた。それでやられたのだ。

そこで予は、馬關も少々危険なので、政府へ少し兵隊を借りることを申込んだ。前に京都で來島に屬してゐた角觥の隊がある、彼らをやらうといふことになつて、四十人もゐたらう。それを引連れて馬關へ行つた。

さうしてゐると、幕府から追討といふので尾張大納言が出て來た。京都で破れ、馬關で破れた同年だ。尾張大納言は藝州にゐて、成瀬隼人がやつて來た。君公は俗論派の方が萩へ連れて歸り、棕梨藤太などが參政になつて、どん／＼正義派を逮捕した。三家老に割腹を申付けたりその他の者は縛つて牢へ打込んだりした。

高杉は、和議の談判を濟ますと萩へ歸つて仕舞つた。何でもこれは議論が沸騰するに相違ない、面倒くさい位に思つたのだらう。ところでみなが縛らるゝので高杉も縛らるゝに相違ないと考へたものと見えて、ボンと脱け出して、筑前に行つて仕舞つた。今でいふと夜の二時頃に宅を逃げ出すと、四時頃には捕手が來たさうだ。その時に、「一杯は安宅の關のこゝちなり」と發句を詠んで出てゐる。さうして山口へ極く潜行で來て、毛利登人か誰かのところへ來た。足下も一緒に逃げようといつたが肯かぬので、慥か久保無二三が附いて筑前へ行つて仕舞つた。

(井上候の誤によると高杉は)

井上は怪我をしたあとであるから、親類預けといふことで、山口の親類の座敷に這入つてゐる。さうかうする中に、前にいつた成瀬隼人がやつて來て、山口の御屋形とかいふ御城のやうなものを毀つ眞似事をする。君公は萩で天樹院へ麻上下で御出になる、所謂降服だ、降服といふことで歸つて仕舞つた。予は丁度山口に出てゐたが、あの時に竹内正兵衛が萩に歸つて殺された。予は歸ることを頻りに止めたのだ。歸れば牢の中へ打込まれて仕舞ふから、歸らぬ方がよいといつたけれども、君命で招びに來たのであるから仕方がない。歸ると果して牢に入れられて、斬られて仕舞つた。

長州の政府打倒の擧兵

一

それからよく順序は覚えぬが、何でもその以後だと思ふ。

山口近傍にゐた兵隊がみな山口に集まつて、これは不可んから山口を引揚げようといふ。三條さん達を連れて、さうして奇兵隊だの、予が預つた角艦隊も一緒だつたと思ふ。それらが護衛して、長府に移つた。諸隊はみな寺などを借りてゐた。俗論派の政府では、正義派の役人を斬つたり牢へ入れたたり、何かの始末が済んで仕舞つたところだ。

その時分予に屬してゐる角艦隊は人数が少い。御楯隊を御堀が持つてゐたが、己れの方の人数が少いから一緒にしようといふので、長府の寺へ一緒に置いた。予は大概馬關の方へ出てゐ

た。馬關には寺内といふ今の寺内中将(後の元)の親父だが、それが何でも御目付をしたか、馬關へ出てゐた。この先生御納戸方の御頭だが、外國人が始終やつて来て、予がをらぬと困る、俗論の方の親方分ではあるが、予はその事で彼と交際つてゐた。

さうしてゐると、高杉が長府へ歸つて來たのだ。

『貴様らは何をしてゐる、此所で兵を擧げて俗論を討たんければ、長州は滅亡する。』

といふ論でやり出した。赤禰武人が奇兵隊の總督だが、此奴旨くやつて、俗論の方へ通じ、萩へ行つて俗論政府と相談をつけてやるといふので、萩へ出て行つた。山縣、福田、平らは赤禰が歸つて來るのを待つてゐると、其所へボンと高杉が歸つて來て『貴様らは何をして居るか』と雷を落したのだ。

丁度予が長府から一寸馬關へ歸つた折で、何でも十二月の十六日といふやうな日であつたと思ふが、高橋熊太郎といふ浪人がゐた。それは來島に従つて京都へ行き、遊撃軍と唱へた浪人の残物仲間、その残物のおもなる棟梁は、今日ゐるのでは河瀬眞孝だが、彼らと高杉は、段々いひ合して、到頭戦端を開くといふことになつた。それで十二月十六日と思つてゐるが、

雪が降つてゐたその晩に、その高橋熊太郎といふ浪人を高杉が使に寄越して、今夜兵を擧げるから是非歸つて来いといふのだ。

そこで長府へ歸つて見ると、諸隊との談判が中々困難だ。例の遊撃軍だけは纏まつてゐる。

河瀬らがみな高杉に同意をしてゐるから、それだけの人数は擧つてやるといふことで、

『君も力士隊を持つて居るから一緒にやらう。』

『よからう。』

予は自分の隊が功山寺といふ寺の隣りの寺へ、御堀の隊と一緒に置いてあつたから、其所へ歸つて力士隊の奴らに今夜出るのだから兵糧の準備などをしろといひ付けて置いて、高杉のゐる遊撃軍の方へ行つてゐた。所が奇兵隊の方では、もう少し待つて、共にやらうといふ論がある。高杉は待つてぬといふ。なか／＼その議論が着かぬ。高杉はあゝいふ流儀の男だから、是非やらうといふ。河瀬や予も、よろしいやらうといふことになつた。

夜半時分であつたらう、これから出ようと勢揃ひをして、三條さんなどが功山寺に泊つてゐるゝから、御暇乞をしようといふことになり、高杉と河瀬と、それから松原音藏も来てゐた

かと思ふが、何でも四五十人で出掛けた。ところが今の宮内大臣の土方と水野丹後といふ御家老みたような者がゐて、もう夜半時過ぎだから眼を摺すり／＼起きて来た。

『三條さんは眠つてござるから御起し申さう、その間に酒を一杯飲まさう。』

といつて、重箱の隅に煮豆の食残があるのを出した、飲んでゐる中に、三條さんが起きて来られた。

『吾々はこの俗論を傍觀してゐる譯に參らぬから、兵を擧げて馬關へ出る。馬關を取つて根據地として俗論と戦ふ。それで御暇乞に出た。』

御暇乞をして庭へ下りて見ると、兵隊が整列してゐる。

予は御暇乞に出る前に、豫て兵糧の準備をいひ付けて置いた功山寺の陣屋へ這入らうとしたら、門が閉めてあつて這入らせぬ。誰であつたか一人内から出て来て、

『大變です。御堀さんが銃器も何もみな取上げて、門外へ一人でも出る奴は斬るといふことですから、お歸りになつては大變でございます。』

『さうか、しかし己れだけに行く。』

と、高杉と一緒に三條さんのところへ上つて、出て来て見ると、チャンと遊撃軍だけは揃つてゐる。大砲が一挺あつた。森重謙藏が大砲方で後から来る。予らは馬に乗つて、高杉が總大將に進む。雪が非常に積んでゐる。

其所へ福田良助がやつて来て、雪の中へ坐つて高杉に向ひ、

『今日だけは是非お止りを願ひたい。』

『さういふ譯には行かぬ。』

と問答をしてゐると、森重謙藏が後方から、總督お進みあつたらよからう、と大きな聲を出した。そのはづみに、すつと先きへ出て仕舞つた。何でも三十人か四十人ゐたらう。予の力士隊の奴らも、塙を乗越へて忍んで出て予等に追付いたのが十五六人あつた。

馬關へ行つたのが夜の未明だ。馬關には奉行がゐる、寺内の老爺などもゐて、たゞ食ひ物を取るのが目的であるのだから、追除けさへすればよい。人を殺すのは悪いといふので、空鐵砲を打つと、みな後ろの塙根を越えて通つて仕舞つた。それで奉行所を取つて、後ろの寺を本陣にしてゐた。遊撃軍の中に妙な奴がゐて、地雷火などを拵へる。それが地雷火を拵へて、家の

廻りへ掛けたりした。そのうちに高杉が、

『俺が行つて三田尻の軍艦を取つて来る。己れと共に死ぬるといふ者だけ、一緒に来い。』

と、浪人の中十八人をすぐつて、それを三つに手分けをし、一艘に六人づつ乗つて行つた。

先方に着くと、

『今の政府は俗論の掌中にある。この儘では長州の勤王は滅却する。吾々はどこまでもこれが恢復を圖らなければならぬ。それに足下らは御同意ならば、即刻碇を上げて馬關へ御出でなさい。御不同意ならばお互に茲で刺違へよう。』

といふ論で掛つた。その勢に驚いて、海の中へ飛込んで逃げた者もあるが、船將らはみな同意した。佐藤與三などもその中だらうが、山崎なんとかいふのもゐた、それらはみな、同意した。そこで十八人で、三艘の帆前船を奪つて仕舞つた。さうして馬關へ持つて来たのだ。

それで、今度は、俗論が馬關へ討つて来るだらうから、その船を海に浮べて海の上の臺場に、陸を来る奴を撃つさうといふ陳立に掛つた。ところがどうも人数が少い。これではどうにもならぬといふので、馬關で募つて百二十人位集まつた。その兵を予に管轄せよといふことで